

IV. 遺構と出土遺物の考察とまとめ

1. 発見された遺構について

本遺跡内からは、竪穴住居跡46棟、竪穴状遺構3、掘立柱建物遺構6棟、東西と南北方向に走る大溝が各々2本ずつ計4本、その他小中溝、溝状遺構合わせて25本前後、遺物を伴う円形及至楕円形状のピット多数等が発見されている。竪穴住居跡46棟中、平安時代の時期に位置するであろうと把握される遺構は9棟位であり、残る他の多くは奈良時代に属すると推される。重複関係を持たない単独遺構は調査地内の四方にみられるが、棟方位等で区分される数群が西縁側に偏っていることなどからみて、調査地外西方向への連なりが想起される。また、東方向にあっても特に溝で区画されないという現象面や遺構のあり方などからみて、やはり同様の連なりや延長が推察される。北縁部は間近に沖積面を臨む段丘崖のため、東西に走る第1号溝を越えることはなく、南側もまた分布の希薄性からみて集落の南限付近と思われる。従って、本集落の調査は東西方向に広がる一部の範囲に限定されており、この意味では集落そのものの全体的あり方の把握や特質を解明するには不十分な要素のあることは否定できない。しかし、平安時代の一時期にも位置づけられる掘立柱建物遺構や大溝のあり方は、集落内において各々有機的な繋がりのあることを窺わせるに充分である。また、各遺構間に於ける重複関係は、調査地のほぼ中央付近に集中しており、棟方位の明確な差異を持つ各遺構の配置などを考え合わせてみれば、遺跡内に於ける占地状況やその規模等がある程度の規画性に富むことが察せられよう。当然、このようなことから、調査区域内に於ける複数の傾向性を抽出することにより、本遺跡の特性がある程度看取されることも否定できないであろう。従って以下については、竪穴住居跡を中心として遺構の区分を試みることにし、更に可能な限り時期差に置き換えてみたい。

(1) 竪穴住居跡

既述の如く本遺跡内では竪穴住居跡と確定された遺構は46棟ある。このうちカマドを有する遺構は27棟、確実にカマドを持たないもの9棟、この他に遺構範囲が調査区外に及んだり他遺構との重複関係にあることなどから不明なものが10棟ある。ここでの分類はカマド方向に視点を置き、カマドを持たない遺構や不明のものについては北壁と南壁の中点を結ぶ軸線を棟方位に置換している。

カマドのある竪穴住居跡はカマドを主とする棟方位から大別して3群に区分される。即ち、

- (a) 群—棟方位をN-4°-E~N-9°-W内に持つ遺構 (b) 群—N-10°-W~N-56°-W内と棟方位が(a)群より西側に振れる遺構 (c) 群—N-86°-E~N-172°-E内に棟方位を持ち、カマドの位置が東あるいは南側に偏る一群、等の3タイプである。これらに該当する遺構を機械的に振り分けると、(a)群には、Bb30・Bi27・Dj27竪穴住居跡、(b)群には、Bd71・Be50・Bf30・Bh77・Bi53・Bj65・Cg06

Da15・Da30・Dd03・Df59・Dg09・Dh56・Dj18・Ea50・Ec30・Eg09 竪穴住居跡、(c)群にはCb21・Cg56・Da56 竪穴住居跡等が挙げられる。

また、カマドの不明な遺構のうち、Bd36・Bd80・Cc53・Ec36 竪穴住居跡等はその棟方向をほぼ(a)群と同じにしており、出土遺物のあり方からみても同群の範疇とみることができる。同様の観点からみて、カマドを持たない遺構の中でCi30・Db33・Ec27 竪穴住居跡等は(b)群に含まれるとよい。

明らかにカマドを有しない遺構(Ci56・Da21・Da56〔新期〕・Dd50・Dc71 竪穴住居跡等)は、N-2-E-N-7-E以内に棟方位を有す。これらは若干東側に偏すものの、ほぼ磁北に近いあり方を示している。Da74 竪穴住居跡はやや西寄りに偏すが、磁北に近いあり方からみて同群と見做して大過ない。仮にこの一群を(d)群とするならば、カマド方向・棟方位でみる限りに於いては、前述の3群を加えて、(a)・(b)・(c)・(d)群のタイプの存在が看取されよう。

以上のような概念で分類された各群は数例の遺構を除いて、ロクロ不使用の遺物を伴出する(a)・(b)群、集落内ロクロ技術が浸透及至定着したと思われる(c)・(d)群とに大別される。一般的には、(a)・(b)群が奈良時代、(c)・(d)群が平安時代として把握されており、本遺跡の掘立柱建物遺構は後者の時期に位置するものである。しかし、この流れは既述の各群が短絡的に(a)→(b)→(c)→(d)群の如くに移行していったとするものではない。既に棟方向から推察され得る方法論としては限界であるが、遺構の規模や配置性、更に伴出遺物等の概念を加えることによって一部群の中に若干の修正する部分が生じてくる。既述した各群の時代性の中で、最も例外的な遺構として(b)群内に分類したBj65 竪穴住居跡がある。これはカマドを北壁に持ち、その棟方向からみて(b)群としたものであるが、カマドの位置は中央よりやや東側に偏し、しかも伴出遺物はロクロ技術の浸透期にあたる頃のものであることから、この場合は(c)・(d)群の範疇に加えられるべきものであろう。また、(b)群に分類されたBf30 竪穴住居跡は、その規模や配置・伴出遺物からみて(a)群として扱えた方が解り易い。更にDg09 竪穴住居跡については、南壁と北壁の midpoint を結ぶ軸線の方位がⅠ期(後述)内に属するものの、カマドの煙道方向がやや西に偏しており、最終的には(b)群として分類している。

以下については、上述の修正部分を加え、各群を深化・統合した形で最終的な区分について記すこととする。

本遺跡の竪穴住居跡は、先に記した通りロクロ技術の有無から大別2時期に区分されるが、遺構面からは最低Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期にわたる重複が想定される。即ち(a)群をⅠ期、(b)群をⅡ期、(c)・(d)群をⅢ期としている。

Ⅰ期は、北壁中央部にカマドを持ち、棟方向が磁北に近い形にある遺構群で代表される。Ⅰ期には、Bb30・Bc24・Bd36・Bf30・Bi27・Dj27・Ec36 竪穴住居跡等がある。この中には、カマ

ドの位置がはっきりしないものや、プランの全容が確認されていない例もあるが、棟方位である程度同期に比定され得る。尚、Bj65竪穴住居跡は先に記した理由で除外してある。

遺構の最小規模は、Bf30・Bi27竪穴住居跡等で、一辺が2m台のものである。一辺3～5m大にはBb30・Bd36・Dj27竪穴住居跡があり、最大規模の遺構は全容が未確認ながらも、残存する部分での南北辺長が7m台にあるEc36竪穴住居跡が挙げられよう。

I期に属する竪穴住居跡遺構は、同群に於ける各々が重複することなく単独のあり方を示している。しかも調査区の西縁側に分布しており、Bブロックに集中する一群と、Eブロック西縁に存す群とに占地区分される。ややI期的な特徴を持つDg09竪穴住居跡(旧期)の周辺は、II・III期に至ってもなお同一の地域を占地使用しており、重複遺構が多いのに対し、特に北西部に存する一群の遺構占地は再利用されることなく廃絶する。これらの遺構は、時期が異なる第13・14号溝によって破壊されるか、あるいはその西側に配置されている。南北に走る第13・14号溝はI・II期より後に作られたものであるが、I期の遺構配置の様相からみて、集落が西側に連なることの他に、溝の構築以前に於て各遺構が既に集落の占地を決定するだけの要因、例えば地目の差があったことでもあろう。この占地区分はII・III期になって逆転するが、少なくとも大溝と重複する遺構を持たないIII期群との関わりで、集落内の遺構がある程度の計画性を持って配置されたことが窺い知れよう。

II期は、カマドを北壁に持つものが通例であるが、不明のものをも含めて棟方位がI期より西方向に振れる一群で構成される。但し、Dg09竪穴住居跡(旧期)のように棟方位とカマド方位がやや異なる例もあり、この場合はカマドの煙道方向に視点を置きII期群中に分類している。

最終的にII期群として区分される遺構は、カマドを有するもので Bd71・Be50・Dj18・Dh56・Cg06・Bi53・Da30・Eg09・Ea50・Df59・Dd03・Dg09(旧)・Da15竪穴住居跡等、カマドが不明または持たないものでCi30・Db33・Bd80・Ec27竪穴住居跡等である。

竪穴住居跡の規模は、一辺が2.9～3m台(Cg06・Ch21・Da15・Dh56・Dj18竪穴住居跡等)、同4～5m台(Bd71・Ci30・Da30・Df59・Dg09(旧)・Ee30・Eg09竪穴住居跡等)、同6～7m台(Be50・Bi53・Dd03・Ec27竪穴住居跡等)の3タイプに分けられる。これらの遺構はほぼ正方形に近いプランを呈し、規模による組み合わせはI期と同様である。

II期の遺構占地は明らかにI期とは異なり、(イ)遺跡内北東部(Bd71・Bd80・Be50・Bh77・Bi53竪穴住居跡)、(ロ)遺跡内中央区西側部(Cg06・Ch21・Cg06・Da15・Da30・Db33竪穴住居跡)、(ハ)遺跡南半部(Ee30・Ee27・Dj18・Dg09(旧)・Dd03竪穴住居跡と、Eg09・Ea50・Dh56・Df59・Da68竪穴住居跡ライン)にまとまりを持って存する。(イ)に於ては、Be50・Bd71・Be80竪穴住居跡とBi53・Bh77竪穴住居跡の組み合わせでもって二段に並列する形にあり、(ロ)に於てはCi30・Ch21・Cg06竪穴住居跡とDb33・Da30・Da15竪穴住居跡ラインがやはり並列する形

にある。また、(Ⅴ)にあっては更に規模が大きくなり、Ee30・Ec27・Dj18・Dg09(旧)・Dd03 竪穴住居跡のライン下に、Eg09・Ea50・Dh56・Df59・Da68竪穴住居跡が直線的に配列され、この場合も二段構えのあり方をみせる。このことは、4～6棟を一単位とするまとまりのあることを意味することでもあり、しかもそれらが並列するというⅡ期の現象面的特徴でもあろう。従って、遺構の配置にそれなりの規格性があるということにも通ずるであろう。

また、(Ⅰ)には一辺が4～7m台、(Ⅱ)には一辺2.9～4m大、(Ⅲ)には一辺3.5～7m大規模の遺構が配置され、Ⅰ期がそうであったように同期群内での重複はみられない。南北に走る大溝は、Da30・Ec27竪穴住居跡を切っていることから、Ⅱ期以降の構築となるが、Ⅱ期に属する竪穴住居跡の大半が溝の東側区分に位置することから、Ⅰ期とは逆の形での占地形態が考えられる。当然、Ⅰ期群が主体的に分布する遺跡北西部分は、Ⅱ期群内に於ける無遺構の空白部分となるわけであるが、同様の空白地帯は遺跡内のほぼ中心付近にもみられる。少なくともこの段階では、遺構の存在しない一帯であり、この部分が集中的に活用されるのはⅢ期に至ってからである。

遺構の構造的な面からみれば、Dd03竪穴住居跡のように支柱穴を6本有する例があり、切妻家屋の出現も考慮され得る。カマドの作りでは、Da30竪穴住居跡のように燃焼部側壁に礫を使用する場合もあるが、Ea50・Bh03・Dd03・Dg09(旧)・Ee30竪穴住居跡等では、土師器の甕を埋め込む方法をとる。また、Be50竪穴住居跡のように支脚に土器を配す場合、Df59竪穴住居跡に於ける燃焼部側壁から支脚に至るまで礫を使用する例などもみられる。

Ⅱ期群内におけるこのような構造的相異や、(Ⅰ)・(Ⅱ)・(Ⅲ)群のような占地性等からくる遺構の多様性は、Ⅱ期群内における全遺構が同時存在するとみなし得るものではなく、その中での時期差を想定させる一面とも成り得る。おそらくは(Ⅰ)・(Ⅱ)・(Ⅲ)の各群が占地する位置にもある程度反映されてくるものでもあろうが、(Ⅱ)群におけるCi30・Da30竪穴住居跡のように、近接した位置にあって伴出遺物の組成が明かに異なる例などもあり、占地の変遷はかなり流動的である。

Ⅲ期は、カマドを有する遺構と明らかにカマド施設を付属しない遺構の組み合わせよりなる。前者にはCd21・Cg56・Da56(旧)・Di09・Bj65竪穴住居跡等があり、一辺3mから6m台までの遺構が含まれる。後者には、Ci56・Da56(新)・Dd50・Da21・Da74・Dc71竪穴住居跡等が挙げられるが、正方形と長方形の両プランがみられ、一辺2.9m～7m台の規模で、大・中・小の竪穴住居跡を配す様相はⅠ・Ⅱ期とほぼ同様である。しかし、遺跡内に於ける占地の状況は明らかに異なり、東西方向に走る第1号・10号溝、南北方向に走る第13・14号溝で区画される範囲内、即ち、遺跡の中央付近から西側にかけて分布している。Ⅲ期内では掘立柱建物をも含めて重複する遺構が集中しており、しかもその占地がⅠ・Ⅱ期の無遺構空白地域にあることから、各期に於いてある程度重複を避ける形で竪穴住居跡が配されたと思われる。そういう中

にあってⅢ期内遺構同士間で重複する例が多いのは、同期に至って占地のあり方が固定化した一証左にも成り得よう。

Ⅲ期内に属する遺構は、Cg56竪穴住居跡内にロクロピットを持つことや、伴出遺物等から鑑みて、広くロクロ技術が浸透または定着した一時期を構成するものとして把握される一群である。同期内にあっては、カマドの有無・位置、重複のあり方などから複数期に細分される要素を多分に持つ。即ち、基本的には、Cg56竪穴住居跡→Ci56竪穴住居跡→Ch53掘立柱建物、Di09竪穴住居跡→Dh12掘立柱建物の先後関係による最低3期にわたる重複と、Cg56・Da56(旧)竪穴住居跡に於ける東壁と南壁の両様にカマドを持つ場合の推移に拠るものである。しかし、その組み合わせは単純ではない。例えば、Cg56・Da56(旧)竪穴住居跡は各々2基のカマドを持つもののCg56竪穴住居跡に於けるカマドの作り替えは東壁から南壁へ変わっているが、Da56(旧)竪穴住居跡の場合はそれと全く逆の推移を経ているのである。東壁南側隅近くにカマドを持つCb21竪穴住居跡や、南壁の東側隅にカマドを持つDi09竪穴住居跡等は、Cg56・Da56(旧)竪穴住居跡のカマドの推移の何れかに関わるものであろうが、出土遺物でみる限りは大差ない。また、Bj65竪穴住居跡のように北壁にカマドがみられる場合もあり、多様なあり方を示している。方向はともかくとしても、カマド施設位置の移行は住居跡内の居住性に関わる利用方法に何らかの変化があったことを示唆するものであり、カマド施設を住居跡内に持たない遺構にあっては同様の解釈が可能である。Ⅱ期の後段にあって切妻家屋出現の可能性を提起したが、それを受けてCg56竪穴住居跡→Ci56竪穴住居跡→Ch53掘立柱建物の変遷の中で、掘立柱建物遺構が出現する以前かその直近頃に住居形態の大きな変化が生じるのであろう。この変遷は、既述の先後関係からみて、カマドを有す遺構群(Cb21・Cg56・Da56旧期・Di09竪穴住居跡等)→カマドを持たない遺構群(Ci56・Da56新期・Dd50・Da21竪穴住居跡等)→掘立柱建物の順に置換されることでもあるが、伴出遺物の差異やカマドを有す遺構とそうでない遺構の組み合わせがあること、あるいはそれらの配置性を考慮すれば、Ⅲ期の遺構のすべてにそれを当て嵌めるのは尚早であろう。

Ⅲ期遺構のカマドを有する遺構の共通性は、カマドの位置が壁の中央にあることはなく、何れの場合も東側及至は南側に偏るものを通例としていることである。これら遺構の配置性は、Ⅰ期・Ⅱ期のそれとは明らかに異なっており、カマドの位置が北壁にあるBj65竪穴住居跡を除けば、Da21竪穴住居跡を中心とする半円形のほぼ円周上に分布しているという現象がみられる。これらは当然のことながらカマドを持つ竪穴住居跡に重複するCi56・Da56(新期)やそれらに類似する形態を有すDd50・Da21竪穴住居跡にあってはほぼ同様である。Bj65竪穴住居跡やカマドを持たないDa74・De71竪穴住居跡は、前群の東寄りに位置し、やはりDa21竪穴住居跡よりほぼ等距離に位置する。Ⅱ期にあっては直線的な並列配置がみられたが、ここではⅢ期内に於ける時期差を度外視すれば曲線的並列ともいえよう。

但し、考え方としては、Da21竪穴住居跡を中心にするというよりは遺跡の西辺を区画する南北方向大溝の後背を意識しつつ、主屋たるDa09掘立柱建物遺構やその付属屋ともなり得るCe03掘立柱建物遺構を囲む形に配したととれないこともない。特にカマドを持たないCi56・Da56(新)・Dd50・Da21竪穴住居跡にあっては主屋の周囲に配されることから、少なくとも主屋が廂を持たない段階での同時存在があり得るかもしれない。この観点で他の掘立柱建物をみれば、主屋を囲む位置にある一群の遺構と重複するDh12・Ch53掘立柱建物は、Da09・Ce03掘立柱建物の一時期より新しいと解されよう。Ch53・Dh12掘立柱建物に建替えないことや、Dh12掘立柱建物の棟方位がDa09・Ce03掘立柱建物よりやや西側に偏すことも、時期差からくる相違の要因とも成し得ようか。更に拡大して解釈すれば、Ca03掘立柱建物は棟方位がDh12掘立柱建物と重なることやその規模からみて、Dh12・Ch53掘立柱建物に近い時期が想定され、この頃にはCb21竪穴住居跡上を壊わす形で第6号溝が配され、何らかの意図を持って集落内の区画をしたものでもあろうか。尚、Ca03掘立柱建物は更に建替えられるが、Da09・Ce03掘立柱建物のあり方とは趣きを異にしており、他遺構の配置性からみても6号溝の南側に集中するⅢ期群のあり方とは多分に異なる要素が残る。この差異を集落内での溝による区画からくる相違としてみるか、あるいは時間差としてみるかについては今の所言明できない。

以上、掘立柱建物の変遷に関わる可能性の一端に触れながらⅢ期群の概要を記したが、掘立柱建物と竪穴住居跡との組み合わせを主とした区分は確定できないのが実状である。また、一部住居跡にみられる先後関係を他の遺構にも適用することは可能であるが、Ⅲ期集落全体の構成や構造的な時間差を組み立てることはやはり困難である。従って、既述の掘立柱建物遺構に関わる内容は、このような解釈もあり得ることの一例として述べているものである。

最後に、遺構の構造からくる相違をもってⅢ期を仮区分してみたい。ここでは、カマドを有する遺構群をⅢ期1群、カマドを持たない遺構群をⅢ期2群、掘立柱建物6棟をⅢ期3群とする(以下についてはⅢ-(1)・Ⅲ-(2)・Ⅲ-(3)の如くに記す)。一部遺構の重複関係から時期的な流れとしてはⅢ-(1)→Ⅲ-(2)→Ⅲ-(3)の順に想定されるが、先にも記した通り全遺構にそのままスライドするには高早である。また、Ⅲ-(1)内ではカマド位置の動きがあるものの、東壁・南壁の移行や北壁に位置する例などからみて、細分する要素はあるものの、時間差を考慮した分類区分は限界である。従って、Ⅲ期内に於ける(1)・(2)・(3)の各群は、各々の中で多少の相違をみせるだけではなく、それぞれが組み合って集落の一単位を構成する場合も考慮され得ることから、一部には確かにⅢ-(1)→Ⅲ-(2)→Ⅲ-(3)のような流れがあったかもしれないが、Ⅲ期に於ける最終的な変遷区分を意味するものではない。

以上、Ⅰ～Ⅲ期の各々についての特徴・傾向性、またそれらから予察されること等について

の一端を記したが、以下については全体的な立場からまとめてみよう。

本遺跡の各遺構は既述の如くⅠ・Ⅱ・Ⅲ期に区分される。これらの区分はそのまま時期区分と見做し、Ⅰ期→Ⅱ期→Ⅲ期の変遷を意味することは異論のないことであろう。

各期にあっては、各々の中で細分される要素があるものの、概ね大・中・小の遺構が組み合う形態が類型化される、このような中において、棟方位（またはカマド方位）と占地のあり方が明確に異なる現象が看取され、その相違そのものが各期区分の決定的要因に成り得ることは周知の通りである。

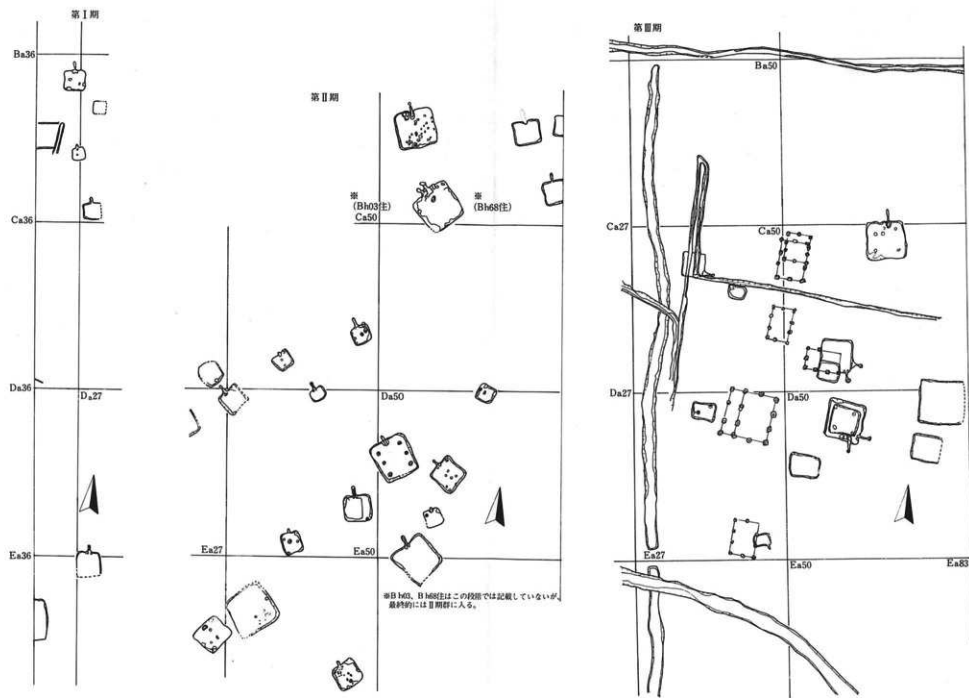
集落にあって棟方位の相違がある程度の占地性をもって配される類例は、今泉遺跡・上餅田遺跡等にも求められよう。これらは^{註2}時期的には本遺跡より古期に相当するが、特に今泉遺跡^{註3}にあっては、カマド方位の相違によって各々の一単位を構成する形にあるといえよう。

本遺跡の場合は、集落の規模が異なっているが、群を構成する一単位が更に分化しているのが特徴である。あるまとまりを持って分散するⅠ・Ⅱ期相当の遺構群の間には当然のことながら隙間が生じてくる。この部分が無遺構空白地帯として扱えられ得るものであるが、これらの空白部分は時期が降るに従って徐々に埋められていく。即ち、第101図時期別集落構成図で示した如く、Ⅰ期はⅡ期によって、Ⅱ期はⅢ期によってその空白部が埋められる。具体的に言えばⅠ期の中央部空間にC130竪穴住居に近い一群が配され、その後他のⅡ期群が同期内で重複しないように配される。更に、Ⅲ期群がⅡ期群の空白を中心に置かれる。このようにして空白部分に新期遺構が順次営まれて行くうち、結果的には遺構のあり方が疎から密に、しかも遺跡内の広範囲に分布することとなる。このⅠ→Ⅱ→Ⅲ期への流れは、少なくとも遺構の動きとしてはⅢ期の前半に至るまでは前代期に関わるものとの重複を避けていくことでもあり、集落内の一単位が同じ場所を占地しないという現象は、逆に一単位そのものが流動性を多分に有していることでもある。このような地区を異にする占地の傾向は、Ⅲ期に至って停止することとなり、以後は大溝による区画と相俟って遺構の定着化が固定するのであろう。Ⅲ期に重複遺構が集中するのはその一証左である。また、この頃には、明確な支柱穴がみられず、カマドの位置にも変動が生じてきていることや、これらに追隨するであろう掘立柱建物遺構出現との絡みから、家屋構造そのものも大きく変貌した一時期であろう。

註1. 第Ⅳ章4の参考資料(2)を参照されたい。本遺跡内のⅠ期は、第Ⅴ群期、Ⅱ期は第Ⅵ群期、Ⅲ期は第Ⅶ群期に相当する。なお、この資料は、相原康二氏が昭和54年末月に脱稿し、内部資料として提示されたものである。深謝する。

註2. 今泉遺跡、岩手県文化財調査報告書第60集、東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ、昭和56年3月

註3. 上餅田遺跡、岩手県文化財調査報告書第59集、東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ、昭和56年3月



第101図 時期別集落構成図

第30表 壁穴住居跡規模・施設等一覧表

遺構名	辺 長(m)		床面積 (㎡)	平面形	棟方位	主柱穴 (本)	壁 高 (cm)	カ マ ド			備 考
	東西	南北						有無	位置	煙道	
Bb24住	2.4	2.3	5.52	方 形	N-7°-E	—	8	無	/	/	第13号溝により中央を切られる。
Bb30住	3.5	3.3	11.55	方 形	N-7°-W	—	5	有	北壁中央	有 無	煙道が第2号溝を切っている。
Bc24住	—	—	—	(方形)	不 明	不 明	7~9	不明	—	—	第13号溝により大きく埋されている。
Bc68住	3.4	3.8	12.92	方 形	N-96°-W	—	2~12	有	西壁中央	有 有	削平激し。
Bd36住	—	4.4	—	(方形)	磁北よりやや西偏小	不 明	4~7	有	北壁中央	無 無	西壁側は調査範囲外。
Bd71住	(4.7)	3.7	(17.39)	長方形	N-17°-W	不 明	15~24	有	北壁中央	有 一	焼失家屋。保存の対象となる。
Bd80住	—	西壁 3.5	—	(方形)	ほぼ磁北小	—	30	不明	—	—	東側は調査範囲外。
Be50住	6.3	5.7	35.91	方 形	N-24°-W	(4)	20	有	北壁中央	有 (有)	西・南・北壁に周溝あり。
Bf30住	2.4	2.2	5.28	方 形	N-20°-W	(2)	4~20	有	北壁中央	有 無	
Bh03住	3.4	3.6	12.24	方 形	N-78°-W	(1)		有	西壁中央	有 無	東壁はピットによる埋没。北壁に周溝あり。掘り出しのテラス状の跡あり。
Bh68住	3.4	3.3	11.22	(方形)	N-3°-E	—	18	無	/	/	北西コーナーが変形。
Bh77住	北壁 (3.8)	西壁 (3.8)	(14.44)	(方形)	N-10°-W	(2)	37	有	北壁中央	有 無	東側は調査範囲外。周溝あり。
Bi27住	北壁 (2.4)	2.7	(5.48)	(方形)	N-9°-W	—	21	有	北 壁	有 無	東側は第13号溝に切られる。北西隅・南壁に埋没あり。
Bi53住	7.1	6.9	48.99	方 形	N-47°±0°-W	(1)	3~24	有	北壁中央	有 不明	大小ピットによる埋没激し。周溝あり。
Bj65住	6.6	6.8	44.88	方 形	N-10°-W	(4)	23	有	壁中央より若干東寄り	有 無	東壁の一部に埋没あり。北・西・南壁下に周溝らしきものあり。
Cb21住	北辺 (4.3)	東辺 4.5	(19.35)	方 形	N-86°-E	—	9	有	東南隅	有 有	第6号溝によって切られている。
Cc53住	3.3	3.5	11.55	(方形)	N-4°-E	—	8~10	不明	—	—	西・南壁が新規ピットによる埋没を受けプランが変形。
Cf77住	北壁 2.7	東壁 3.1	8.37	不 明	N-29°-E	(1)	17~25	有	北東隅	有 無	中央部を第16号溝状遺構に切られる。西側はを埋。
Cg06住	3.3	3.2	10.56	方 形	N-34°-W	(3)	7	有	北壁中央	有 有	Ce03掘立と重複。
Cg56住	5.6	5.75	32.20	方 形	点N-98°-E 新N-172°-E	(2)	18	有	東壁東寄り 東壁東寄り	有 有 有 有	Cl56住、Ch53掘立と重複。クロロピットあり。
Ch21住	2.9	2.8	8.12	方 形	N-39°-W	—	11	有	北壁中央	有 不明	北西隅を第6号溝-3に切られる。
Ci30住	4.2	4.0	16.80	隅丸形	不 明	—	23	不明	—	—	第12号溝により分断される。南壁に周溝の残存あり。
Ci56住	3.5	(3.2)	11.20	方 形	N-5°-E	—	7~8	無	/	/	Cg56住・Ch53掘立と重複。貼床。
Da15住	2.9	2.4	6.96	方 形	N-43°-W	—	21~23	有	北壁中央	有 有	南壁の一部にDa09掘立が重複する。
Da21住	4.2	3.3	13.86	長方形	N-5°-W	—	3~8	無	/	/	P ₁ は貯蔵穴か?
Da30住	南壁 4.1	西壁 4.1	(16.81)	方 形	N-42°-W	—	25	有	西壁中央	有 有	東側1/2部を第13号溝に埋される。
新Da56住	5.2	5	26.00	方 形	N-7°-E	—	(10~16)	無	/	/	旧Da56住内に収まる。
旧Da56住	6.7	6.9	46.23	方 形	点N-171°-E 新N-88°-E	6	24~27	有	東壁東寄り 東壁東寄り	有 有 有 有	新期Da56住と重複。
Da68住	2.9	2.7	7.83	方 形	N-74°-W	—	12	無	/	/	焼土の分布あり。北西壁の一部埋没。
Da74住	北壁 (7.7)	西壁 7.7	(59.29)	方 形	ほぼ磁北に 近し	—	9	無	/	/	埋没激し。南東隅に焼土分布。東側は調査範囲外。

Db33住	—	東壁 3.9	—	(方形)	N-42°±0°-W	—	33~40	不明	—	—	—	西側の地などは調査範囲外、若干第12号溝に思われる。遺溝。
Dc71住	南壁 (4.2)	西壁 4.5	(18.9)	方形	北北東	—	15	不明	—	—	—	東側不明。擾乱激し。
Dd03住	7	7.5	52.5	方形	N-36°-W	6	22~34	有	北壁中央	有	無	Dd50住と重複。貼床。
Dd50住	5.6	3	16.8	長方形	N-2°-W	—	3	無	/	/	/	Dd03住の上に覆り込まれる。北東隅に幾土の分布。
Df59住	4.8	4.85	23.3	方形	N-56°-W	—	22	有	北壁中央	有	有	焼失家屋。
新Dg09住	3.4	3.9	13.26	方形	N-7°-W	—	(10~15)	有	北西隅	不明	不明	旧期Dg09住と重複。掘り過ぎ。貼床。
旧Dg09住	5	4.6	23.0	方形	N-20°-W	(3)	41	有	北壁中央	有	無	新Dg09住と重複。
Dh56住	3.1	3	9.3	方形	N-25°-W	2	14	有	北壁中央	有	無	第9号溝により切られる。
Di09住	3	2	6	長方形	N-151°-E	1	8	有	南壁東隅	有	無	Dh12掘立と重複。
Dj18住	3.5	3.7	12.95	方形	N-23°-W	(3)	33	有	北壁中央	有	無	擾乱あり。P ₁ は貯蔵穴か？
Dj27住	4.2	—	—	(方形)	N-4°-E	—	5~10	有	北壁中央	有	有	第10・14号溝に壊されている。
Ec27住	(8)	(7.3)	(58.4)	方形	N-48°-W	—	22~29	不明	—	—	—	第10・14号溝に壊されている。南・東壁に遺溝あり。
Ec36住	—	東壁 (7.6)	—	(方形)	北北に近いか？	不明	10~22	不明	—	—	—	西側は調査範囲内、遺溝。北東隅に貯蔵穴らしきものあり。
Ea50住	7.0	6.5	45.5	方形	N-52°-W	(2)?	10~22	有	北壁中央	有	有	煙出し部上面が第9号溝によって壊される。
Ee30住	4.9	5.2	25.48	方形	N-54°-W	(1)	31	有	北壁中央	不明	不明	カマド部・南・西壁一部に擾乱を受ける。
Eg09住	4.4	3.9	17.16	方形	N-42°-W	(2)	17	有	北壁中央	有	有	焼失家屋。擾乱あり。南溝あり。
Bg21現状	南壁 (3.1)	東壁 3.4	(10.54)	(方形)	やや西寄りか。	不明	8	不明	—	—	—	西側部分は北壁。南壁西側を第4号溝が切る。

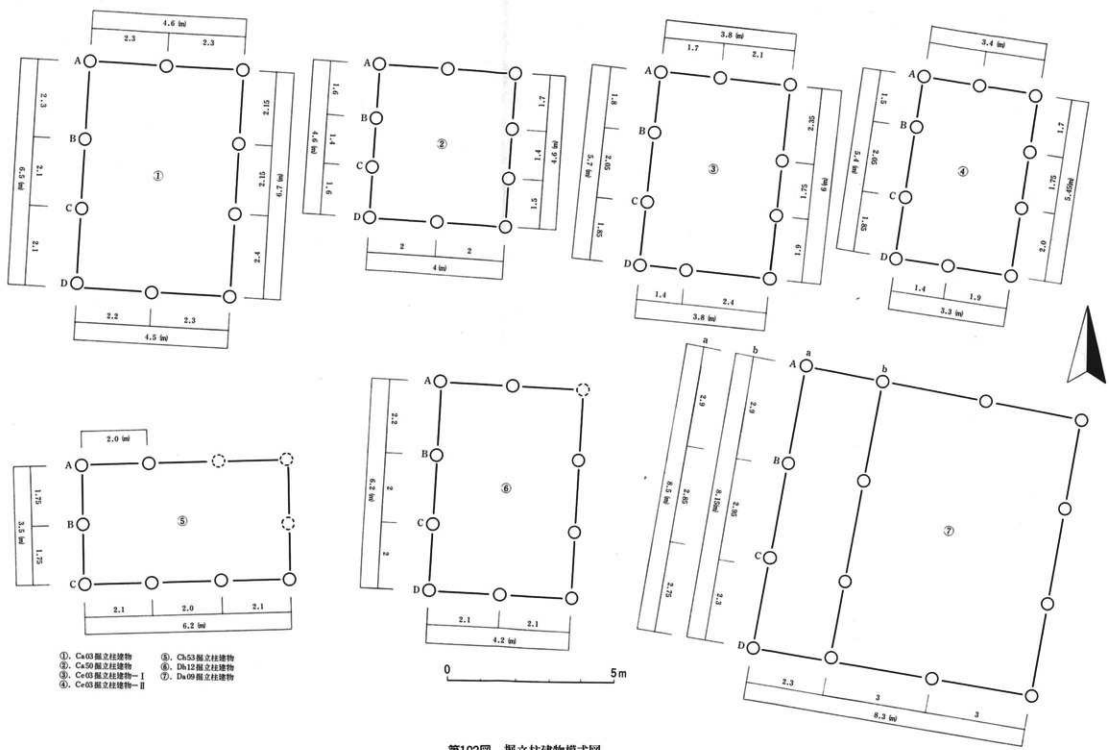
(2)掘立柱建物遺構

本遺跡内に於ける掘立柱建物遺構は、6棟検出されている。

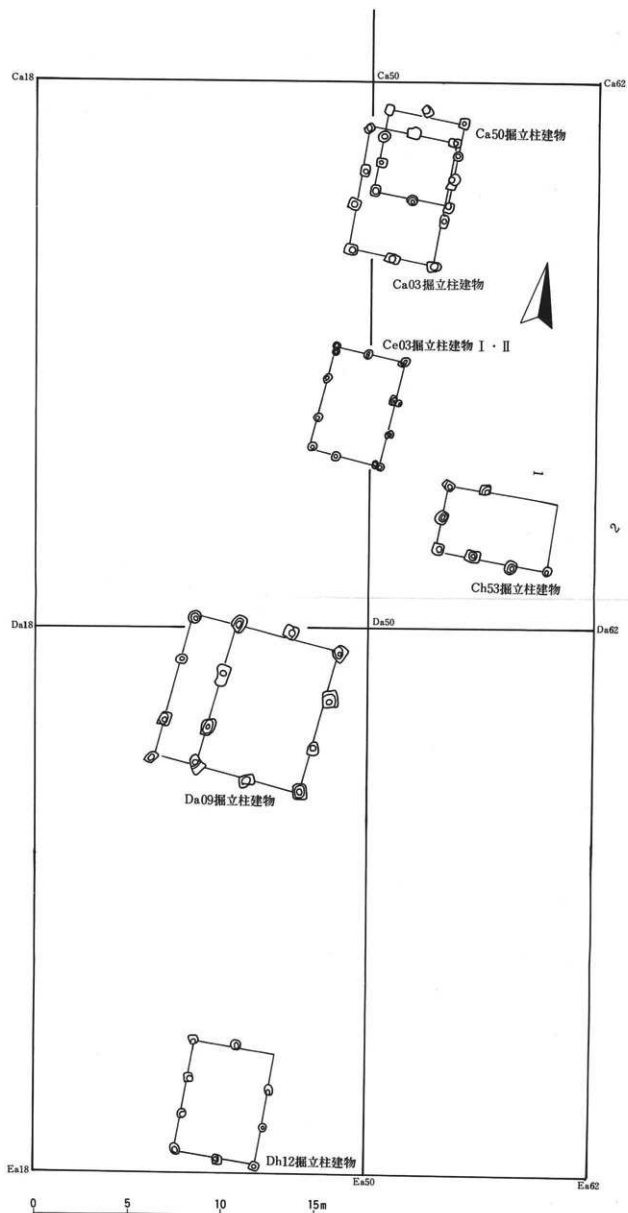
南北棟としてCa03・Ca50・Ce03・Da09・Dh12掘立柱建物遺構、東西棟としてCh53掘立柱建物遺構がある。何れも3間×2間の規模で、このうちDa09掘立柱建物は西廂を有している。建物の配置はDa09掘立柱建物を中心として構築されたものと思われ、南北方向に5棟が直線的に並び、それらに直交する形でCh53掘立柱建物が配される。Ch53掘立柱建物は唯一の東西棟であるが、集落内において明らかに南北棟に対応する形での構築を配慮したあり方を示すものである。

桁行方向の方位は、Ca03・Ca50・Dh12掘立柱建物が約N-3°-E、Ce03Ⅰ・Ⅱ、Da09掘立柱建物がN-5°-E～N-9°-E内にあり、東西棟Ch53掘立柱建物は南側桁行方位でN-87°-Wとなっている。

規模や柱間寸法は第102図掘立柱建物模式図で記載してあるので細述しないが、桁行4.6～8.15m・梁行3.3～6m内、柱間は1.4～3m内にある。特に規模が大きいのはDa09掘立柱建物であり、梁行が短いCa50掘立柱建物と比して柱間寸法に倍以上の開きが見られる。また、最も規格化されたプランを持つものはCh53掘立柱建物であり、Ca50・Dh12掘立柱建物が追随する。これに対しDa09・Ce03掘立柱は、前者の梁行部分を除いて柱間寸法が不定であり、その差も大きい。特にCe03掘立柱建物D列中央の柱位置が西側に偏している。他の掘立柱建物は梁行方



第102圖 獨立柱建物模式圖



向の中央柱が2等分する位置に存しているのに対し、規格外と言わざるを得ない。桁行方向に於ける柱間寸法の開きもやはりDa09・Ce03掘立柱建物の方にみられる。当然のことながら特にCe03掘立柱建物にあっては対応すべき柱穴間の差も大きい。Da09掘立柱建物にあっては桁行と廂との比較に於いても異なる寸法となる。但し、廂部分の間尺寸法はやや修正された形になっており、本来の桁行間の寸法となるべき数値に近くなっている。尚、東西棟たるCh53掘立柱建物は、梁行方向が若干狭くなるがほぼ等間を示しており、その規則性からみてDh12掘立柱建物に近い様相といえよう。

建替えは、Ca03掘立柱建物が規模を縮小した形のCa50掘立柱建物と、Ce03掘立柱建物Ⅱが従来の遺構(Ce03掘立柱Ⅰ)の内側にややズレた形で構築される例にみられる。また、Da09掘立柱建物にあっては、廂を除く他の掘り方の一部に建替えと思われる痕跡がみられ、廂を付随しない段階からそれを付設した段階に至る推移の中での所業とも解される。しかし、この場合は、建替えがどの程度の規模で行なわれたのかははっきりしていないため断言するものではない。

Ca03・Ca50掘立柱建物はⅢ期群内の北端に位置している。先後関係はCa50掘立柱建物が新しく、その掘り方の一部がCa30掘立柱上から構築されている。両者とも近接しており、東桁行をほぼ共有するようなあり方を呈し、棟方向が同位に近いことから規模を縮小した形での建替えとみるのが妥当であろう。縮尺の規模は、桁行を約2m、梁行を約55cm縮めており、掘立柱建物遺構中で桁行に於ける柱間寸法が最も小さいものとなっている。また、掘り方の深さは古期のものよりは平均して30cm近く浅くなっており、構造面での大きな変化があったと推される。しかし、2間×3間の原則までも変えるものではない。

これに対し、Ce03掘立柱建物Ⅰ・Ⅱに於ける建替えは、古期の柱穴の近くで行なわれ、新規の柱穴が内側に寄ったことなどから、結果的にその分だけ縮小された形になったものである。柱間寸法は、梁行方向部分と東側桁行部分では若干修正した配置をなすが、西側桁行は逆に誤差を拡大している。

本遺跡ではある程度縮小される推移を示す竪穴住居跡例があるが、Ca03→Ca50掘立柱建物の変遷や、あるいはCe03掘立柱建物(このような例をも意図的な縮小化と言ひ得るならば)のあり方からみて、遺構規模の縮小という相違を時期差として把握できるかもしれないが、普遍化する程には至らない。何れにしろ、これらの建替えは規模を異にし時期差を持つとしても、建物本来の性格・機能までも変えるものではないと思われる。これは西廂を付設することによってプランが大きく変化するDa09掘立柱建物にあって同様であり、寧ろこの場合は集落内に於ける当遺構が従来から有す主屋としての特性を更に強く印象づける意味合を濃くして行ったと思われる。

当群の遺構にあって確実に建替え等の現状変更を行なわないものには、Ch53掘立柱建物が

ある。これは遺跡内唯一の東西棟であり、構造的には規格性に富むといえてよく、棟方位も磁北に直交する値に近い。梁行が短いことはCe03掘立柱建物に近いあり方もいえるが、これをもって同時存在とする根拠には成り得ない。寧ろ、棟方位の直交性や間尺の規則性からみて、Dh12掘立柱建物あるいはCa03・Ca50掘立柱建物との組み合わせの方が自然である。方位について言及するならば、棟方位を約N-3°-EとするCa03・Ca50・Dh12掘立柱建物に対して、N-87°-Wの棟方位を持つCh53掘立柱建物はほぼ直交することとなるのである。丁度前群が東側に片寄った分だけ、Ch53掘立柱建物の方位も移動していることになる。棟方位が東側に5°以上寄るDa09、Ce03掘立柱建物Ⅰ・Ⅱのそれに比して誤差は明らかに僅少である。

また、Ch53・Dh12掘立柱建物はⅢ期内の竪穴住居跡と重複関係にあり、各々Cg56竪穴住居→Ci56竪穴住居跡→Ch53掘立柱建物、Di09竪穴住居跡→Dh12掘立柱建物の先後関係が確定している。竪穴住居跡は何れもⅢ期-(1)(2)群と区分された遺構であるが、少なくともこれらの掘立柱建物が配置された頃には、近接する遺構の大半は廃絶されたものであろう。重複しないDa21竪穴住居跡に於いても、恐らくは西廂が近接した頃には同様の経過を辿るのであろう。また、掘立柱建物単独の配置が規制されるのであるならば別として、対になる竪穴住居跡としてはDa74・De71竪穴住居跡が考えられるかもしれない。もしそうであるならば、この類いの遺構群が東側に延びて行くと思われる。まさに既述の各期に於ける空白地帯を埋め得る最後の竪穴住居跡群でもあろうか。

一方、Dh12掘立柱建物については他にみられたような建替えがあったかは不明である。ただ、P₁の柱穴南側に規模が小さく浅いピットの痕跡がみられる。この部分が建替え等に関わるものとは思われないが、当遺構の周辺にはピットが散在しており、ピットそのものの性格は不明とするものの他遺構の存在も考えられる。残念ながら、攪乱・削平等が多くみられた一帯であることから何とも言えないし、また、Ca03・Ca50掘立柱建物間にみられたような掘り方の差がこの場合もあるとすれば、尚更のこと不明と言わざるを得ない。しかし、少なくとも確認された掘り方部分に於いては、建替え等に関わる他の掘り方が明確に重複していなかったことは明言しておく。

全体的にみれば、Ce03掘立柱建物を除いて梁行間の寸法がほぼ等間にあるのに対し、桁行間のそれはばらつきがある。特に磁北からのズレが大きいDa09、Ce03掘立柱建物Ⅰ・Ⅱにあってはそれが目立ち、Ce03掘立柱建物では梁行間も含めて際立っている。この場合は、D列中央の柱位置が西側に偏しているために増幅されているが、建替えに際しては結果的に間尺寸法を若干修正した形になっている。何れにしろ、棟方位がより磁北に近いCa03・Ca50・Dh12掘立柱建物等は、Ce03・Da09掘立柱建物等に比して、柱間に於けるズレ幅が少ないということはいえよう。この観点では、棟方位が直交する形にあるCh53掘立柱建物も同様である。

以上のようなことから、磁北により近く柱間の寸法差が比較的少ない一群と、そうでない一群とに分類することはできる。しかし、この差が各群内に該当する遺構の同時存在、あるいは各群間の時間差とみるかについては明言できない。また、竪穴住居跡との関わりについては、既述の占地関係からある程度の所有関係は認めるものの、具体的にⅢ期-(1)×(2)群のどの部分と組み合うかについても同様である。

掘立柱建物の機能については、居住・倉庫施設の両様が考えられる。西廂を持つDa09掘立柱建物は、その規模からみても中心的な役割を持つ居住施設とみて大過ないが、他の遺構については付属屋・倉庫等が含まれるであろう。膳性遺跡^{註1}・三合谷地遺跡^{註2}でみられる総柱の建物は、その構造的からみて倉庫施設の本来的なあり方を示唆するが、逆にそのことをもって本遺跡の掘立柱建物のすべてが居住的性格を持つものばかりとも断言できまい。

掘立柱建物が集落の中で他の遺構と何らかの関わりを持つ形で報告されている例としては、膳性^{註3}・西大畑^{註4}・林前^{註5}・上平沢新田遺跡等がある。この他に金ヶ崎町森山工業団地内にある妻根遺跡^{註6}は一枚の単独存在であるが、同類の範疇として扱えてもいであろう。何れも平安時代に属するとされる時期に比定されており、県内に於ける掘立柱建物の初現・確立期に相当するものであろうが、本遺跡をも含めて水沢市周辺に集中していることが特筆される。これらの掘立柱建物は、梁行2間を原則としており、桁行方向は3・4・5間と一様でない。数的には3間×2間の例が多い。掘立柱建物のあり方としては、上平沢新田・林前・妻根遺跡のように単独存在する場合と西大畑・本遺跡のように複数存在する場合がある。もちろん、複数存在のものにあっては、すべてが同時存在するというものではなく、その中では時期差を持つ組み合わせがあるのであろう。更に、西大畑遺跡の場合、1間×3間・2間×3間・2間×4間・間×2間×5間と多様な規模が配され、何れも東西棟であるのに対し、本遺跡では3間×2間に限定されており、しかも南北棟を主体とするなどして規模のみならず配置性も異なる。この差は、当然集落内に於ける機能・役割と密接な関わりを持つ配慮からくる結果であろうが、集落そのものの性格自体が異なる可能性もあり、個々の掘立柱建物のすべてについて機能別の分類をすることは至難である。このことについては、掘立柱建物と竪穴住居跡との所有関係復元と同様に、未だ今後の課題とする要素が強い。

掘立柱建物の出現時期については、胆沢平野に於けるあり方からみて胆沢城造営を1つの契機としていることが推察されている。また、妻根遺跡^{註8}にあっては、掘り方内の出土遺物からみて平安時代の比較的古い時期の可能性があるとしている。他県の例としては、福島県三合谷地・古屋敷遺跡^{註9}・宮城県台の山遺跡^{註10}・山形県熊野台遺跡等が掘立柱建物を伴う平安時代集落として報告されている。また、廂を有する平安時代の建物としては、規模が異なるが、郡山市皆屋敷^{註12}・蘇内^{註13}・岩測遺跡^{註14}等の例が挙げられる。

本遺跡内の掘立柱建物、竪穴住居跡の重複関係からみて上限はそれ以降とするものの、実年代は定かではない。但し、後述する出土遺物のあり方からみて平安時代中期以前とされており、また、竪穴住居跡との関わりの中に既述の如く所有関係があるとするならば、平安時代前半期に近い頃の構築もあり得るとしておく。しかもそのあり方は、西大畑遺跡との比較でも明らかであったように、集落の性格によっても異なると思われ、本遺跡内にあつては小規模な掘立柱建物が集落の中に定着したものであろう。いわば、西大畑遺跡が近辺の胆沢城とより密接な関係にあり、一般の集落とは様相を異にするのに対し、本遺跡のあり方は底辺から律令時代を支えた原動力とも成り得る人々によって営まれた集落ともいえよう。

- 注1. 膳性遺跡：現地説明会資料（財）岩手県埋蔵文化財センター、昭和54・55年。
他に調査担当の高橋与右衛門氏より各種教示をうけている。
- 注2. 三合谷地遺跡：福島県文化財報告書第80集、東北新幹線関連遺跡発掘調査報告Ⅰ、福島県教委、昭和55年。
- 注3. 西大畑遺跡：岩手県文化財報告書第60集、東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ、昭和56年3月。
- 注4. 林前遺跡：岩手県水沢市文化財報告書第3集、水沢市教育委員会、昭和54年3月。
- 注5. 上平沢新田遺跡：岩手県文化財調査報告書第52集、東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ、昭和55年3月。
- 注6. 妻根遺跡：昭和48年、岩手県教育委員会文化課が調査した。
調査を担当された高橋信男氏によれば、掘り方内よりヘラ切りの須恵器が出土していたとのことである。
- 注7. 第Ⅳ章4の参考資料(3)を参照されたい。
これによれば、大規模なB₂類型であることから、通常集落以外の、何らかの意味での官衙的なものを想定すべきかとも思うとされている。同感である。
- 注8. 伊藤博幸「胆沢城と古代村落 — 自然村落と計画村落 —」
- 注9. 古屋敷遺跡：福島県文化財報告書第80集、東北新幹線関連遺跡発掘調査報告Ⅰ、福島県教委、昭和55年3月。
- 注10. 台の山遺跡：宮城県教育庁文化財保護課、東北新幹線関連。
- 注11. 熊野台遺跡：山形県埋蔵文化財調査報告書第31集、1980、山形県教育委員会
- 注12. 菅原敷遺跡：福島県文化財報告書第80集、第2巻、東北新幹線関連遺跡発掘調査報告Ⅰ、福島県教育委員会、昭和55年3月。
- 注13. 蘇内遺跡：1973、田中正能他「蘇内遺跡」長沼町文化財調査報告、長沼町教育委員会。
- 注14. 岩瀨遺跡：福島県文化財報告書第80集第1巻。

※注11に補則する。熊野台遺跡にあつては、奈良時代後葉（8C後半）の掘立柱建物が1棟、平安時代前葉（9C代）の掘立柱建物5棟、平安時代後葉（11C代）の掘立柱建物1棟とされている。

(3)大溝について

本遺跡内では大中小溝が多数検出されている。このうち方向が不定で、しかも規模の小さい溝の多くは性格が不明であり、配置からみる傾向性も特に抽出されない。したがって、ここでは、第1号、6号、10号、13号、14号溝を中心として集落との関わりについて記していくこととする。

規模の大きい溝は大別して東西方向のものと南北方向に走るものとの二様がある。東西溝は第1、第10号溝、南北溝には第13、14号溝があり、第6号溝は両様の性格をもつ。

第1号溝は本遺跡の北端を区画する位置にある。東西の両端は調査地範囲外に入り込むため全容は明らかではない。他の遺構群もこれに沿った形で範囲外に至るものがあると思われる。

底部面は、東側に向かって下降しており、排水路的な役割りを果たすとも考えられるが、段丘縁に近く、しかもそれに平行するあり方は他の用途にも併用された可能性もある。沖積面を北側に控える段丘縁上を、一線で画して分割する意図は、集落の北限を示す標識的区画にも成り得よう。ある意味では、環濠的な区分の一端を覗かせるものかもしれない。もち論、溝の規模からみて同等の扱いはできないが、単なる排水路等だけではなく、ある時期の遺構群に対応する形が配されたであろう可能性は否定しない。

出土遺物にみる時期区分は、Ⅱ期の範疇にも含まれる。Ⅲ期で代表されるロクロ成形の土器群は含まれないが、須恵器大甕のあり方からⅡ期の後半かⅢ期の様相を呈すものといえよう。溝の中には多量の礫が投入されており、遺物は西縁側に集中する。なお、須恵器大甕は人為的な廃棄によるものと思われる。

第6号溝は、方向と位置によって呼称を区分している。東西に走る部分(6号溝-1)の東端は、他遺構との重複ないしは攪乱によって不明とするものの、範囲外に及ぶものと推される。当溝は、区分上では大溝として取扱ったが、本項でとりあげたものの中では最も規模が小さい遺構である。

时期的にはⅢ期に位置づけられるCb21竪穴住居跡を壊す形に構築されていることから、遺跡内では新しい溝といえよう。6号溝-1の部分は磁北とほぼ直交する形にあり、結果的には掘立柱建物の棟方位に概ね直交乃至は平行することとなる。溝底面における比高差は特になく、傾斜をもっていない。また6号溝-2との接点では約20cm近くの段差をもつことや、6号溝-3の部分から折り返す形にあることなどからみて、これら一連の溝は排水等に関わる目的で構築されたものではないと思われる。Ⅲ期遺構群のあり方は、6号溝-1を境にして遺構が集中する南側部分と、稀薄になる北側部分とに分断された形にあるが、溝の構築後に北側の遺構が配された

のか、同時存在の中での区分なのかは確定しない。ただ、溝をはさんで対面するCa03、Ca50掘立柱建物と、Ce03Ⅰ・Ⅱ掘立柱建物における規模や建替え方法等にみられる差異を、掘立柱建物群内での時間差に置換することが可能であるならば、溝と掘立柱建物の配置に関わるある程度の子察は可能であろう。

一方、6号溝-2・3は磁北方向に沿う形にあり、6号溝-1と同様に掘立柱建物を意識した配置を示すとみて大過ないと考えられる。しかし残念ながら6号溝-3の南端は、調査の都合上からその延長部分を検出していない。したがって西辺の区画が最終的にはどのような形で為されるものかということについては不明であり、断定するものではない。

6号溝全体から出土する遺物量は少ないが、Ⅲ期遺構群の一部に併行するものとみなし得る組合せである。しかもⅢ期-(1)群としたCb21竪穴住居跡より新規になることから、Ⅲ期-(2)・(3)群の遺構に近い時期と思われ、既述の観点からみてⅢ期-(3)群とした掘立柱建物遺構に最も関わりが深い溝遺構と理解している。

第10号溝は、遺跡南端部にあり、溝自体で二時期使用の可能性をも考慮され得る遺構である。第14号溝よりは新規の構築になるものであり、出土遺物はⅢ期以降のものが主体となる。中には、平安時代末期頃にまで降ると思われる例もみられる。位置的には、Ⅲ期遺構群の南限にもあたり、何らかの形で区分を呈すかもしれないが、具体的な時期・性格等については不明である。

第13号溝、調査地内西縁を南北方向に走る。北端は、Ba27付近で南端はDj27付近で中断している。他の遺構との関わりをみれば、北端は第1号溝の直前、南端は第14号溝あるいは第10号溝の手前で中断していることになる。この独立したあり方は、南側3mの地点から同様の方向に走る第14号溝との組合せから、本遺跡の西側を区画するという機能を持つことでもあろう。なお、北縁における第1号溝との関係から、同様の組合せが考えられるが、この場合は第1号溝の全容が明らかでないことから結論は避ける。

時期的には、Ⅰ、Ⅱ期の遺構を壊していることから、それに後続するであろうⅢ期に近いあり方ともいえよう。

出土遺物は、Ⅲ期以前のものも含まれるが、Ⅰ、Ⅱ期の竪穴住居跡等と重複する部分にあっては当然のことでもあろう。その点を消去すると、Ⅲ期遺構群が半円形に分布する範囲内にあたる第13号溝-2とした部分にロクロ成形土器が目立つことや、先の重複関係等からみて、Ⅲ期遺構群の一時期に対応するものと解して大過ないであろう。

なお、溝の全域には多量の礫があり、そのあり方は意図的な投入と解される。

第14号溝、第13号溝の南端部より更に南へ3mほどの位置にある。溝の規模や礫のあり方は第13号溝とほぼ同様であると思われるが、全容を確認しておらず、範囲外における様相は不明である。ただ、先にも記した通り、位置的にみて第13号溝と同様の時期、性格のものであろうことは否定しない。Ⅱ期の遺構を壊すことから、もっともⅢ期に近いあり方が想定される。出土遺物上では、Ⅱ期の様相をも呈するが、Ec27竪穴住居跡に関係するものもあると思われ、また、Ⅲ期遺構群の分布が稀薄な地帯であることから当然のことでもあろう。

以上、各溝について記したが、第1・13・14号の様に集落を一括した形での区画、即ち集落の内外界に関わるとと思われる区分を呈す溝と、第6号溝-1のように集落の内部における再区分と思われる溝との二様と考えられる。

これらの溝は、他の遺構と有機的に結びつきながら存在したものであろうが、要素的にみて同時存在の可能性があるものの、確定し得ない現状であることも事実である。したがってここでは、現象的事実から推察し得る範囲内でまとめてみたい。

第1号溝と第13号溝は両者の配置性からみて、北端と西縁を区画する組み合わせが想定される。若しそうであるならば、Ⅱ期以降にあたる第13号溝の時期区分からみて、第1号溝もⅢ期内の存続が推察されよう。

また、第13号溝は他溝との重複関係からⅢ期内の前半を構成する一遺構と考えている。具体的には、Ⅲ期-(1)群とされるCb21竪穴住居跡上に第6号溝が構築される以前のことである。これは第13号溝のほぼ中央部を東西方向に分断する第15号溝が、第6号溝-3より古期にあたりとされることから首肯されるであろう。更に、第6号溝-2・3が第13号溝に近接した形での同時性は考え難く、また6号溝自体で西辺部をもある程度区画する様相を呈すことから、第6号溝が構築された時点では、第13号溝の機能は既に失われ、廃絶されていたものと思われる。第13号溝とは確実にセットになり得る第14号溝も同様の推移を経るのであろうが、第14号溝以降に作られる第10号溝と第6号溝との同時存在については確定し得ない。何れにしろ、第13号溝が既述の経過を辿るとするのであるならば、この溝の存続期間は、少なくともⅡ期以降からⅢ期前半までという比較的短期の使用になる。このことについては、溝内の覆土中に存する大量の礫が、意図的な投入を窺わせるに充分であることから、人為的な廃棄が推察される。これは第1号溝、14号溝にあってもいえることであり、セットになり得る一連の溝が集中的に廃棄されたものでもあろうか。既成の溝を廃する背景には、第6号溝の構築が行なわれる頃にあつて、集落編成の変革が余儀なくされた時期、あるいは必然的な結果からなる時期の到来があつたことでもあろう。その端的な現象例は、第6号溝と掘立柱建物とが密接な関わりをもつことで象徴されているともいえるのではなかろうか。

2. 発見された遺物について

本遺跡内からは多量の遺物が発見されており、時期的には縄文時代晩期から現代までの広範囲にわたる。

土器類は、大洞A'式に相当する縄文式土器片、弥生式土器片、江別式類似土器片、奈良・平安時代に位置づけられる土器等がある。奈良・平安時代の土器類は、甕・壺・環・高環等の器種で代表される土師・須恵器である。

土製品としては、土錘や装身具たり得る有孔小玉等が散見する。Bi53 壑穴住居跡出土のものには、ボタン状を呈す例もある。

鉄製品は、刀子・雁又様鉄器・馬具様鉄器・鎌・鋤等がみられる。武器的な色彩の強いものと、農耕用鉄器の両様がある。また、この他に釘と思われるものもある。

石器は凝灰岩質の砥石が主であるが、若干の石鏃・フレーク等もみられる。また、Be24地点では刻線をもつ長方形の岩版が一点出土している。

他に、表採として熙寧元寶、寛永通寶等の通貨や明治以降の銅貨等がある。また明治時代以降の茶碗、皿などの陶器片、器種が不明で近世以前とされる土師質の陶器片も一点ある。

以上が、本遺跡出土遺物の概要である。このうち分類を必要とするものには縄文式土器片、土師、須恵器等がある。前者については、大洞A'式の中で粗製深鉢、高環、浅鉢等に細分されるが、何れも破片であるため省略する。したがって、本項では歴史時代の遺物を中心として、分類、考察を進めていくこととする。

以下については、(1)奈良・平安時代の遺物、(2)その他の遺物の順に記し、(1)については坏型土器と甕型土器の区分をした後で、(a)分類基準、(b)分類とその結果、(c)各期の特徴と時期区分について述べる。また、(2)については、縄文・弥生・江別式土器片、鉄器等について簡略に記すこととする。

(1)奈良・平安時代の遺物

A. 坏型土器について

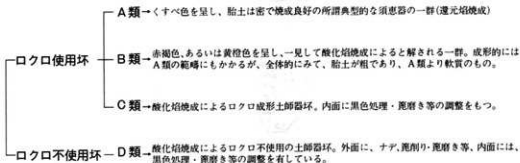
(a) 分類基準

本遺跡内出土の坏型土器は出土点数が多く、実測数は207点を数える。但し、中には反転復元によるもの、拓影図をもって揭示したもの等もかなりあり、図示した全点について分類を試みるものではない。特に計測値に関わる部分にあっては、適宜取捨選択している。大枠としては、残存率が1/3以下のものは取上げていない。また、1/3以上のものであっても底部の残りが芳しくない場合も同様の扱いである。

したがって最終的には148点の坏についてのみ分類している。

分類上におけるタイプは、成形方法からくる相違が主で、他に調整技法や計測値・器形等を考慮して細分される。第1に、ロクロ使用の有無である。ロクロを使用しない坏はすべて酸化焙焼成によるものであるが、ロクロ使用の杯類は、酸化焙焼成と還元焙焼成の面様が含まれ、更にその仕上りの様子から区分けており、最終的には4種類のタイプが仮称される。

即ち、



の4類である。実測図上ではA類は断面を黒塗り、C・D類は内面に黒点を付している。これらの何れをも有していないものが仮称B類とした坏である。

これらの坏は、更に各類の中で細分されるが基本的には第31表の分類基準に準拠するものである。この分類にしたがって各坏類は記号化されるわけであるが、後掲する第32表の備考欄にそれを記している。また、その他の分類細目については同表に記されている通りであるが、各遺構間における伴遺物の記述の際には一部記号化して再掲示することとなる。

なお、第32表における法量の区分は、度数分布による数値の確定である。

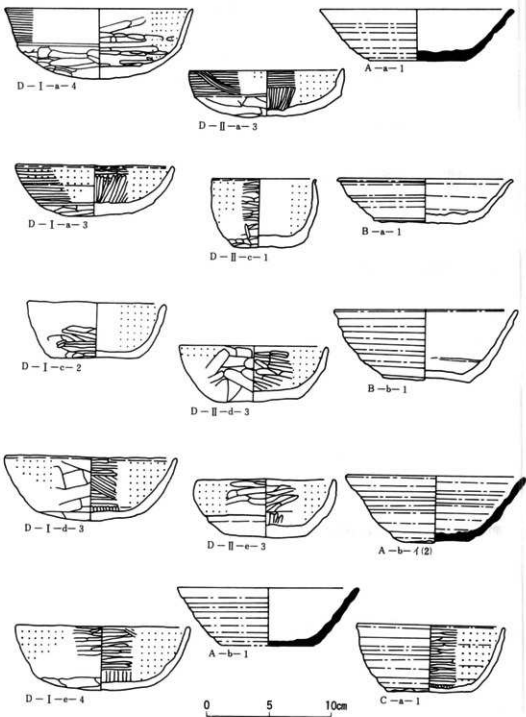
以下については、坏型分類基準と、法量、技法、その他等についての一覧表を続けて記す。

第31-1表 D類(ロクロ不使用坏)坏型土器分類基準

	口縁 体部	特徴	調整の組合わせ	口 径 値
			体部一底部	
D 類・ ロ ク ロ 不 使 用 坏	I. 外反・外傾	a.	横ナデー 磨削り	1. 7~9cm未満
		b.	横ナデー 磨ミガキ	2. 9~11cm未満
		c.	磨ミガキ 磨ミガキ	3. 11~13cm未満
	II. 直口・内湾	d.	磨削り 磨削り	4. 13~15cm未満
		e.	磨ミガキ 磨削り	5. 15~17cm未満
		f.	不 明	6. 17cm以上

第31-2表 A、B、C類(ロクロ成形坏)分類基準

	底部切離し	再調整の有無 調整部位	口径と底径の比 (口径/底径)
A・B・C 類・ ロ ク ロ 成 形 坏	a.	磨 切 イ. 再調整あり (1)体部下端 (2)底面のみ (3)底部外周	1. 1.6 以下 2. 1.6~1.8未満 3. 1.8~2.0未満
	b.	回転未切	ロ. 無 調 整
	c.	不 明	ハ. 不 明



第104圖 环型土器分類一覽

第32表 坏型土器の量量・技法等一覧表

(台付をも含む)

遺 蹟 名	発 見 号	写 真 号	種 別	法 量 (cm)			段 洗 線	注 法		備 考 (分類)
				口 徑	底 徑	器 高		口縁-体部上半	体部下半-底部	
Bb 30 住	1		D類	14.3	8.8	5.3	有段	横ナデ	ヘラミガキ・ヘラケズリ	床面。丸底。 D-I-a-4
Bc 24 住	1	No.13	D類	12.1	8.7	3.9	有段	横ナデ	ヘラケズリ	床面。丸底。割線あり。 D-I-a-3
	2		D類 (12.2)	(8.8)	3.7	有段	割線のため不明	左 同	埋土内。丸底。くびれなし。	
Be 68 住	1	No.38	B類 (14.0)	6.0	(4.4)	/		ロクロ成形	ロクロ成形	回転糸切無調整。口縁部外反。 B-b-o
	2		土師器 高环 (11.3)			/	沈線あり	横ナデ	ヘラケズリ	床面。脚部欠失。
Bd 36 住	1	No.39	D類	13.5	10.5	4.4	沈線	横ナデ	ヘラケズリ	床面。 D-I-a-4
(幾次第層)	1	No. 4	D類 (14.0)	(9.2)	(7.5)	無段		ヘラミガキ	磨滅のため不明	床面。 D-II-c-?
	2	No. 2	D類	10.3	6.4	4.3	無段	バインダー処理のため不明	ヘラミガキ	床面。平底。 D-I-c-2
	3	No. 1	D類	7.8	4.8	5.1	無段	ヘラケズリのちヘラミガキ	ヘラミガキ	床面。内外面黒色処理。 D-II-c-1
	4	No. 3	D類	14.0	8.0	7.7	無段	バインダー処理のため不明	ヘラケズリ(底)	床面。平底。 D-II-c-4
Bd 80 住	1	No.10	D類 (12.4)			無段	ヘラミガキ	ヘラミガキ	埋土。平底。黒底あり。	
Be 50 住	1	No.11	D類	11.4	10.9	3.5	軽い段	横ナデ	ヘラケズリ	床面。中位。 D-II-a-3
	2	No.12	D類 (13.0)	(9.6)	4.8	無段		ヘラミガキ	ヘラケズリ	床面。 D-I-e-4
	3		D類 (13.3)	9.0	(4.4)	無段	黒化のため不明	左 同	埋土中。	
	4		D類	12.0	(6.7)	3.5	無段	割線のため不明	左 同	床面。 D-I-f-3
	5		D類	14.1	(8.6)	5.1	無段	横ナデ	ヘラケズリ	埋土。 D-I-a-4
	6		D類 (15.0)			無段		ヘラミガキ		住居跡内ピット埋土。
	7		D類 (14.1)			沈線		ヘラケズリ		埋土内。沈線は殆んど目立たない。
	8		土師器 高环		脚注 (5.8)		/			埋土出土。脚部のみ。内黒。
Bb 68 住	1		D類 (15.2)	(8.0)	(5.0)	有段	(ヘラミガキ)	ヘラケズリ	床面。	
	2		土師器 高环		脚注 5.2	/				床面。
Bb 77 住	1	No.40	D類 (12.1)	(8.0)	4.7	有段	横ナデ	ヘラケズリ	床面。平底風。 D-I-a-?	
Bb 53 住	1		D類 (13.5)	(10.4)	4.8	有段	(ヘラミガキ)	(ヘラケズリ)	床面。黒底あり。丸底風。 D-I-e	
	2		D類 (12.0)	(9.7)	4.6	沈線	ヘラミガキ	ヘラケズリ	床面。黒底。丸底。 D-I-e-?	
	3	No.21	D類 (12.7)	(7.6)	4.3	無段	ヘラミガキ	ヘラミガキケズリ	埋土。内外面黒色。 D-I-e-?	
	4		D類 (16.0)	(13.4)	4.7	沈線	(ヘラミガキ)	底部のみヘラケズリ	床面。底部に黒底。丸底風。 D-I-e-5	
	5	No.20	D類 (16.7)	11.9	9.9	無段	ヘラミガキ	ヘラケズリ	埋土。底部凹凸あり。 D-II-c-5	
Bj 65 住	1	No.30	A類	14.4	5.9	3.6	/	ロクロ成形	ロクロ成形	床面。ヘラ切無調整。 A-a-o
	2	No.31	A類	14.0	7.0	4.7	/	ロクロ成形	ロクロ成形	床面。ヘラ切無調整。 A-a-o
	3		A類	14.7	7.1	3.9	/	ロクロ成形	ロクロ成形	床面。ヘラ切無調整。 A-a-o

Bj 65 住	4		A 類 (13.8)	(6.7)	4.6		□	ロクロ成形	ロクロ成形	床面。 ヘラ切無調整。 A-a-ロ	
	5		A 類		6.0		□	ロクロ成形	ロクロ成形	床面。 底部片。白褐色や軟質。	
	6		C 類				□	ロクロ成形	ロクロ成形	床面。体部片。 内風。ヘラミガキ。	
Cb 21 住	1		A 類	12.6	7.2	4.2		□	ロクロ成形	ロクロ成形	床面。 回転糸切無調整。 A-b-ロ
	2		A 類	12.2	6.0	3.8		□	ロクロ成形	ロクロ成形	床面。 回転糸切無調整。 A-b-ロ
	3		B 類	14.6	8.2	4.6		□	ロクロ成形	ロクロ成形	床面。カマド奥口中。 ヘラ切か？変色B類。 B-(a)-ハ
Cc 53 住	1	No.41	D 類	12.8	8.3	4.1	有段	横ナデ	ヘラケズリ	埋土出土。 丸底風。 D-I-a-3	
Cf 77 住	1		D 類 (13.1)			有段	横ナデ	ヘラケズリ	埋土中。 内部くびれあり。丸底風。 D-I-a-?		
Cg 96 住	1		D 類 (16.4)			有段	ヘラミガキ	ヘラケズリ	床面。	D-I-e-?	
	2		D 類 (16.1)			—	ヘラミガキ	ヘラケズリ	床面。	D-I-e-?	
Cg 96 住	1	No.59	A 類 (12.9)	(6.5)	4.3		□	ロクロ成形	ロクロ成形	樽道内。 回転糸切無調整。 A-b-ロ	
	2		A' 類				□	ロクロ成形	ロクロ成形	埋土。 回転糸切底部片。	
	3		A 類				□	ロクロ成形	ロクロ成形	埋土。 ヘラ切底部片	
Ci 30 住	1	No.48	D 類 (10.5)	(8.5)	4.3	有段	ヘラミガキ	ヘラケズリ	床面。	D-II-e-2	
	2		D 類 (11.0)	(8.4)	4.2	有段	ヘラケズリ ヘラミガキ	ヘラケズリ	床面。	D-II-e-2	
	3		D 類 (12.8)	(6.2)	4.4	有段	横ナデ	ヘラケズリ	床面。底部に割線あり。 残はあまり目立たない。 D-I-a-3		
	4		D 類 (16.1)	(15.0)	(5.5)	有段	横ナデ	ヘラケズリ	床面。 底部に割線あり。 D-I-a-(5)		
	5	No.49	D 類 (15.2)	(12.1)	(4.9)	有段	横ナデ	ヘラケズリ	床面。 明瞭な段を持つ。 D-I-a-(5)		
Da 15 住	1		D 類 (15.0)	(10.9)	(4.3)	沈線	不 明	ヘラミガキと ヘラケズリか?	磨滅が激しい。		
	2		D 類 (15.0)	(8.4)	(6.4)	無段	ヘラミガキ	不 明	埋土。		
Da 21 住	1	No.42	A 類 (16.5)	(11.4)	6.3		□	ロクロ成形	ロクロ成形	床面。ヘラ切のち底部外周のみ 削り。 A-a-i(2)	
	2		A 類 (13.9)	8.1	4.3		□	ロクロ成形	ロクロ成形	床面。 裏切。 A-a-ロ	
Da 30 住	1	No.66	D 類	12.4	8.6	3.5	無段	ヘラミガキ	ヘラケズリ	床面。平底。 D-I-e-3	
	2	No.65	D 類	11.3	6.6	4.3	無段	ヘラケズリ	ヘラケズリ	床面。平底。 D-II-d-3	
	3	No.64	D 類	13.8	6.1	4.9	沈線	横ナデ	ヘラケズリ	床面。底面に割線。 平底。 D-I-a-4	
	6	No.69	道巻部 高台付付	15.0	脚径 8.6	6.6		□	ロクロ成形	ロクロ成形	ヘラ切による。
(新 期)	1		A 類 (13.7)	(7.1)	(4.7)		□	ロクロ成形	ロクロ成形	床面。回転糸切。底部外周のみ ヘラケズリ。 A-b-i(2)	
	2		A' 類	(6.7)			□	ロクロ成形	ロクロ成形	床面。底部片。 回転糸切。	
	3		B 類	(5.5)			□	ロクロ成形	ロクロ成形	埋土。 ヘラ切底部片。	
	4		B 類	(5.4)			□	ロクロ成形	ロクロ成形	底部片。 糸切無調整。	
Da 56 住	1		C 類	11.0	6.5	5.0		□	ロクロ成形	ロクロ成形	床面。 ヘラ切無調整。 C-a-ロ
	2		A 類 (13.0)	(8.0)	3.9		□	ロクロ成形	ロクロ成形	床面。 回転糸切無調整。 A-b-ロ	

Da 56 住 (旧 期)	3	A 類	(13.0)	(6.7)	3.8	ワケロ成形	ワケロ成形	床面、 ヘラ切無調整。	A-a-ロ
	4	B 類	13.0	7.1	3.3	ワケロ成形	ワケロ成形	床面、ヘラ切無調整。 凹凸が目立つ。	B-a-ロ
	5	A 類	13.8	7.8	4.0	ワケロ成形	ワケロ成形	床面、ヘラ切無調整。 凹凸が目立つ。	A-a-ロ
	6	A 類	(13.2)	(7.6)	3.2	ワケロ成形	ワケロ成形	埋土中、底部が厚い。 回転糸切無調整。	A-b-ロ
	7	A 類	12.8	6.8	3.3	ワケロ成形	ワケロ成形	埋土中。 ヘラ切無調整。	A-a-ロ
	8	No.73 A 類	13.6	6.8	4.7	ワケロ成形	ワケロ成形	床面、 ヘラ切無調整。	A-a-ロ
	9	A 類	(13.6)	7.5	4.3	ワケロ成形	ワケロ成形	床面、 ヘラ切無調整。	A-a-ロ
	10	A 類	11.8	6.1	3.1	ワケロ成形	ワケロ成形	床面、 ヘラ切無調整。	A-a-ロ
	11	A 類	(16.0)	(7.7)	6.4	ワケロ成形	ワケロ成形	床面、ヘラケズリ調整のため切離し不明。	A-c-イ(2)
	12	No.75 A 類	(13.6)	(7.8)	4.1	ワケロ成形	ワケロ成形	埋土。 ヘラ切無調整。	A-a-ロ
	13	No.76 A 類	(13.0)	(6.6)	3.9	ワケロ成形	ワケロ成形	埋土、底面ヘラケズリ調整のため切離し不明。	A-c-イ(2)
	14	No.74 A 類	(13.5)	(8.0)	4.4	ワケロ成形	ワケロ成形	埋土。 ヘラ切。	A-a-ハ
	15	A 類	(17.7)	9.4	5.2	ワケロ成形	ワケロ成形	床面、 回転糸切無調整。	A-b-ロ
	16	B 類	12.9	7.2	4.0	ワケロ成形	ワケロ成形	床面、 回転糸切無調整。	B-b-ロ
	17	A 類	(13.8)	(7.0)	5.8	ワケロ成形	ワケロ成形	床面、ヘラケズリ調整のため切離し不明。	A-c-イ(2)
	18	A 類	(14.0)	(8.2)	3.8	ワケロ成形	ワケロ成形	床面、 ヘラ切無調整。	A-a-ロ
	19	A 類	(16.5)	(9.8)	3.5	ワケロ成形	ワケロ成形	床面、ヘラケズリ調整のため切離し不明。	A-c-イ(2)
	20	A 類	(12.6)	(7.0)	5.0	ワケロ成形	ワケロ成形	埋土。 ヘラ切無調整。	A-a-ロ
	21	A 類	(13.3)	(8.4)	4.4	ワケロ成形	ワケロ成形	床面、 ヘラ切無調整。	A-a-ロ
	22	A 類	(13.5)	(6.3)	4.5	ワケロ成形	ワケロ成形	南側コマ内、手持ちヘラケズリのため切離し不明。	A-b-イ(2)
	23	A 類	(13.5)	(6.2)	5.1	ワケロ成形	ワケロ成形	床面、回転糸切のみ 回転ヘラケズリ。	A-b-イ(2)
	24	C 類	-	-	-	ワケロ成形	ワケロ成形	床面、 口縁-係部片。	
	25	C 類	-	-	-	ワケロ成形	ワケロ成形	床面、 回転糸切係部片。	C-b
	26	A' 類	-	6.6	-	ワケロ成形	ワケロ成形	埋土、 回転糸切係部片。	A'-b
	27	B' 類	-	-	-	ワケロ成形	ワケロ成形	床面、 ヘラ切係部片。	B-a
	28	A 類	-	6.5	-	ワケロ成形	ワケロ成形	床面、回転糸切。	A-b
	29	C 類	-	-	-	ワケロ成形	ワケロ成形	埋土、 ヘラ切底部細片。	C-a
	30	A' 類	-	-	-	ワケロ成形	ワケロ成形	床面、 ヘラ切底部片。	A'-a
	31	A 類	-	6.7	-	ワケロ成形	ワケロ成形	埋土、回転糸切。	A-b
	32	A 類	-	6.6	-	ワケロ成形	ワケロ成形	床面、回転糸切、底部が厚い。	A-b
	33	A 類	-	7.2	-	ワケロ成形	ワケロ成形	床面、ヘラ切。	A-a
	34	A 類	-	6.9	-	ワケロ成形	ワケロ成形	床面、ヘラ切。	A-a

Da 56 住 (旧 期)	35		A 類				ノコロ成形	ノコロ成形	埋土。 ヘラ切底部片。 A-a	
	36		A 類	6.8			ノコロ成形	ノコロ成形	床面。未切のちヘラケズリ調整。 底部片。 A-b-1	
	37		A 類	6.4			ノコロ成形	ノコロ成形	埋土。 ヘラ切底部片。 A-a	
	38		A' 類	5.8			ノコロ成形	ノコロ成形	埋土。 回転糸切。 A'-b	
Da 74 住	1		A 類	(13.7)	(7.3)	4.1	ノコロ成形	ノコロ成形	埋土。 回転糸切。 A-b	
	2		B 類	13.6	6.8	3.9	ノコロ成形	ノコロ成形	A 類的。 回転糸切無調整。 B-b-1	
	3		A 類	14.7	7.0	3.7	ノコロ成形	ノコロ成形	ヘラ切。 A-a-1	
Db 33 住	1		D 類	(12.9)	(5.5)	3.5	無段	ヘラミガキ	ヘラケズリ	平底。
	2		D 類	(11.9)	—	—	沈線	ヘラミガキ	不 明	埋土中。底部片。
Dd 03 住	1	No.101	D 類	9.0	5.0	3.9	無段	ヘラミガキ	ヘラミガキ+ ケズリ	平底。小型石。 D-II-e-2
	2	No.102	D 類	10.9	4.8	4.6	無段	ヘラミガキ	ヘラミガキ+ ケズリ	床面。平底。 D-I-e-2
	3	No.103	D 類	10.6	6.1	5.2	無段	ヘラミガキ	底面のみ ヘラケズリ	床面。平底。 D-I-e-2
	4	No.104	D 類	12.1	9.0	3.0	無段	ヘラミガキ	ヘラミガキ	器高が高い。 丸底風。 D-II-e-4
	5	No.105	D 類	(10.0)	(6.2)	4.0	無段	ヘラミガキ	底面のみ ヘラケズリ	平底風。 D-II-e-2
	6	No.106	D 類	11.7	7.7	3.8	沈線	ヘラミガキ	ヘラミガキ+ ケズリ	住居跡ピット出土。 丸底風。 D-II-e-3
	7		D 類	(14.2)	(11.0)		有段	ヘラミガキ	ヘラケズリ	床面。底部片。 D-II-e-7
	8	No.107	D 類	16.4	9.4	5.0	沈線	ヘラミガキ	ヘラケズリ+ ミガキ	カマド左側袖部出土。 D-I-e-5
	9		D 類	16.0	13.2	4.6	沈線 漆線 漆線 漆線	ヘラミガキ	ヘラケズリ	有黒塵。 D-I-e-5
	11	No.108	土師器 高杯	12.4	4.1		無段	ヘラミガキ	ヘラケズリ	カマド内出土。 脚部欠失。
	12		D 類				無段	ヘラミガキ	ヘラケズリ	口縁-底部破片。
	13		D 類	(10.2)	(5.4)	2.9	無段	不 明	底面ケズリ	埋土中。平底。
	14		D 類				僅かな 段	横 ナ ア	不 明	口縁-底部片。
	15		D 類				有段	横 ナ ア	不 明	口縁-底部破片。
	Dd 50 住	1		A 類	(14.8)	7.5	4.0		ノコロ成形	ノコロ成形
2			A 類			4.4		ノコロ成形	ノコロ成形	住居跡上。 口縁-底部破片。
3			A 類	(11.2)	(7.2)	4.4		ノコロ成形	ノコロ成形	住居跡上。 ヘラ切か? A-a-1
4			A 類	(13.3)	5.7	4.2		ノコロ成形	ノコロ成形	床面。 ヘラ切無調整。 A-a-1
5			A 類	(13.4)	(6.4)	3.8		ノコロ成形	ノコロ成形	埋土中。 ヘラ切無調整。 A-a-1
6			B 類	(13.8)	(7.0)	4.4		ノコロ成形	ノコロ成形	埋土中。 回転糸切無調整。 B-b-1
7			D 類				無段	不 明	不 明	埋土中。 内黒褐色処理。ヘラミガキ。
8			A 類	(5.9)				ノコロ成形	ノコロ成形	回転糸切底部片。 A-b
10			A 類	(13.9)	(7.1)	4.0		ノコロ成形	ノコロ成形	詳細不明。 A-e-1

Df 59 住 (横矢家屋)	1	No.122	D 類	8.7	6.2	3.2	無段	横 ナ ゼ	ハラケズリ	コマド軸。	D-II-a-1
	2	No.123	土師器 高環	11.0	脚径 6.2	7.1	軽い段	横ナア+ ハラミガキ	ハラミガキ	床面。脚部外面ハラミガキ。	
Dg 09 住 (新 期)	1	No.125	D 類 (14.6)	(12.1)	5.1	沈線	横 ナ ゼ	ハラケズリ	埋土内。	D-II-a-1(4)	
	2	No.126	D 類	14.0	7.8	4.9	沈線	横ナデのち ハラミガキ	ハラケズリ	くびれあり。	D-I-e-4
	3	No.127	D 類	12.8	7.5	5.0	沈線	ハラミガキ	ハラミガキ		D-I-c-3
	4	No.128	土師器 高環	11.1	脚径 3.8	4.7	沈線	ハラミガキ	ハラケズリ	コマド部分?	
	6		A 類 (14.3)				ノコギリ	ノコギリ	ノコギリ	口縁-体部片。	
Dg 09 住 (旧 期)	1	No.130	D 類	15.2	9.5	5.2	軽い段	ハラミガキ	ハラケズリ+ ハラミガキ	床面。 3と重なって出土。	D-II-e-5
	2	No.131	D 類	14.1	9.1	4.6	沈線	ハラミガキ	ハラミガキ	床面。	D-II-c-4
	3	No.132	D 類	14.6	7.9	5.0	沈線	横ナデのち ハラミガキ	ハラケズリ	床面。 1を下にして出土。	D-II-e-4
	4	No.133	D 類	14.9	4.1	4.2	2本の 沈線	ハラミガキ	ハラケズリ		D-I-e-4
	5	No.134	D 類	17.3	15.9	6.6	沈線	ハラミガキ	ハラケズリのち ハラミガキ	口縁内溝。	D-II-c-6
	6	No.135	D 類	15.2	8.2	5.8	沈線	横ナア+ ハラミガキ	ハラケズリ	南壁際床面。	D-II-e-5
	7	No.136	D 類	14.2	8.7	7.7	無段	ハラミガキ	底面のみ ハラケズリ	コマド内。	D-II-e-4
	8	No.137	土師器 高環	16.0	脚径 10.1	13.5	沈線	横ナデのち ハラミガキ	ハラミガキ	南壁直下床面。	
Dh 56 住	1		D 類 (10.4)			沈線	ハラミガキ	(ハラケズリ)	埋土中。		
Dj 18 住	3		土師器 高環	—	脚径 7.0	—	—	—	ハラケズリあり	底部-脚部にかけての破片。	
Ea 50 住	1		D 類 (11.2)	(7.4)	3.1	無段	ハラミガキ	不 明	床面。	D-I-f-?	
	2		D 類 (12.9)	(10.0)	(2.7)	右段	(ハラミガキ?)	ハラケズリ		D-I-f-?	
	3	No.157	D 類 (13.1)	(12.3)	4.2	沈線	横ナアのち ハラミガキ	ハラケズリ	床面。黒斑あり。 底部に割線あり。	D-II-e-4	
	4		D 類 (15.2)	(6.7)	5.3	浅い段	ハラミガキ	ハラケズリ	埋土。	D-I-e-5(5)	
	5	No.158	D 類	15.0	12.3	4.5	右段	横ナアのち ハラミガキ	ハラケズリ	床面。	D-I-e-5
	6	No.159	D 類	13.0	7.0	5.8	無段	横ナアのち ハラミガキ	ハラケズリ	床面。	D-II-e-4
	7	No.160	D 類 (16.1)	(15.2)	—	沈線	ハラミガキ	ハラケズリ	埋土。 外面に黒斑あり。		
	8		D 類 (17.1)	—	—	右段	横 ナ ゼ	ハラケズリ	埋土。平底。		
	9		A 類 (14.0)	(10.0)	3.8	ノコギリ	ノコギリ	ノコギリ	床面。 ハラミガキ調整。	A-a-ロ	
Ee 27 住	1		D 類 (18.0)	(9.4)	6.4	沈線	ハラケズリ	ハラケズリ	床面。平底。	D-I-d-5(5)	
	2	No.168	D 類 (13.4)	(8.3)	4.3	無段	不 明	不 明	床面。丸底風。	D-I-f-5(4)	
	3	No.169	D 類	11.6	(7.1)	5.0	無段	ハラケズリ	ハラケズリ	東壁埋土中。平底? D-I-d-5(3)	
	4	No.170	D 類	14.5	4.2	6.2	無段	ハラケズリ	ハラケズリ	床面。平底。	D-II-d-4
	5		D 類	12.8	7.9	4.8	無段	ハラケズリ	ハラケズリ	床面。黒斑あり。平底風。 D-I-d-3	
	6	No.171	土師器 高環	10.4	脚径 6.8	5.9	沈線	ハラミガキ	ハラケズリ	床面。脚部にハラミガキあり。	

Ee 30 住	1	No.176	D 類	12.0	7.2	4.9	無段	横 ナ デ	ヘラケズリ	床面。	D-I-a-3
	2	No.177	D 類	11.0	6.8	4.2	有段	ヘラミギキ	ヘラミギキ	床面。平底。	D-II-c-3
	3	No.178	D 類	13.4	7.5	7.2	有段	ヘラミギキ	ヘラミギキ	床面。平底。	D-II-c-4
Eg 09 住 (焼失家屋)	1		D 類	13.3	6.4	6.3	無段	ヘラミギキ	ヘラミギキ	外面底部に黒塗。	D-I-c-4
	2		D 類	(14.9)	(6.0)	5.3	有段	不 明	{ヘラケズリ?}	床面。内面の黒色処理が消えている。	
Cd 12 整六状遺構	1	No. 36	A 類	(16.2)	(6.8)	(5.1)	/	ロクロ成形	ロクロ成形	埋土上半部。回転糸切後手持ヘラケズリ。B 類の色調。A-b-イ	
	2	No. 37	A 類	14.6	7.9	5.8	/	ロクロ成形	ロクロ成形	埋土。回転糸切後手持ヘラケズリ。A-b-イ	
	3		A 類		(6.0)		/	ロクロ成形	ロクロ成形	埋土。 回転糸切底部片。	A-b
	4		A 類		(6.0)		/	ロクロ成形	ロクロ成形	埋土。 回転糸切底部片。	A-b
Ca 03 竪立	1		D 類	(17.2)			無段	ヘラミギキ	ヘラケズリ	覆り方覆土内出土。	
Da 09 竪立	1		C 類	(12.7)			/	ロクロ成形	ロクロ成形	上同。	
	2		A 類	(12.8)			/	ロクロ成形	ロクロ成形	上同。 口縁-体部片。	
Dh 12 竪立	1		C 類	(14.5)			/	ロクロ成形	ロクロ成形	覆り方覆土内出土。	
Be 03 ビット	1	No.186	D 類	14.9	12.4	4.9	有段	横ナデキ ヘラミギキ	ヘラケズリ	床面。 外面黒塗。	D-I-a-4
第 1 号溝	1		D 類	(12.1)			有段	横 ナ デ	ヘラケズリ	埋土中出土(Ba 77 地点) 口縁-体部片。	
	2	No.195	土師器 高台付石				-	-	ヘラケズリ	Aj 24 地点埋土内。 脚部片。	
第 6 号溝-1	1		A 類		(6.8)		/	ロクロ成形	ロクロ成形	東平部埋土中。底部片。 ヘラ切。	A-a
	2		A 類		6.0		/	ロクロ成形	ロクロ成形	Cd 06-50 地点。底部片。 回転糸切。	A-b
第 6 号溝-2	9		A 類		(14.0)		/	ロクロ成形	ロクロ成形	Bg 15 地点埋土中。 口縁-体部片。	
第 10 号溝	1		D 類	(12.9)			無段	ヘラミギキ	ヘラミギキ	溝内覆土中。	
	3	No.203	須恵器 高台付石	13.5	脚注 (8.1)	5.2	/	ロクロ成形	ロクロ成形	Ea 30 地点。 埋土下部。	
	5		土師器 高台付石				-	-	ヘラミギキ	埋土中。 脚部片。内黒。	
	6		D 類				-	-	ヘラミギキ	Eab 27 地点。底部片。 口縁あり。	
	12		D 類	(12.6)	(8.4)	2.4	有段	横 ナ デ	ヘラケズリ	Eab 27 地点。 埋土下部。	
	13		B 類	(11.9)	(7.5)	2.0	/	ロクロ成形	ロクロ成形	灯芯痕あり。 燈明蓋か?	
	14		(B 類)	(11.0)	(7.0)	2.6	-	不 明	不 明		
	15		(B 類)	(11.3)			-	不 明	不 明	東端部埋土中。	
	16		(B 類)	(11.2)			-	不 明	不 明	外面部付近に凹凸。	
	17		(B 類)	(12.2)		2.8	-	不 明	不 明		
	18		(B 類)	(9.0)		1.9	-	不 明	不 明	比較的硬質。	
	19		(B 類)	(10.6)			-	不 明	不 明	埋土中。 比較的硬質。	
20		B 類	(10.3)			/	ロクロ成形	ロクロ成形	埋土中。 灯芯痕らしき部分あり。		

第10号溝	21	B 類 (8.2)		1.4	/	ロクロ成形	ロクロ成形	回転糸切痕か? B-(b)-ハ
	22	(B 類) (8.1)		1.5	/	不 明	不 明	
	23	C 類 (14.0)			/	ロクロ成形	ロクロ成形	Eed 21 地点 I 層,
	24	D 類 (12.0)			無段	不 明	不 明	Ee 24 地点。 落ち込み部分出土。
第12号溝	1	D 類 (12.3)	(10.3)	4.5	右段	横ナデ+ヘラミガキ	ヘラケズリ	De 27 地点。 平底。 D-I-e-3
	2	D 類 (12.4)			右段	横 ナ デ	不 明	Dh 33 地点。 磨滅が激しい。
	3	No.200 B 類 (14.0)	(5.5)	3.7	/	ロクロ成形	ロクロ成形	回転糸切。2条の沈線あり。 蓋のようでもある。
第13号溝-1	1	D 類 (14.4)			無段	横 ナ デ	ヘラケズリ	一部に沈線あり。
	2	No.211 土師器高環 (10.8)	脚径 (6.5)		—	横 ナ デ	ヘラケズリ	Be 24 地点埋土下部。内周。 脚部縦方向ケズリ。
第13号溝-2	16	D 類 (12.3)	(6.1)	3.5	無段	不 明	不 明	Dod 27 埋土下部。 平底。
	17	B 類 (15.0)	(8.0)	4.1	/	ロクロ成形	ロクロ成形	埋土中。 ヘラ切無調整。 B-a-ロ
	18	D 類 (12.9)	(6.5)	4.1	右段	不 明	ヘラケズリ	Dab 27 地点埋土。 巻き上げ痕あり。
	19	D 類 (15.5)	(12.5) (4.6)		沈線	横ナデのちヘラミガキ	ヘラケズリ	埋土。
	20	D 類 (6.0)			—		ヘラケズリ	口縁部欠失。
	21	D 類 (16.6)	(12.9) (6.1)		沈線	ヘラミガキ	ヘラケズリ	Ee 27 地点埋土。 黒斑あり。
	23	A 類 6.8			/	ロクロ成形	ロクロ成形	Ce (24 地点埋土。底部片。回転糸切後底部外周ヘラケズリ。
	24	A 類 (6.3)			/	ロクロ成形	ロクロ成形	埋土。底部片。手持ヘラケズリ調整あり。
	25	B 類			/	ロクロ成形	ロクロ成形	Cg 24 地点。底部片。 回転糸切。
第14号溝	1	D 類 (12.4)	(5.6)	3.5	無段	不 明	不 明	Ee 27 地点埋土下部。 平底。
	2	D 類 (12.0)	(7.3) (4.3)		無段	ヘラミガキ	ヘラミガキ	Ee 27 地点埋土下部。 平底。
	3	D 類 (14.5)	(13.4) 3.2	右段	ヘラケズリ	ヘラケズリ	段の位置は底部直近。 平底。	
Bf 06 溝状遺構	1	D 類 14.0	10.1 3.9	右段	横 ナ デ	底面のみヘラケズリ	床面。 黒斑あり。 D-I-a-4	
	2	D 類 (14.2)	(12.8) (4.2)	右段	横 ナ デ	ヘラケズリ	丸底面。	
	3	土師器高環			—	ヘラミガキ?	—	内周高目片。
Cb 06 溝状遺構	1	D 類 (10.4)	(6.4)	3.6	右段	横 ナ デ	ヘラケズリ	床面。 D-II-a-②
	2	No.181 D 類 (12.7)	(9.8)	4.3	右段	横 ナ デ	ヘラケズリ	床面。 D-I-a-③
	3	No.182 D 類 (13.2)	(11.2) 5.5	右段	横 ナ デ	ヘラケズリ	床面。 黒斑あり。 D-II-a-(4)	
	4	No.183 D 類 10.4	7.4 3.3	無段	横 ナ デ	ヘラケズリ	床面。 D-I-a-2 体部の一部に赤彩色か。	
	5	No.184 D 類 10.5	8.2 3.8	右段	横 ナ デ	ヘラケズリ	床面。 黒斑あり。 D-I-a-2	

註 (1) 法量値の()は反転復元等による推定計測値である。

(2) 第10号溝、種別欄内に(B 類)とあるのは、ロクロ成形か手捏ねによるものか不明のものである。

(3) 表土中からの遺物については、遺構の伴わない遺物の項に詳細を記しているため、本表から除外している。

(b) 分類とその結果

以上、207点のA・B・C・D類環の一覧を記したが、分類記号を付したものはA類62点、B類8点、C類7点、D類71点である。これ以降の記述はこれら記号化されたものを中心として進めていくが、先ずロクロ不使用のD類環について、次いでロクロ成形A・B・C類についての順に記していくこととする。

(イ) D類

D類は記述の如く71点についての結果である。これらについては、下表の通りの共伴を示している。但し、数値の誤差が許容量以上に推察される場合は除外しており、最終的には58点についての記述である。

第33表 D類土器分類並に遺構毎共伴一覧

分類 遺構名	I - a				I - c			I - d		I - e			I - f			II - a			II - c			II - d			II - e		
	1	2	3	4	5	2	3	4	3	3	4	5	3	4	3	1	3	4	6	3	4	2	3	4	5		
Bb30住				No.1																							
Bc24住			No.1																								
Bd36住				No.1																							
Cc53住			No.1																								
Be03ピット				No.1																							
Ct06溝状	No.4 No.5														No.1 No.2 No.3												
Bf06溝状				No.1																							
Ci30住		No.3		No.4 No.5																		No.1 No.2					
Eg09住							No.1																				
Bd71住					No.2											No.3										No.4	
Bi53住												No.4															No.5
Da30住			No.3						No.1													No.2					
Df59住	No.1																										
Ec27住								No.5						No.2								No.4					
Be50住			No.4							No.2		No.3	No.1														
Dd03住						No.2 No.5					No.8 No.9						No.4					No.1 No.5	No.6				
Dg09住前										No.4							No.2	No.5							No.3 No.7	No.1 No.6	
Dg09住前						No.3				No.2																	
Ee30住		No.1														No.2	No.3										
Ea50住											No.4 No.5														No.3 No.6		
12号溝									No.1																		
合計	1	2	4	6	2	3	1	1	1	2	3	5	1	1	4	1	1	3	1	1	1	1	4	1	5	3	
総合計	15				5			1	10			2		4			6			2			13				

第33表によれば、口縁が外傾—外反する器形のⅠ群には33点、直口・内湾するⅡ群には25点の環がある。前者のうち外反するのはBb30住No.1とCb06溝状遺構No.4の僅か2点だけであり、他は外傾するものだけである。外反する2点の仕上げ技法は何れもa.(横ナデ—匱削り)によるものである。また、口縁の形状と器高との関わりで全体をみた場合は、Ⅰ群には概して器高の低い環が多く、Ⅲ群中にはその逆の例が目立っているといえよう。

成形技法面からは、b.(横ナデ—匱ミガキ)の組合せによる例はなく、体部上半を横ナデあるいは匱削りする際の底部は匱削りによってのみ仕上げられ、また体部上半を匱ミガキで成形する際は、その底部には匱ミガキ・匱削りの両様を施すことが知られる。但し、後者の中には、Ea50住No.3・5・6、Dg09住(新)No.2、Dg09(旧)No.6、Ee30住No.3のように体部上半に横ナデの痕跡を留める例もある。最終的には、匱ミガキで調整していることからe.(匱ミガキ—匱削り)の手法として分類したものであるが、本来的には横ナデによって器形を整えるのであろう。したがって、c.(匱ミガキ—匱ミガキ)、d.(匱削り—匱削り)、e.(匱ミガキ—匱削り)の手法による環類もまた既述の5点の環類と同様の経緯を辿るものと思われる。このようなことから、結果的には横ナデという前段の整形技法をそのまま残すaの手法、その上に再調整を加えるc・d・eの手法とによる二種のタイプに大別されるであろう。本項では匱削りと匱ミガキの技法差を時間的な流れとして捉えることには言及しないが、先学の業績に従い、a→c・d・eの変化とみることは大過あるまい。

更に、体部における境界(段・沈線等)との関係について付記しておく。第34表を参考されたい。分類記号化された58点の環による技法と境界の組合せを一覧である。欄内の数字は土器点数を表わしている。これによると、体部と底部の境界のあり方が成形技法によってある程度左右されていることが窺えるであろう。aによる成形で無段となっているBe50住No.5とEe30住No.1の2点は、横ナデが体部下端にまで及び、匱削りの範囲も底面を中心としていることから、結果的には段が形成されない形になったものであるが、しかしDf59住No.1にも類似のタイプの環があり、この場合は、底部直近に僅かながらも段を有している。また、前2点の横ナデと匱削りの接点には稜の名残りの痕跡が観察されることから、技法の接点には何らかの境界が生じて然るべきことが本来的なあり方なのであろう。換言すれば、aの成形による環は有段の器形を呈するのが一般的であるということである。

一方、c・d・eの成形による環類は沈線・無段のものが大勢を占めており、例外的な環の中に

第34表 成形技法と境界の組合せ一覧

調整・技法	段・沈線の有無			(計)
	有段	沈線	無段	
a.横ナデ—匱削り	16 ^点	1 ^点	2 ^点	19 ^点
b.横ナデ—匱ミガキ	0	0	0	0
c.匱ミガキ—匱ミガキ	2	2	7	11
d.匱削り—匱削り	0	1	3	4
e.匱ミガキ—匱削り	4	12	6	22
f.不 明	0	0	2	2
(計)	22	16	20	58

は沈線様の段を呈するものも多く、最終的な成形技法によって境界の様相がある程度左右されることを物語っているといえよう。

このようなことから、既述の $a \rightarrow c \cdot d \cdot e$ という技法の推移は、有段 \rightarrow 沈線・無段への変化にも置換されるであろう。また、底部が平底化していく現象もそれに関わって変貌していくものと思われる。

本遺跡内のD類環は、 a による成形で有段・丸底のタイプから、 $c \cdot d \cdot e$ による成形で無段・平底のタイプに至るまでの各様があり、当然時期差をもって変遷しているといえる。

最後に各タイプの組合わせについてふれてみよう。基本的には、既述の如く観点からみて a による技法の有無が関与するものである。即ち、点数は少ないが a の技法による環のみを出土するBb30、Be24、Bd36、Ce53竪穴住居跡群、 a と $b \cdot c \cdot d$ の何れかの技法による環が伴出するCi30、Da30、Be50、Ee30竪穴住居跡群、 a を含まず $b \cdot c \cdot d$ による技法の環のみを出土するEg09、Bd71、Ec27、Dd03、Dg09竪穴住居跡群の三様である。このうちEc27、Bd71竪穴住居跡は無段・平底の環を中心として構成されている。これらの区分は、竪穴住居跡変遷との組合わせにより、大別して二群とされる構成要素の中に組み入れられ、時期的な差として把握することも可能であるが、その詳細は別項で記す。

(口) A・B・C類について

ロク口成形の環類は、反転復元によるものをも含めて45点の実測である。この他に切離し痕や再調整の痕跡を残す底部片が31点あり、合わせて77個以上のロク口成形環が確認されている。底部片を加えた各類の点数は、A類62点、B類8点、C類7点となっており、圧倒的にA類が多い。全体的にみた切離し技法は、回転糸切によるものが34点、寛切によるもの37点となっており僅かに寛切が多い。この他に調整のため切離し技法が不明の環5点、磨滅のため不明のもの1点がある。切離しの不明な6点の環は何れもA類である。

各々の分類の概略については第32表の備考欄に記号化している通りであるが、反転復元による実測環や底部片をも加えた全点数についての遺構毎出土環分類一覧は、次項の第35表に掲げた通りである。これによると数的には寛切によるものが若干多くなっているが、全体的にはそうした大きな差をみせるものではない。また、再調整を有する環はA類のみにあり、B・C類にはみられない。以下、各類の詳細について記してみよう。

A類 第35表によれば、A類は62点となっている。切離しの不明な6点を除くと、31:25の比で寛切が多い。遺物の残り方としては、糸切によるものの中に底部片が多くなっているのが目立つ。これは、A-b-ロ(A類で回転糸切無調整)とされる環群の中に白橙色に近いやや軟質

第35表 A・B・C類坏底部切離し一覧表

注()内は底部片である。

分類 遺構名	A 類						B 類		C 類		計	へら切 …系切
	a. (へら切)		b. (回転系切)		c. 不明		a. へら切	b. 回転系切	a. へら切	b. 回転系切		
	イ. 再調整あり (A-a-イ)	ロ. 無調整 (A-a-ロ)	イ. 再調整あり (A-b-イ)	ロ. 無調整 (A-b-ロ)	イ. 再調整	ロ. 不明						
Bj 65住		4		(3)						(1)	8(4)	4:4
Cb 21住		(2)		2			1		(1)		6(3)	4:2
Cg 56住		(1)		2(1)							3(2)	1:2
Da 21住	1	1									2	2:0
Da56(新)住			1	(1)				(1)			3(2)	0:3
Da56(旧)住		17(5)	1	9(6)	5		1	1	2(1)	(1)	37(13)	20:12
Da 74住		1		1				1		(1)	4(1)	1:3
Dd 50住		3		(1)		1		1			6(1)	3:2
Cd12竪穴伏			2	(2)							3(2)	0:4
Dc 71住							(1)	(1)		(1)	(3)	1:2
Ea 50住		1									1	1:0
計	1	30(8)	4	21(14)	5	1	3(1)	5(2)	3(2)	(4)	77(31)	37:34

の坏類が含まれているためである。この種の坏には完形品がなく何れも底部片のみである。しかも切離しは回転系切によるものであり、残存する部分にあって再調整の痕跡は観察されない。特に軟質のものについては、Cg56・Da56新旧竪穴住居跡等から出土する5点であり、第32表環型土器法量・技法等一覧表内でA'としている。他にもこれらに近い底部片が若干散見される。寛切のものと同様の坏類がないことは、系切の技法と生産体制との関わりの中で、そういう坏類が出現せざるを得ないような要因が存在したことであろうか。

何れにしろ、このような切離しの相異からA-a(寛切のA類)、A-b(回転系切のA類)の二つに大別されるA類は、再調整の有無やその方法によって更に細分される。その内訳の概要は先に記した第35表の通りである。これによれば、再調整を有す坏は10点、そのうち前段の切離し痕を残しているもの5点、再調整によって切離し痕が完全に不明のもの5点となっている。前者は、Da21・Da56新旧竪穴住居跡、Cd12竪穴伏遺構にみられる。Da21竪穴住居跡出土No.1は寛切後の再調整であり、他は回転系切後のそれによるものである。切離し痕を残しているのは、再調整が底部の外周のみに施されている例が多いためである。再調整技法は回転・手持寛削りの両様のみみられる。後者の5点は旧期Da56竪穴住居跡だけからの出土であり、何れも手持寛削りによる再調整であり、しかもその範囲は底面に限られている。これら5点の坏は、体部凹凸が顕著であり、体部と底部の境界も明瞭である。胎土も比較的良質であり、焼成もよくひき締

まった感じである。

以上のようなことから、A類環は最低で5つのタイプ、即ちA-a-イ・A-a-ロ、A-b-イ・A-a-ロ、A-c-イが設定されよう。これらの遺構毎の伴出状況は第35表の如くである。しかし、個々の遺構に於ける出土点数やそのあり方に偏向があり、全体からみる傾向を普遍化するまでには至らない。また、既述の5タイプにあっても、経過としては寛切一回転糸切、再調整→無調整等の時間的推移があったかもしれないが、各遺構でのあり方は多様であり、そのまま置き換えることも尚早である。

現象面としては、第Ⅲ期-(1)群に属するとされるBj65・Cb21・Cg56・旧期Da56竪穴住居跡にはA-a・A-bの両様があり、全体量としてはA-aが多くなっている。一方、第Ⅲ期-(2)群の方は、A-aのみのDa21竪穴住居跡、A-bのみの新期Da56竪穴住居跡・Cd12竪穴状遺構、両様を出土するDa74・Dd50竪穴住居跡等と多様であるが、全体的にはA-bの方が多くなっている。このうち(1)群のBj65・Cb21・Cg56竪穴住居跡、(2)群のDa74・Dd50竪穴住居跡はA-a・A-bの両様を出土する遺構群であるが、何れも無調整の坏だけで構成されている。

また、Ea50竪穴住居跡出土No.9のA-a類は反転復元によるものであるが、他のA類とやや器形を異にしている。当遺構は、本遺跡にあってA類とD類が共存する唯一の例である。D類環で代表されるⅡ期群内でのA類の存在は、同期と目されるDa30竪穴住居跡出土No.6の高台付環と共に、他地域からの搬入品とも解されていたが、巻末に掲げた土器胎土分析の結果でみる限りでは、必ずしもそうではないようである。即ち、Ⅱ期相当Da30竪穴住居跡No.6(資料No.8)とⅢ期相当Bj65竪穴住居跡出土のA類片(資料No.9)の分析結果は、同一タイプとされ、供給源として北上川河東が想定されている。従って、このことについては、“分析結果に関する若干の問題提起”でも提示した如く新たな可能性を想起させることでもある。が、しかし現段階での即断は避け、今後拡大されるであろう種々の分析結果に期待する。^{註1}

B類 溝関係のものを除き8点の出土であるが、3点は底部片となっている。何れも無調整と思われるもので、寛切3点・回転糸切5点である。相対的にはⅢ期-(2)群とされる遺構出土のものも多く、糸切によるB-b類も同群の遺構に多い。胎土中に石英細粒・粗砂等を混入する雑な作りのものが目立ち、その傾向はA-b類に顕著である。全体の形状を知り得る旧期Da56竪穴住居跡No.4・16、Da74竪穴住居跡No.2、Cb21竪穴住居跡No.3について言及すれば、体部の凹凸が多くA類ほど目立たないものの、客観的にはA類的形態に類似しているものといえよう。C類で唯一の完形品である旧期Da56竪穴住居跡出土No.1のそれとは明らかに異なるものである。これらの環は、回転糸切無調整のNo.16・2がB-b-ロ、寛切無調整によるNo.3・4はB-a-ロと、分類上では各々記号化される。

本遺跡に於けるB類環は、その技法にかかわらず何れの場合も所謂須恵系土器とは一線を画す土器群であり、この種の環類が古代の比較的古い段階からみられることは周知の通りである。この時期のB類似環が須恵器生産を意図したものかどうかは別としても、白橙色を呈すA'とした環類の存在とともに、土器製作過程の中でこれらの環類が発生してくるだけの要因があったことは確かであろう。

結果的には須恵器製作段階での所産ではあったかもしれないが、何れその後においてB類似の環を主体的に製作することとなる時期の先鞭役と成り得ることは否定しない。従って、B類の発展的系譜に於ける初期的段階のあり方にも着目して設定した一群の土器ともいえよう。

また、A類に比して絶対数が少ないことから、消費の場において一般的ではない共存が窺えよう。この傾向はC類にあっても同様であり、Ⅲ期内で定着した出土率をみせるものではない。

尚、この他に第10号溝から小型で切離しの不明なB類が出土している。何れも反転復元による実測であり、中にはロクロ成形可否かの区別もつかない例がある。僅かにNo.21の1点のみが、回転糸切と思われる痕跡を残しているにすぎない。黄橙色・赤褐色を呈し、概して軟質のものが多く、No.13は、灯芯痕とも推される黒変部分が内面にみられることから、燈明皿の類いの用途に具されたものでもあろうか。類似例としては、平泉町毛越B遺跡・金ヶ崎町鳥海A、西根遺跡等にも求められよう。これらの環群は何れも古代の終末期から中世にかかる時期に比定されている。

註1. 委米 鑑定・分析結果 土器胎土分析の項を参照されたい。

C類 住居跡内からは7点の出土であるが、旧期Da56竪穴住居跡出土No.1を除き他は底部片で占められる。ロクロ成形で内面に黒色処理・寛ミガキを施すという特徴で区分される土器群であり、分類上ではC類としている。7点についての切離しは寛切；回転糸切=3：4となっており、唯一の完形品である旧期Da56竪穴住居跡出土No.1は寛切によるものである。B類と同様に全体の中での出土率は小さく、明確なセット関係を構成するとは言い難い。遺構毎出土のあり方は、第Ⅲ期-(1)群のBj65・Cb21・旧期Da56竪穴住居跡に合計5点、同-(2)群のDc71・Da74竪穴住居跡に各1点ずつみられる。C-a(寛切によるC類)は第Ⅲ期-(1)群のみにあり、第Ⅲ期-(2)群の遺構はC-b(回転糸切のC類)だけの出土である。

器形的な立場からは、旧期Da56竪穴住居跡出土No.1について述べる。

No.1は、小型で体部が直口する形態であり、ロクロ成形以前のD類環に酷似している。少なくとも、A・B類とした環群の形態とは異なるものである。C類が出現する背景としては、Ⅱ期群に存するD類の系譜が考えられるのは当然のことであり、その立場では内黒・寛ミガキの技法が踏襲されているといえよう。しかし、第Ⅲ期-(1)群のCg56竪穴住居跡にみられるロクロビットのあり方からしても、集落内に於けるロクロ成形土器の生産が定着しているであろうこ

とは推察されるが、各類環の出土頻度には大きな差があり、主体的に環の生産、とりわけC類の生産をしていたかは定かでない。集落内での需要を満たす供給源が、集落内にあるのは自然的なことではあるが、微量なC類のあり方は少なくとも需要者側の要求に応えるべき量とは言い難く、D類を主体的に使用する第Ⅱ期群に比して、要求されるべき対象の変化があったことかもしれない。Ⅱ→Ⅲ期への流れは、遺物のあり方としては、D類とC類が共存する過渡的時期、あるいはそうでなくとも併行する時期の場合などが考えられるが、遺跡の性格によって異なることは推察されるため、結果的に混乱期的様相を呈す場合と、集落の存続が一見切れた形で営まれる場合等の現象が生じてくるのであろう。本遺跡でのあり方は、既述のようにC類の出現率が少ないという経過があるが、これは長期的なものではなく本来的にはC類の生産が一般的になる前段の一過程と考えている。それにも拘らず第Ⅲ期-(2)・(3)群の営まれる時期であってもなおC類の増加がみられないのは、本遺跡に於ける需要者側の要求に関わる変化がそのまま通常の集落とは様相をやや異にする性格を有していることに通じるためでもあろうか。

何れにしろ、A類の生産体制とは一線を画すであろうC類のあり方は、切離し技法などでみる限りでは何ともいえないが、量的にはやはり独自の生産体制の中での所産とい得よう。また、その体制の中でD類の伝統的技法を受け継いだC類が派生してくるものとするならば、本遺跡内に於けるⅡ→Ⅲ期への移行は、A類に圧倒されながらも比較的スムーズに行なわれたとみていいであろう。

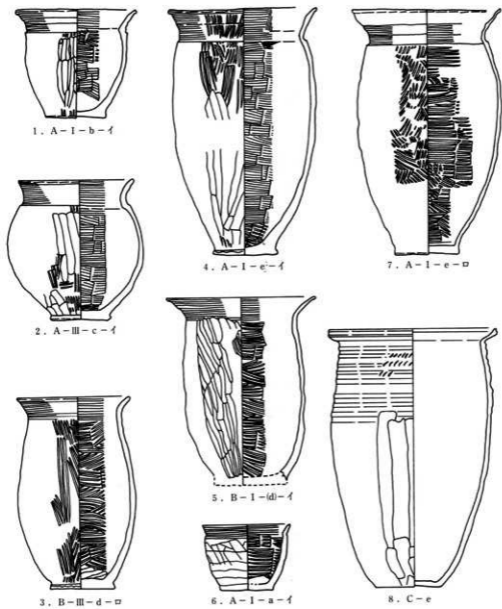
B. 甕型土器について

(a) 分類基準

甕型土器の分類基準は、右表の通りである。その他には、底部突出の様子や木葉痕の有無等についても考慮したが、最終的な記号化の段階では省略している。具体的な分類例については第105図に示した通りである。これによると、A(ロクロ不使用肩部有段)、B(同肩部無段)、C(ロクロ成形)の3タイプに大別され、以下器形(I・II・III・IV)、器高(a~e)、調整(イ・ロ・ハ)の組み合わせによって細分されることとなる。各々の甕の分類結果は記号化して第37表の備考欄に記している。

第36表 甕型土器分類基準

ロクロ・肩部	器形	器高	調整
A ロクロ不使用 肩部有段	I. 口縁外反 長胴形 最大径=口縁	a. 6~10cm	イ. 刷毛目 +
	II. 口縁外反 長胴形 最大径 体部中央		
	III. 口縁外反 球胴形	c. 18~23cm	ハ. 刷毛目
	IV. 口縁外傾・外反 胴部のはっきり しないもの	d. 24~29cm	イ 外 (刷毛目 + 荒ナデ等)
B ロクロ不使用 肩部無段	I に 同 じ	e. 30cm以上	
C. ロ ク ロ 成 形			



1. Dd03竪穴住居跡 2, 4, 7. Bi53竪穴住居跡
 3. Da30竪穴住居跡 5, 6. Ci30竪穴住居跡 8. Da56竪穴住居跡

第105圖 甗型土器分類例

第37表 甕型土器法量・技法・分類等一覧表

透視名	登録番号	写真番号	種別	口径 cm	底径 cm	器高 cm	器口 大径 cm	外面調整		内面調整		備考(分類記号・その他)
								口縁	体部	口縁	体部	
Bb30住	3		土師器		7.3					ヘラナデ		床面出土。底部木葉痕。底部片 球割。外面集積り部分あり。
Bc24住	3		土師器	(7.7)					刷毛目 ヘラケズリ	刷毛目		床面出土。体部下端へ底部片。
	4	No.14	土師器	22.4	(10.4)	(29.0)	27.0	横ナデ	ヘラケズリ	横ナデ	ヘラナデ	床面出土。球割。 A-1-a-d-e-i
	5		土師器	(21.8)								床面出土。口縁へ肩部片・磨滅あり。
Bd36住	2		土師器	(18.1)				横ナデ	ヘラケズリ	不明	不明	巻上げ痕残り。肩部有段。
Bd71住	5		土師器	(17.4)			(15.4)	横ナデ	ヘラケズリ	横ナデ	ヘラナデ	床面出土。 有段。口縁部に凹みあり。
	6		土師器	13.5	(7.0)	10.8	(9.9)	横ナデ	ヘラケズリ	横ナデ	刷毛目	床面出土。底部欠失。 B-1-a-e-i
	7		土師器	16.5		(16.5)	14.3	横ナデ	ヘラケズリ	横ナデ	刷毛目	床面出土。底部欠失。 B-1-c-e-i
	8		土師器	17.3	9.8	25.8	16.8	横ナデ	ヘラケズリ	刷毛目 横ナデ	刷毛目	床面。蓋みあり。 B-1-d-e-i 底部に擦痕あり。
	9		土師器	17.6	(9.0)	25.0	(15.8)	横ナデ	ヘラケズリ	横ナデ	刷毛目 横ナデ	刷毛目
Bd80住	2		土師器	(20.7)				横ナデ	ヘラケズリ	横ナデ	刷毛目	口縁が強く外反し。口唇部立ちあがる。
	3		土師器	(20.0)				横ナデ				埋土中からの出土。球割形のもの。
Be50住	10		土師器	(7.8)			11.3		ヘラケズリ		刷毛目	蓋形土器か。外面の磨滅激しい。
	11		土師器	19.7			19.2	横ナデ	刷毛目	横ナデ	刷毛目	床面出土。 口唇部沈没状の凹みあり。
	12		土師器	(18.9)			(18.3)	横ナデ	刷毛目	横ナデ	刷毛目	床面出土。肩部有段。
	13		須恵器									外面に平行印き目痕をもつ体部片。
	14		土師器	(23.6)	(10.4)		(38.6)	横ナデ	刷毛目	横ナデ	刷毛目	床面。大型球割。胴部が直口する。
Bb03住	1	No.17	土師器	18.5			15.8	横ナデ ヘラケズリ	刷毛目	横ナデ	ヘラナデ 一部ケズリ	床面。肩部有段。底部欠失 A-1-c-e-i
	2	No.18	土師器	16.5	7.4	19.8	15.7	横ナデ	ヘラケズリ	横ナデ	横ナデ ヘラナデ	床面。肩部有段。底面部ケズリ A-1-c-e-i
	3	No.19	土師器	21.5	7.8	33.5	22.2	横ナデ	ヘラケズリ	横ナデ	ヘラナデ	床面。肩部有段 A-1-b-e-i 底面部はヘラミダシ。
	4		土師器	17.0			16.7	横ナデ	刷毛目 ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	床面。底部欠失。肩部無段。 B-1-c-e-i
Bb77住	2		土師器	(17.2)	(10.1)	24.8	(16.8)	横ナデ	刷毛目 ヘラケズリ	横ナデ	刷毛目 ヘラナデ	床面出土。体部炭化物付着。 底部一部欠失。 A-1-d-e-i
Bb53住	6	No.28	土師器	15.3	7.0	10.9	13.3	横ナデ	ヘラケズリ	横ナデ	刷毛目 ヘラナデ	球割。底部ヘラケズリ。 A-1-a-e-i
	7	No.26	土師器	15.5	8.3	18.9	18.4	横ナデ	刷毛目 ヘラケズリ	横ナデ	刷毛目 ヘラナデ	床面。木葉痕。肩部有段。 A-1-b-c-e-i
	8	No.22	土師器	16.0	7.8	13.5	13.4	横ナデ	刷毛目 ヘラケズリ	横ナデ	刷毛目 ヘラナデ	床面。内外とも磨耗。 A-1-b-e-i
	9	No.23	土師器	17.2	5.0	18.7	15.6	横ナデ	ヘラケズリ	横ナデ	刷毛目	床面。肩部有段。木葉痕。 A-1-c-e-i
	10	No.29	土師器	22.2	8.7	21.6	20.3	ヘラナデ	刷毛目	ヘラナデ	刷毛目	床面。肩部有段。木葉痕。 A-1-d-e-i
	11	No.24	土師器	19.5	9.3	32.4	19.0	刷毛目 横ナデ	刷毛目 ヘラケズリ	横ナデ	ヘラナデ	床面。肩部有段。 A-1-e-e-i
	12	No.25	土師器	20.2	8.8	33.3	19.4	刷毛目 横ナデ	刷毛目 ヘラケズリ	横ナデ	ヘラナデ	刷毛目
Bj65住	7		土師器	(18.3)			残存 (16.3)		ヘラケズリ			ロクロ成形 C

Dc 74 住	4		道巻器															体部片。 内面にタキ目。外面タキ目。	
	5		道巻器															体部片。床面出土。	
	6		土師器 (24.2)															ロクロ成形。反転覆元。	
Db 33 住	3		土師器 (19.5)					横ナデ	ヘラケズリ	横ナデ	刷毛目							白褐色。良質の胎土。A	
	1		土師器 (19.9)															ロクロ成形。ロクロナデ痕明確。	
Dc 71 住	2		土師器 (22.0)															床面。 ロクロ成形。口縁部立ちあがる。	
	Dd 03 住	22	No. 109	土師器 (20.1)					残存部 (18.5)	刷毛目 横ナデ	刷毛目のち ヘラケズリ	横ナデ	刷毛目						コマド内出土。 有黒斑。肩部段目立たず。
23			土師器 12.8	7.0	12.8	11.0		横ナデ	刷毛目	横ナデ	刷毛目	横ナデ	刷毛目					埋土中。 A-1-b-ロ	
24		No. 110	土師器 17.9				28.4	横ナデ	刷毛目	横ナデ	刷毛目	横ナデ	刷毛目 ヘラナデ					朱紅色を施す模刷形。 A-重-(不明)-イ	
25		No. 111	道巻器 24.5															口縁部片。床面出土。	
26			土師器 17.0					横ナデ	刷毛目 ヘラケズリ	横ナデ	刷毛目	ヘラナデ						模刷を呈す。口縁-体部上半片。 A-Ⅲ	
27		No. 112	土師器 18.7				26.6	横ナデ	刷毛目 ヘラミガキ	横ナデ	刷毛目	ヘラミガキ						コマド左端出土。模刷を呈す。 A-Ⅲ	
29		No. 113	土師器 (19.7)	(9.1)	33.4	20.8		横ナデ	刷毛目	横ナデ	刷毛目	横ナデ	刷毛目					木葉底。黒斑あり。肩部有段。 A-1-e-ロ	
30		No. 114	土師器 (20.0)	(8.8)	32.8	19.5		横ナデ	刷毛目	横ナデ	刷毛目	横ナデ	刷毛目					木葉底。肩部有段。 A-1-e-ロ	
31		No. 115	土師器 (16.3)	8.2	15.6	13.6		横ナデ	刷毛目 ヘラミガキ	横ナデ	刷毛目	ヘラナデ						木葉底。肩部有段。 A-1-b-イ	
32		No. 116	土師器 (14.0)	6.5	13.2	11.5		横ナデ	刷毛目 ヘラケズリ	横ナデ	刷毛目	横ナデ	刷毛目					木葉底。 A-1-b-イ	
33		No. 117	土師器 (21.4)	9.8	32.7	20.8		刷毛目 横ナデ	刷毛目	横ナデ	刷毛目	横ナデ	刷毛目						木葉底。炭化物付着。 A-1-e-ロ
34			土師器 8.9							ヘラケズリ		刷毛目 ヘラナデ						体部下半-底部片。	
35			土師器							刷毛目 ヘラケズリ		刷毛目							体部下半片。
36			土師器 7.9							ヘラケズリ		ヘラナデ							木葉底。体部下半-底部片。
37			土師器 21.5				20.3	横ナデ	刷毛目 ヘラケズリ	横ナデ	刷毛目	横ナデ	刷毛目						体部下端-底部欠失。肩部有段。
38			土師器 (17.4)				17.3	横ナデ	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラナデ								口縁外反。肩部有段。
39			道巻器																大ゴメ体部下端-底部片。体部下 端はタキ目のあとにヘラケズリ。
40			土師器 (19.5)				17.5	横ナデ	刷毛目	横ナデ	刷毛目	横ナデ	刷毛目						口縁外反。肩部有段。
41		No. 118	土師器 (19.0)	8.4	33.1	19.9		横ナデ	刷毛目	横ナデ	刷毛目	横ナデ	刷毛目						木葉底。肩部有段。最大径側部。 A-II-e-ロ
42		No. 119	土師器 20.5	8.5	33.3	20.6		横ナデ	刷毛目 ヘラケズリ	横ナデ	刷毛目	横ナデ	刷毛目						木葉底。肩部有段。 A-II-e-ロ 口縁径と最大径がほぼ同じである。
Dd 50 住		9		道巻器															タキ目のある体部片。拓影図。
Df 59 住		4		土師器 (21.4)				(17.8)	刷毛目 横ナデ	刷毛目	不明	不明							肩部中や有段。巻き上げ痕残る。
	5		道巻器															タキ目のある体部片。拓影図。	
Dg 09 住 (新 期)	5		道巻器															器内が厚い。 タキ目のある体部片。	
Dg 09 住 (旧 期)	9	No. 138	土師器 16.8	9.0	27.5	16.4		横ナデ	刷毛目	横ナデ	刷毛目	横ナデ	刷毛目					コマド左端内出土。木葉底。 肩部中や有段。 A-1-d-ロ	
	10		土師器 20.0	8.4	31.3	18.7		横ナデ	刷毛目	横ナデ	刷毛目	横ナデ	刷毛目					有黒斑。外面底部ヘラナデ。 A-1-e-ロ	

Dg 09 住	11		土師器		8.0		18.5		刷毛目		刷毛目	口縁部欠失。木葉底。	
	(旧 期)	12	No.139	土師器	18.0	10.2	36.3	18.4	横ナデ	刷毛目	横ナデ	刷毛目	カマド右側袖。木葉底。 A-III-e-ロ
	13	No.140	土師器	21.1		残存 (26.3)	20.3	横ナデ	刷毛目	横ナデ	ヘラナデ 刷毛目	刷毛目	底部欠失。口唇部凹む。 A-I-イ
	14		土師器	19.0		残存 (24.5)	19.5	横ナデ	刷毛目 ヘラケズリ	横ナデ	刷毛目	肩部無段。 口唇部左輪状の凹みあり。	
	15		土師器	19.0			19.7	横ナデ	刷毛目	横ナデ	刷毛目	肩部有段。体部下方欠失。床面。 A-ロ	
	16	No.141	土師器	(13.2)	7.4	13.4	11.5	横ナデ	刷毛目	横ナデ	ヘラナデ	刷毛目	カマド部底面出土。 A-I-b-イ
	17		土師器			9.2			刷毛目 ヘラケズリ			刷毛目	木葉底。体部下端～底部の破片。
	18		土師器			8.3			ヘラケズリ			刷毛目	体部下端～底部片。
	19	No.142	土師器	(11.4)	4.3	6.3	8.4	横ナデ	ヘラケズリ	横ナデ	刷毛目	刷毛目	カマド左側床面出土。小型の鉢に 近い。 (A-IV-a-イ)
	20	No.147				8.5			ヘラケズリ			刷毛目	底部面に横痕跡がある。
Dj 18 住	1		土師器				24.8		ヘラケズリ		ヘラナデ	刷毛目	球製の胴部のみ。
	2		土師器			8.0			ヘラケズリ		刷毛目	刷毛目	体部下～底部片。
	4	No.153	土師器	(19.7)				横ナデ	刷毛目 ヘラケズリ	横ナデ	ヘラナデ	刷毛目	
Dj 27 住	1		土師器	33.2	7.0	11.0	13.0	横ナデ	刷毛目	横ナデ	刷毛目	刷毛目	鉢型土器。 A-IV-b-ロ
	2		土師器	34.1				横ナデ	刷毛目	横ナデ	刷毛目	刷毛目	鉢型土器。 A-IV-ロ
	3		須恵器										埋土中。14号溝出土の破片か。
Ea 50 住	10		土師器	22.2			21.6	横ナデ 刷毛目	刷毛目	横ナデ 刷毛目	刷毛目	刷毛目	床面。肩部有段。口唇部凹み。 A-イ
	11		土師器	19.2			17.9	横ナデ 刷毛目	刷毛目	横ナデ 刷毛目	刷毛目	刷毛目	床面出土。肩部段目立たず。
	12		土師器	17.0		残存 (17.1)		横ナデ 刷毛目	不 明	横ナデ	刷毛目	刷毛目	床面。外面磨耗。肩部有段。
	13		土師器		8.4			ヘラナデ ヘラケズリ		ヘラナデ	刷毛目	刷毛目	床面。体部下平片。 内面一部に黒色処理。
	14		土師器	19.2			17.9	横ナデ 刷毛目	刷毛目	横ナデ	刷毛目	刷毛目	床面出土。肩部段目立たず。
	15	No.167	土師器	(27.0)	9.0	33.9	21.4	横ナデ	刷毛目	横ナデ	刷毛目	刷毛目	床面。木葉底。肩部有段。 A-I-e-イ
16	拓影図	須恵器										埋土中。平行印き目を有す体部片。	
Ec 27 住	7		土師器	(20.0)	9.4	32.2	21.5	横ナデ	ヘラケズリ	横ナデ	ヘラナデ	刷毛目	床面。内面黒色変化。 肩部有段。 A-I-e-ハ
	8		土師器		(8.6)		16.6	横ナデ	ヘラケズリ	ヘラナデ	刷毛目	刷毛目	床面。肩部有段。
	9		土師器	(21.2)			29.0	横ナデ	ヘラケズリ	横ナデ	ヘラナデ	刷毛目	床面。球製。 A-III-d-ハ
	10	拓影図	須恵器										床面。体部片。
Ec 36 住	1	No.44	土師器	(16.0)	9.2	29.4	(18.0)	横ナデ	刷毛目 ヘラケズリ	横ナデ	刷毛目 ヘラナデ	刷毛目	最大径は胴部にある。 床面。肩部有段。 A-III-d(e)-イ
	2		土師器		9.0				ヘラケズリ	ヘラナデ	刷毛目	刷毛目	床面。木葉底片。 球製のものと恐われる。
	3		土師器	(18.7)				横ナデ	ヘラケズリ	横ナデ	不 明	刷毛目	肩部を浅線でご囲っている。
	4		土師器	(15.5)				横ナデ	刷毛目 ヘラケズリ	横ナデ	刷毛目	刷毛目	埋土中。肩部有段。
	5		土師器	18.7	9.7	24.1	25.2	横ナデ	刷毛目	横ナデ	ヘラナデ	刷毛目	床面。木葉底。球製。 A-III-d-イ

Ee 30 住	5		土師器 (16.0)				不明	横ナデ		床面。肩部有段。口縁～肩部片。			
	6		土師器 (17.6)				ヘラナデ (ヘラケズリ)	横ナデ		カマド内出土。 肩部有段。口縁～肩部片。			
	7		土師器 (19.0)			現存 (16.8)	横ナデ	ヘラケズリ	横ナデ	ヘラナデ	床面出土。肩部段目立たない。		
	8		土師器 (24.1)		20.2		横ナデ ヘラナデ	刷毛目 ヘラケズリ	横ナデ	ヘラナデ	カマド底面出土。肩部有段。 底部欠失。 A-1-(e)-イ		
	9	No.180	土師器	22.0		18.7	横ナデ	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラナデ	床面出土。肩部無段。 巻き上げ痕明確。(B-1)		
	10		土師器 (18.2)	9.3	25.8	(17.5)	横ナデ	ヘラミガキ	横ナデ	ヘラナデ	カマド内。肩部無段。 B-1-c-ハ		
	11	No.175	土師器	16.8	7.9	18.9	15.7	横ナデ	刷毛目 ヘラケズリ	横ナデ	刷毛目	床面。木葉底。肩部有段。 A-1-c-イ	
	12		土師器 (22.0)	10.1	30.8	(21.2)	横ナデ	ヘラケズリ	横ナデ	ヘラナデ	カマド内。 A-1-e-ハ 肩部有段。口唇に沈線のみ。		
	13		土師器 (9.6)			23.3		刷毛目 ヘラケズリ		不明	床面。口縁部欠失。球脚。 (A-1)		
	14		土師器	10.1				ヘラミガキ		ヘラナデ	床面。体部下端～底部片。球脚形。 外面赤色塗彩。		
	Eg 09 住	3		土師器	16.3	8.2	16.5	16.0	横ナデ	刷毛目	横ナデ	ヘラナデ 刷毛目	床面。木葉底。口唇凹みあり。 肩部無段。 B-1-b-イ
		4		土師器 (14.0)	(8.0)	(17.0)	13.9	横ナデ	ヘラケズリ	横ナデ	ヘラナデ	床面。底部欠失。器内厚い。 肩部無段。 B-1-(b)-ハ	
	Cd 12 住	5	写影	土師器 (21.7)					タテキ目 あり			ロケウ成形。 C 口縁から肩部にかけてタテキ目。	
		7	写影	須恵器								体部片。外面磨子目のタテキ目。	
Ed 12	1	No.172	土師器	13.7	8.7	14.6	14.0	横ナデ	刷毛目	横ナデ	ヘラナデ	床面。木葉底。肩部あまり目立たない。 外面赤色変化。最大径は脚部。 A-1-b-イ	
	2	No.173	土師器	16.3	8.6	20.3	15.6	横ナデ	刷毛目 ヘラケズリ	横ナデ	刷毛目	床面出土。 A-1-c-イ	
	3	No.174	土師器	17.6	7.4	28.9	17.7	横ナデ	刷毛目	横ナデ	刷毛目	床面。木葉底。 A-1-d-ロ	
Be 03 ビット	2		土師器 (20.0)	8.0	25.7	(17.0)	横ナデ	ヘラケズリ	横ナデ	ヘラナデ	埋土中。肩部ほとんど目立たない。 木葉上へヘラケズリしている。 A-1-d-イ		
	3	No.187	土師器 (18.1)			16.7	横ナデ	ヘラケズリ	横ナデ	刷毛目	床面。体部下方欠失。肩部無段。 巻き上げ痕明確。 B-1		
	4		土師器	9.3	7.3	9.0 (9.5)	横ナデ	ヘラケズリ	横ナデ	不明	床面。小型ホム。 A-1-f-a-ウ		
	5	No.188	土師器	20.5		19.9	横ナデ	ヘラケズリ	横ナデ	ヘラナデ	床面。有黒斑。 口唇部凹みあり。肩部無段。		
	6		土師器	18.2		18.7	横ナデ	刷毛目 ヘラケズリ	横ナデ	刷毛目	床面。有黒斑。 肩部有段。口縁～体部片。		
	7		土師器		7.8			ヘラケズリ		刷毛目	埋土中。外面底部中央凹む。		
	第1号溝	3	No.194	土師器 (16.4)			(15.2)	横ナデ	ヘラケズリ	横ナデ	不明	肩部有段。 Ai 36地点出土。	
4			土師器 (25.6)			現存 (18.1)	横ナデ	刷毛目	横ナデ	不明	Ai 36～Aj 30地点出土。肩部有段。		
5			土師器 (20.9)		23.7	(横ナデ)	横ナデ	刷毛目 ヘラミガキ	(横ナデ)	刷毛目	球脚。 A-1-g-イ 体部下半～底部欠失。肩部有段。		
6		No.198	土師器	15.9	7.0	14.2	13.7	横ナデ	刷毛目	横ナデ	底部 ヘラナデ	木葉底。肩部有段。 A-1-h-イ	
7			土師器		8.2			ヘラケズリ		ヘラナデ	Aj 21地点出土。 底部外面中央部凹む。		
8			土師器	12.6	6.0	8.8	11.2	横ナデ	刷毛目	ヘラナデ	木葉底。 長脚に非ず。 A-1-g-a-イ		
9			土師器		9.0			刷毛目		ヘラナデ	体部下端～底部片。		
10		No.196 197	須恵器	顔注 32.0							Aj 30地点出土。 大グメ。頸部流注沈線文。		
Ch 06 溝状		6	No.185	土師器 (12.8)	5.9	9.6	(12.0)	横ナデ	ヘラケズリ	横ナデ	ヘラナデ	床面。肩部有段。	

(b)分類結果 第38表

以上、図示したすべての甕型土器についての一覧表を付したが、分類基準の各要素を最大限に満たす個体数は限定されており、しかも種別区分では土師器とされるものだけで占められている。結果的には、土師器甕55点についての分類結果である。但し、この点数にはロクロ成形とされるCは含まれていない。Cの細部については特に分類せず、ロクロ成形甕を一括した形で提示するに留めている。従って以下については、甕A・Bを中心として記す。

ロクロ不使用の甕A・B類は、甕穴住居跡出土のものとしてはⅠ期・Ⅱ期と区分される遺構内に集中しており、坏型土器がそうであったようにⅢ期のあり方とは明瞭に異なっている。

甕A-I類32点、同A-II類7点、同A-III類4点、同A-IV類1点、同B-I類9点、同B-II・III類各1点ずつとなっている。このうち球胴形を呈す甕A-III類の点数は4点となっているが、残存率の良好なものだけを選んで関係上そうなったものであり、実際数はもっと多く、Ⅰ・Ⅱ期群内のある一時期のセットを構成するとみて大過ない。

甕A-I類 大・中・小の器種があり、器高がa～c（6～22cm）内にある小型～中型甕の調整技法が、イ（刷毛目+十）でほぼ占められているのが目立つ。器高d～e（24～30cm以上）内の甕にあっては、調整技法イによるもの7点、ロ（刷毛目のみ）によるもの8点、ハ（刷毛目以外）によるもの2点となっており、特に一定しない。ただ、刷毛目を主とする分についてはこの限りではない。

イの技法によって仕上げられる小型・中型甕のあり方は、土器生産の場で使用目的に関わる成形技法の使い分けがあったことを示唆しているともいえよう。また、ハの調整による2点は、器高がe（30cm以上）の長胴甕である。この2点はEc27・Ee27 甕穴住居跡の近接した遺構にのみ見られる。

甕A-II類 ロクロ不使用・肩部有段、長胴形で最大径を体部に有する甕で、8点を数える。A-IとA-IIIの中間的な器形ともとれようが、ほぼA-I類と同じである。調整はイ・ロの二様があり、刷毛目を主体としている。単独での出土例はなく、A-I・A-III・B-Iの何れかと相伴している。数値的には、器高d以上が5点、b・cが各1点ずつあるが、これといった傾向は特に抽出されない。

甕A-III類 球胴を呈するものである。4点とも調整イによるもので、器高はc～d内に収まる。BブロックからEブロックまでの各地に出土しており、完形品は少ないが他が破片量など

からみても、Ⅲ期以前の集落に於いて一般的な器種であったことが察せられる。

甕A-Ⅳ類 頸部のはっきりしない鉢型を呈すものである。2点の出土例であるが、A-I-a・A-I-bと分類された甕の中にA-Ⅳ類の形態に近いものも若干含まれている。体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるこの種の形態はあまり例をみない。Ⅰ期とされるDj27竪穴住居跡出土No.1・2がその典型であり、Ⅱ期群の中で古いと思われるCi30竪穴住居跡に類例をみるだけである。

甕B-I類 肩部無段のロクロ不使用甕である。9点の出土をみる。Dブロックを除くⅡ期群遺構に出土している。Bd71・Bh03・Ci30・Ee30・Eg09竪穴住居跡等にみられるものであるが、これらの遺構配置は、C-Dブロック内のⅡ期遺構群あるいはⅢ期遺構群の外側に位置している。

技法的には刷毛目のみの例はなく、イ・ハによるもので占められる。ハの調整による甕は全体で5点であるが、そのうちの3点(Ci30住No.8・Ee30住No.10・Eg09住No.4)が甕B-I類にあたることになる。甕A類39点のうちハの調整によるものが僅か2点(Ec27住No.7・Ee30住No.12)という出土率からみれば、甕B-I類中の3点は多いともいえよう。但し大きさからみた場合、甕A-I類の2点はe(30cm以上)のものであるのに対し、甕B-I類の3点は器高b~c(12~22cm)内の中型以下の甕となっている。

甕B-II類 肩部無段で体部に最大径を持つロクロ不使用甕である。Da30竪穴住居跡No.8の1点だけしか出土していない。甕A-II類に類似するが肩部は無段であり、また最大径が胴部の下位にある所謂下膨れの器形を呈す。

甕C類 ロクロ成形による甕である。完形品は旧期Da56竪穴住居跡出土No.41・42の2点だけであり、他は破片等による反転復元のものが多い。タイプとしてはDa56住No.42の長胴甕とCg56住No.4の球胴に近い甕、Da56住No.41のような小型甕等に分けられよう。また成形上の相異からみれば、外面に叩き目を施す例も散見される。Bj65住No.10、Cd12竪穴状遺構No.5、Da56住No.40・42等がそれである。

以上が甕型土器の分類結果である。Ⅰ期群とされるBe24・Dj27・Ec36竪穴住居跡は出土量が少なく明確なセットについて記せないが、A-II類・A-III類・A-IV類的な甕は何らかの形で組み合わせると解される。また甕C類を伴出しない残りの住居跡は広くⅡ期群として把握しているが、伴出状況は必ずしも一様ではなく、その中での時期差はあると思われる。特にCi30竪穴住居跡

らみて、一部を除き大きな時間差を持つものではないとの見解を記すに留める。なお、Ⅱ期群内に於ける遺構の中で、微量とはいえ何らかの形で須恵器を伴出した遺構は、Dブロックに集中していることを付記しておく。

甕C類は、Ⅲ期遺構群に集中するものであり、本遺跡にあってはD類環がほぼ完全に消滅し、A・B・C類環がそれに変わった時期に発生してきたといえる。ロクロ不使用の甕は、一般の集落にあってはロクロ技術が定着した以降であっても結構残るものであるが、本遺跡内での出土頻度は低く、ロクロ技術がかなり速いペースで浸透・定着してきた背景を有していると思われる。この傾向は坏型土器にあっては尚更のこと顕著であったが、そういう中で坏C類がD類の調整技術を踏襲するものの、出土量が非常に少ないということなどから、本遺跡でのロクロ不使用甕やD類の伝統的技法が、Ⅲ期に至って急激に落ち込んでいったことが推される。

C. その他遺物について

環・甕型土器以外の遺物は次表の如く一覧表に記す。これらの他には甕の底部片がEe36竪穴住居跡と第10号溝の埋土内から出土している。何れも多孔式甕の小破片であり、図示したのは第10号溝出土のNo.4のみである。なお、一覧表は、手捏ね・小型土器、壺型土器、土錘、紡錘車、鉢型土器、土製品、砥石、鉄製品についての順に記載してある。

第39表 手捏ね・小型土器

遺構名	実測番号	写真番号	口径 cm	径 cm	器高 cm	その他	遺構名	実測番号	写真番号	口径 cm	径 cm	器高 cm	その他
Bb30住	No. 2		6.8	4.4	3.9	木葉底	Ea50住	No.19	No.164	4.4	—	—	手づくね 土器
Da15住	No. 3		2.4	2.3	3.2	巻き上げ	*	No.20	No.162	3.8	—	—	*
Da30住	No. 5	No. 68	5.6	2.9	2.9	黒斑あり	Ee30住	No. 4	No.179	7.1	3.8	4.6	埋土中
Da03住	No.10		4.0	—	2.0	手づくね	13号溝-2			8.2	5.2	4.2	
*	No.16	No.165	4.2	—	1.9	手づくね	Bj65住	No.12	No.32	3.1	2.1	2.0	埋土中
*	No.17	No.166	4.5	—	2.1	手づくね							
*	No.18		2.9	—	3.2	Da15No.3 に類似							
Df59住	No. 3	No.124	5.4	—	1.7	手づくね							
Dg09住	No.21		4.4	—	1.5	手づくね							
*	No.22		4.6	—	1.7	手づくね							
*	No.23		4.4	—	2.0	手づくね							
*	No.24		5.9	—	2.7	手づくね							
*	No.25		4.3	—	1.5	埋土中 手づくね							
Ea50住	No.17	No.161	4.3	—	—	手づくね 土器							
*	No.18	No.163	4.2	—	—	*							

第40表 土錘出土一覧表

遺構名	実測番号	写真番号	長さ cm	最大径 cm
Da56住	No.51-1	No.77	4.6	2.1
*	No.51-2		4.5	2.2
Dd03住	No.19	No.100		土鈴型を呈す
Bj65住	No.11		4.2	2.1
Da74住	No. 8	No.87	5.0	2.2
表土Da30	No.21		4.9	2.1
表土Ce24	No.22		一部欠失	2.1

第41表 鉄製品出土一覧表

遺構名	実測番号	写真番号	器種・その他	遺構名	実測番号	写真番号	器種・その他
Ch21住	No.1~13	—	針状のものもあるが大 半は不明	Bj65住	No.17	No.35	床面出土、リング状鉄 製品、4×3.7cm径
Da15住	No.7	—	6cm長、名称不明		No.18	—	器種不明、凸部あり
Dd03住	No.21	—	8.5cm大、不明	Cg56住	No.7	—	鋤先部分、床面上
	No.22	No.88	鎌、長さ約22cm 巾3.4cm		No.8	—	腐蝕部多い、刀子
Da68住	No.2	—	針金状の製品		No.9	—	長さ3cm大の鉄片、 他不明
Df59住	No.7	No.99	長さ8cm、刀子か		No.10	—	腐蝕多し、器種不明 全長10cm弱
Dg09(新)住	No.8	—	厚さ4mm前後の板状鉄片	Ci56住	No.3・4	—	鉄滓
Dg09(旧)住	No.26	No.148	4.8×2cm位の長槽凹 形、柄金具か一部欠損	Da56(新)住	No.5	No.96	刀子、全長約13.4cm
	No.27	No.151	厚さ4mm前後の板状鉄片		No.6	No.97	釘、腐蝕多い 全長約17cm弱
	No.28	No.152	* *	Da21住	No.3	—	7mm径の棒状鉄片 器種不明
	No.29	No.150	* *	Da56(旧)住	No.45	No.93	鎌、全長22cm 最大巾4cm
Ea50住	No.22	No.146	馬具の一部と思われる 全長約16cm		No.46	No.95	鉄滓
	No.23	No.154	有孔、厚さ2~4mmの 板状を呈す		No.47	No.94	羅又、全長約15cm
	No.24	—	名称不明、長さ約10cm		No.48~56	No.81,77,81, 90,95	鉄鏝、刀子、 不明等鉄製品一括
Be50住	No.15	No.15	全長約10.5cm・刀子状 腐蝕多し	Da50住	No.11	—	刀子か
	No.16	No.16	一部管状になるが器種 不明		No.12	—	不明
	No.17	—	器種不明、全長約5cm	Dc71住	No.3	No.86	腐蝕が多く、器種不明
	No.18	—	一部欠失、釣針の一部か	Da74住	No.7	—	刀子か、全長約14.5cm大
第10号溝	No.8	—	棒状の鉄片、器種不明 5.6cm長	表土Bf09地点	No.24	—	刀子状、欠落している。
第13号溝	No.9~18	—	器種不明鉄片、V字状 のものもある	表土Bi15地点	No.25	—	刀子状、鉄製品、 腐蝕多い

第42表 その他土製品一覧表

遺構名	実測番号	写真番号	大きさ・他
Dd03住	No.20	No.92	有孔裝飾品 1cm径、厚さ6mm
Dh56住	No.3	—	扁平土製品、有孔、破片
Bi53住	No.13	No.27	円盤状、有孔裝飾品 1.9cm径、厚さ5mm
Ea50住	No.25	No.156	有孔土玉、約1cm径

石製品

遺構名	実測番号	大きさ・他
Ci56住	No.1	5.5×6.8cm径、厚さ1cm、用途不明

第43表 砥石一覧表

遺構名	実測番号	写真番号	大きさ・他
Bj65住	No.14	No.34	6×5×1.5cm大 4面使用
Df59住	No.6	No.121	6.5×8×24cm大 7面使用
Dg09(新)住	No.7	No.129	5×6×10cm大 3面使用
Ea50住	No.21	—	一部欠損、最大長約10 cm、6面使用
第12号溝	No.7	—	5×4×11cm大 4面使用
第13号溝	No.8	No.206	8×6×13cm大 4面使用
Ce21ピット	No.1	—	6×4×13cm大 5面使用

第44表 紡錘車出土一覧表

遺構名	実測番号	上巾径 cm	下巾径 cm	高さ cm
Ci30住	No.6	3.4	4.7	2.5
Bh68住	No.3	5.0	3.5	3.0
第1号溝	No.11	5.2	3.3	2.8

表45表 鉢 型 土 器

遺構名	実測番号	口径 cm	底径 cm	器高 cm	その他
Be50住	No.9	11.5	5.8	9.5	口縁・内湾
Da30住	No.7 写真 No.71	13.0	脚径 8.4	9.1	台環鉢
Ci30住	No.16 写真 No.56	(17.1)			反転復元 朱塗り部分あり

※Dj27住No.1・2については甕型土器に分類している。

第46表 壺形土器(土師器・須恵器)

遺構名	実測番号	計測値(cm)・他	遺構名	実測番号	計測値(cm)・他
Be50住	No.10	体部下半片、底径7.8、外面削り、小型	第6号溝-2	No.10	須恵器、体部下端片
Bd71住	No.10	最大胴径6.4前後の小型壺片	*	No.6	須恵器、長頸部分小破片、推定胴径6.1
Dd03住	No.28	体部下半片、底径6.0前後、小型	第13号溝-2	No.22	須恵器、体部下端片
Ca24ピット	No.1(189)	底径5.5、頸径3.2、小型の須恵器壺	第17号溝	No.1	* *
第10号溝	No.2	須恵器、長頸壺片、口径7.1	第13号溝-1	No.3(110)	土師器、台付、口径7.1、胴径9.3、器高11.7、脚径5.8
Cd12竪穴状	No.6	須恵器、底部下端片			※()内は写真番号

D.各期の伴出遺物等について — 小まとめ —

各遺構に於ける遺物の伴出状況については、既述の一覧表の通りであるが、これらを総合的にまとめてみると第47表の如くなる。遺物の組み合わせについては、坏型・甕型土器に限ってのみ分類基準の項目に従って区分しており、その他の遺物は器種毎の区分で取扱っている。また、便宜上ロクロ技術が定着する以前とその後に分けて表を作成している。これは端的に言えば、遺構上の区分Ⅰ・Ⅱ期と第Ⅲ期の各期に於けるセット関係を明確にするための一覧表でもある。但し、Ⅲ期に於けるロクロ未使用の甕型土器Aについては、完形品がないため表欄が空白になっている。これは全然ないのではなく、破片としては残る部分もあるが量が少ないということである。

第Ⅰ期

遺構区分ではBe24・Bb30・Bd36・Dj27・Ec36竪穴住居跡等が相当する。

鉄器・須恵器等を含まない遺構であり、遺物のセットは酸化焰焼成による土器群で構成されている。遺物量はあまり多くないが、集落単位が西側方向に広がる端辺にあることや、位置の移動が一般的であるとするならば止むを得ないことでもあろう。

特に図示しなかった遺物の破片や、第47表の一覧表結果により、大体のセットとしてはD-I

- a の環、A とされたロクロ未使用甕型土器、高環・甕等で代表されるものであろう。甕A とされたものの中には、胴部が球形を呈すものも含まれている。

第Ⅱ期

遺構区分では、最も棟数が多い時期である。遺構の記述部分では特に細分していないが、本項では伴出遺物の観点から(Ⅰ)・(Ⅱ)期に区分することとする。但し、Bd71 竪穴住居跡については遺構保存のため完掘しておらず、明確な伴出関係については伴明しないため除外している。環型土器でみる限りは新しい要素を多分に有しており、Ⅱ- (2)期の範疇に含まれるであろうと思われる。

● Ⅱ-(1)期 Bi53・Bh03・Bh77・Da30・Ci30・Bh68・Ee30・Eg09 竪穴住居跡等

甕型土器A を主とし、環型土器D-(Ⅰ・Ⅱ)-(c・d・e)に甕型土器B が追随する。胴部が球体を呈すA-Ⅲは少ないがセットを構成するものと解される。また、甕は大小の両様が見られる。鉄器類が含まれず、須恵器もDa30 竪穴住居跡に高台環がある程度である。その他には若干の調整を有す小型土器や高環、鉢型土器等が散見される。片口、甕等は含まれていない。

Bh03・Bi53・Bh68・Bh77 竪穴住居跡は、プランや方位が異なるが、遺構内北東部に集中する遺構であり、ほぼ等間隔で東西に並行している。また、Ci30・Da30 竪穴住居跡は2地区に分散するⅠ期群のほぼ中間に位置しており、残るEe30・Eg09 竪穴住居跡は遺跡内の南限にあたる。

● Ⅱ-(2)期 Da15・Da68・Dg09(新・旧)・Be50・Dd03・Ea50・Df59・Ec27 竪穴住居跡等

甕型土器A と環型土器D のあり方はほぼ大差ないが、D 類は無段・平底化したものの相対量が増えている。甕型土器A に於ける大・小の器種もⅡ-(2)期のセットを構成するとみて大過ないが、甕B がみられず、Ⅱ-(2)期設定の一要素ともなる。しかし何といても、Ⅱ-(1)期との大きな相異は鉄器と須恵器の存在である。当然のことながら砥石の出土もみられる。他には手捏ね小皿とした非実用的な土器類もⅡ-(2)期のしかも近接した配置をみせる遺構に出土しているのが特徴である。また、高環も代表的なセットとして扱えられよう。出土する須恵器の量は決して多いとはいえず、量的にはⅡ-(1)期と比較できない場合もあるが、Be50・Dd03・Df59・Dg09(新)・Ea50・Da68 竪穴住居跡のように、鉄製品の出現と同時に微量ながらも須恵器が混入してくるという現象に注目したい。

遺構のあり方は、Be50 竪穴住居跡が遺跡北端に位置するが、他はD・Eブロックの中央付近に集中しており、Ⅱ-(1)期遺構群との占地状況を異にしているともいえる。従って、伴出遺物からみるⅡ-(1)期とⅡ-(2)期にはそれなりの時間差が存在するのであると思われる。

第Ⅲ期

出土遺物は第Ⅲ期-(1)-(2)-(3)群としたうちの(1)-(2)群からのものが主である。(1)群のBj65・Cb21・Cg56・Da56(旧)竪穴住居跡等の環型土器に於ける切離しの比は、29:20で寛切によるものが多くなっており、(2)群のDa21・Da56(新)・Da74・Dd50・De71竪穴住居跡等でのそれは8:14と逆転している。しかし、これはあくまでも合計による比であって、各遺構のあり方がすべて同様の傾向を示すというのではない。甕型土器にあっては、ロクロ成形のものを主としている。大・小の器種はみられるが、球胴のものはみられず、画一的である。Ⅱ期に比して、ある意味では環型土器が多様化しているともいえようが、画一化された中での変形であって、土器類の器種は非常に少なくなっている。その分、鉄器・土錘等が加わり、実用的な道具が増えている。鉄器には農耕用具・狩猟用具等がある。この他には須恵器長頸壺が挙げられるが、何れも破片である。Ⅲ期遺構群とされるCd12竪穴状遺構・第6号溝・10号溝・13号溝等にみられる。

(2)その他の遺物

(1)以外の遺物としては、縄文・弥生・江別式土器片等がある。縄文式土器片の型式や器種については既述の本文をもって充当することとし、本項では特に再述しない。したがって以下については、弥生式、江別式土器片に限って考察する。

a. 弥生式土器片について

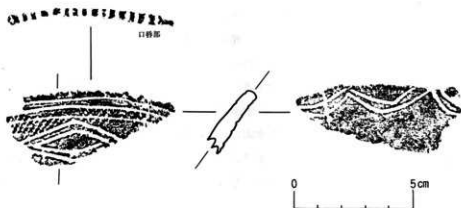
Dd03竪穴住居跡内、Q₃埋土からの出土である。台付鉢型土器の口縁部片で7×3cm、厚さ5～7mmの大きさである。胎土中には2mm大の石英粒・同細粒・粗砂等が混入しており、あまり緻密ではない。焼成は比較的良好であるが、内面に若干のひび割れ痕がついている。色調は、内外面とも2/3位が黒褐色、他は黄褐色を呈している。

外面の文様は、口縁部に3本の平行沈線を配し、その下位には斜位に走る縄文上から沈線で菱形の区画がなされる。区画された内側には、更に他の沈線で同様の文様を重ね、それで囲まれる部分を擦消縄文としている。

内面には横位方向に丁寧なミガキが加えられる。口縁部付近には2条の沈線による山形文もしくは連弧文が配されるが、上位の沈線は連続するものではなく、下位の沈線に対応した形で施される。この断続的な沈線は、山形文によって区画された部分を更に強調したものであるが、外面の菱形を2本の沈線で描くことに通ずるものでもあろうか。

口唇部には約4mm間隔で小波状の刻み目があり、一部には二又状の小突起が確認される。突起の位置する所は、内面の山形文の頂点よりやや左あるいは右に寄ったあたりで、両者の間隔は約5cm位である。

遺跡内に於ける弥生式土器片のあり方は、周辺に広く散在していた大洞A'式の縄文土器片と



第106図 弥生式土器片拓影図

の関わりから重要な意義を持つが、層位的に明らかにし得ない部分が多く、伴出状況について云々することが出来ない。従って、ここでは同一の遺跡内から出土しているという程度に留めておく。

菱形文・連続山形文乃至は連続弧文、複数の沈線、口唇部の小波状刻目・擦消縄文等の特徴的な文様・形態の組み合わせからなる土器型式は、菱形文・山形文に主眼を置く限りでは志藤沢式土器、あるいは柵形囲式と呼称される土器群にその類似例をみることができる。東北北部にあって志藤沢式に平行すると目される田舎館式にみられる連続山形文、あるいは天王山式のそれらとは明らかに趣を異にするものである。口縁部の小突起や擦消縄文の使い方は大洞A'的でもあるが、A'式にみられる工学的な文様ともまた異なり、直接的にその影響を受けているものではない。従って弥生の古期のものとも一線を画すと思われる。ただ、志藤沢遺跡や田舎館遺跡からは所謂縄文土器の破片が出土しておらず、本遺跡のようなあり方を伴出すと言い得るならば、より柵形囲式に近いものともいえよう。なお、近辺における類例としては水沢市橋本遺跡出土の弥生式土器が挙げられるであろう。

b. 江別式土器片について

土器片の特徴については、Ch74ピット出土遺物の項で記しているので再述しない。

ちなみに本県内における類例を見ておく。岩手県内における後北土器の出土地点は第48表のとおりである。著名な永福寺山例を除いては、確実な遺構出土例・遺物共伴例もなく、不明な点が多いもののみである。その点本遺跡出土例は永福寺山例とともに貴重である。おしなべて江別C₂式類似のものが多いとされる。

この種土器の存続期についてはいくつかの仮説があるが、弥生時代後期後半～古墳時代前半

のいずれかとするものと、8世紀代のいずれかにもとめるものなどがある。本遺跡出土例は、既述のように上記二説のいずれかを直接的に補強するようなものではない。第Ⅴ群(奈良時代)の土師器片が覆土上半～中部から出土していることから、少なくともそれらに先行する時期のものであろうことは確実であるが、その上限については不明である。本調査においては確実な古墳時代の遺物は未検出である。ただし、本遺跡西方に角塚古墳が、北方に高山・西大畑・面塚などの古墳時代集落が存在する。また本調査地から出土の弥生式土器は、水沢市橋本遺跡例などに類似するものであり、後期後半にまでは下がらないものである。覆土中に奈良時代土器が入りうる程度の時間差しかない、という見方も成立不能ではない。いずれにせよ決定的なことをいえる資料とはいえない。

次に、本州出土のこの種土器に、北海道には見られない要素も存在し、そこに一種の土着性がうかがわれること、さらに短絡的な移入品視は危険なることも既に指摘され続けてきたところである。後掲のように、本資料の胎土分析結果は、遺跡周辺にその粘土の供給源を求めうるというものであり、上記の指摘の妥当性を裏づけたといえる。ただし、土師器と比較した場合にその含有岩石類に大きな相違が見られる点にも留意すべきことはいうまでもない。

以上この種土器の基礎的資料の一つとして提示した。

第48表 岩手県内の後北式土器出土一覧

① 九戸郡軽米町スワ森	註1. 吉田義昭・武田良夫 江別式土器の分布—盛岡市その周辺の調査による—奥羽史談 第55号 註2. 佐藤信行 東北地方の後北式文化 東北考古学の諸問題・東北考古学会 註3. ⑬は岩手県立博物館で展覧中である。 ⑭は島山篤夫氏の指示による。 註4. 丹羽茂氏によると、宮城県清水遺跡においては覆土中に国分寺下層式土器をもつこの種土器の例がある。 註5. 大沼忠春 東北地方北部の後北式土器について考古風土記第3号、昭和53年4月
② 九戸郡軽米町駒水	
③ 二戸市金田一釜沢	
④ 下閉伊郡田老町新田平	
⑤ 岩手郡岩手町沼宮内苗代沢C地点	
⑥ 岩手郡玉山村芋田	
⑦ 岩手郡玉山村洪民牡丹野	
⑧ 盛川市川目	
⑨ 盛岡市山岸永福寺山	
⑩ 盛岡市山岸厚牛場	
⑪ 紫波郡都南村上飯岡月山	
⑫ 紫波郡都南村乙部方八丁	
⑬ 二戸市仁左平土とされる	
⑭ 他に可能性あるものが千蔵町にある	

V. ま と め

1. 本遺跡の時期区分とその編年観、一総まとめ一

本遺跡は、既述の如く縄文晩期、弥生時代を経て、奈良・平安時代に至り最盛期を迎えた集落である。検出された遺構の大半は数例を除いて古代のものであり、当時の集落のあり方や生活様式的一端について貴重な資料を提示している。従って、遺跡の性格上から古代以前のまとめは既述の項目・内容をもって振り替えることとし、本項では第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期とした古代の遺構・遺物等についての編年観とまとめについて記述する。

本遺跡の遺構は、大別してⅠ期・Ⅱ期・Ⅲ期に区分されることは周知の通りであり、各期に於ける集落の復元は第107図の如くである。遺構に関わる記述段階に於いては、細部にわたる区分を省略したため、すべての竪穴住居跡を各期毎に分類していない。特にⅡ期とした群に関わる遺構であり、Bh68、Bh03竪穴住居跡等の様にプランが不定であったり棟方位が区分の数値より大きく差を持つ例外的なものである。このような例外的な遺構については、伴出遺物による区分を重視しており、最終的には次頁第107図の様な形で集落を復元している。これは第101図の時期別集落構成図のⅡ期とした部分を補強・再区分しているのである。

以下については、総合的な立場から各期をまとめ、その編年観について触れていきたい。

第Ⅰ期

竪穴住居跡(a)群とした遺構で代表される。棟方位をN-4°-E～N-9°-W内に持ち、カマドを北壁中央部に有している。^(註1)カマドが検出されていない例もあるが、Bb30・Bc24・Bd36・Bf30・Bi27・Dj27・Ec36竪穴住居跡、Bg21竪穴状遺構等が該当する。1辺が2m～7m台規模の遺構で構成されるが、5m台以下のものが多い。遺跡内の北西部と南西部分との2ブロックに分散しており、特に溝等で区画されている様子もない。また、西縁部に偏るあり方から西側調査範囲外への延長が推察される。

出土物は比較的少なく、明確な器種組成については断言できないが、最低でも坏・甕(球胴も含む)・高坏・甗等が構成要素となり得る。

Ⅰ期に於ける坏D類は、成形技法やその形態から栗罎式にも類似するものであるが、今泉、上餅田遺跡で代表される大型のものではない。編年的には参考資料(1)の第Ⅳ群期にも相当するものでもあろう。しかし、カマドの位置と主軸方位は第Ⅶ群期の遺構のあり方に近い。従って第Ⅶ群と第Ⅷ群に於けるⅠ期・Ⅱ期の変遷が、第Ⅶ群の中で進行していったものといえよう。^(註2) 時間的には奈良時代前半期と考えている。

第Ⅱ期

竪穴住居跡(b)群とした遺構群が該当する。棟方位をN-10°-W~N-56°-W内に有しているため、カマドそのものの位置は、竪穴住居跡の北西側壁にあたる。^(註3)Bd71・Be50・Dj18・Dh56・Da68・Cg06・Bi53・Da30・Eg09・Ea50・Df59・Dd03・Ee30・Dg09(新・旧)・Da15・Ci30・Db33・Bd80・Ec27竪穴住居跡等が該当する。この他には伴出遺物のあり方からBh68・Bh03竪穴住居跡等も同群に含めている。

これらの遺構は、第Ⅰ期と重複しない位置に配され、1辺2.9m~7m台の規模である。正方形に近い平面形を呈し、大型住居跡の近辺には中・小型住居跡が配されている。BブロックにあってはBi53・Be50竪穴住居跡、DブロックのDd03竪穴住居跡、EブロックのEa50・Ec27竪穴住居跡等が大型住居跡であり、いわば単位集落の核ともいべき存在でもある。

カマド燃焼部側壁の構造にあっては、Da30・Df59竪穴住居跡のように礫を使用する場合もあるが、土師器類を芯にするものが目立つ。例えばEa50・Bh03・Dd03・Dg09(旧)・Ee30竪穴住居跡等がその典型例である。他に、Be50竪穴住居跡のように、支脚として土器を利用している場合もある。

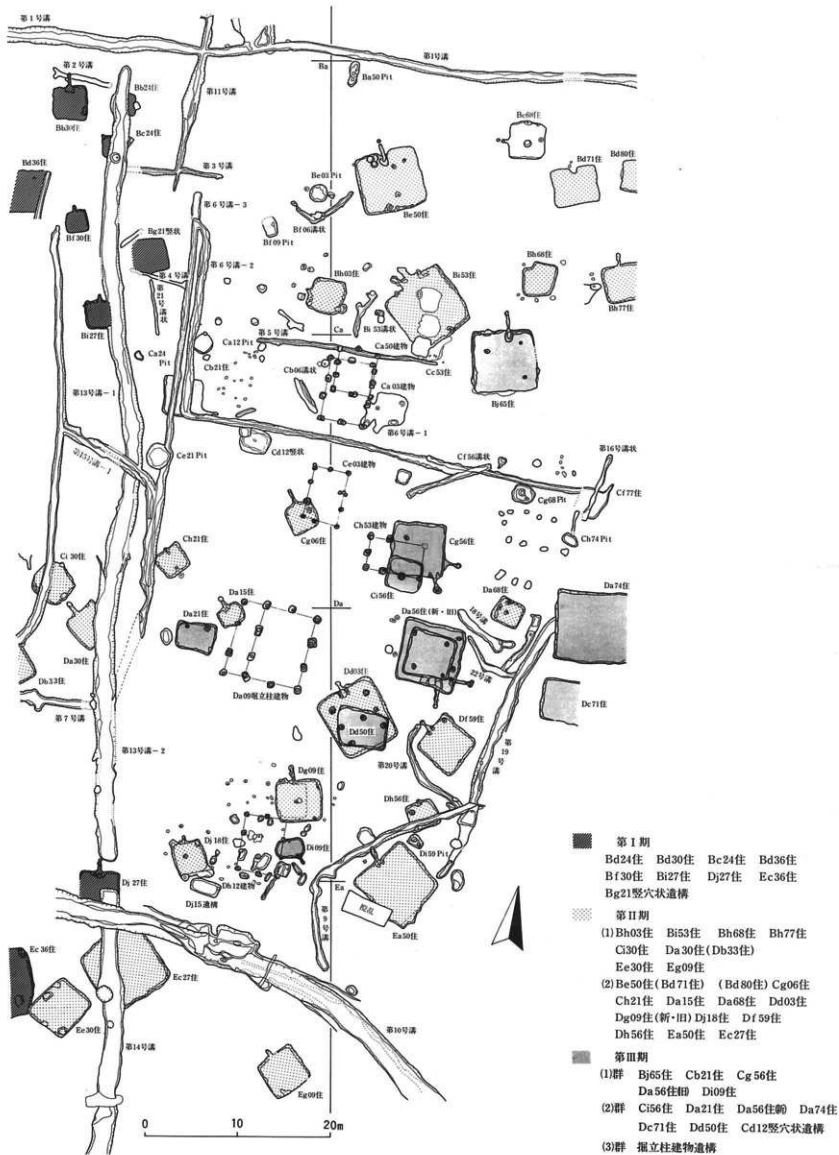
主柱穴は多くの場合、明確ではないが、Dd03竪穴住居跡のように6本持つものもある。

一方、伴出遺物のあり方からみた場合、これらは須恵器と鉄製品のあり方から2群に細分されることとなる。

即ち、須恵器と鉄器類の両様を含まない遺構群をⅡ-(1)期、須恵器の絶対量は少ないが鉄器類を伴出するのが一般的な遺構群をⅡ-(2)期としている。

Ⅱ-(1)期 Ci30・Bi53・Bh03・Bh77・Da30・Bh68・Ee30・Eg09竪穴住居跡等が該当する。Bブロックにあっては、Bi53大型住居跡を中心として、Bh03・Bh68・Bh77竪穴住居跡が東西方向に並列している。その北側には、Ⅱ-(2)期とされる遺構群が同じような配列で平行する。Ci30・Da30竪穴住居跡は両者が近接しており時間差を持つものと思われるが、須恵器高台環を有すDa30竪穴住居跡の方が後続するものであろう。Da30竪穴住居跡は鉄器を出土しないが、環型土器はⅡ-(2)期的でもある。また、Ee30・Eg09竪穴住居跡は、遺跡内南辺に位置しており、Ⅱ-(2)期Ee27竪穴住居跡とほぼオーバーラップする時期に営まれたものであろう。少なくともⅡ-(1)期とⅡ-(2)期の間には、はっきりとした相異を有する部分と、Da30・Ec27竪穴住居跡のように両様の特徴を有する部分もあったであろう。

この時期では、環型土器の小型化が定着しつつあり、完全に無段・平底の器形を呈すものは少なく、有段・沈線のもので丸底・平底風の各タイプが混在する。また、中にはBi53竪穴住居跡No.5のように比較的大き目な環もみられるが、一般的ではない。甕型土器にあっては、肩部無段のものが主流であるが、この段階まではまだ無段のものも残る。大・小の各器種と球形形甕もセットを構成している。他には高環・小型環・鉢型土器等がある。なお、片口や甌は既に



第107图 时期别遺構配置图

消滅していると思われる。

編年的には参考資料Ⅵa群に相当する。Ⅰ期に後続する形で奈良時代の前半期以降に位置すると考えている。なお、参考資料に添付した第Ⅵa群土器の実測図は本遺跡Ci30竪穴住居跡出土のものである。

Ⅱ-(2)期 須恵器伴出の様相は、量的にみて必ずしも明確なセットを構成すると断言できない一面もあるが、鉄器類の出現とほぼ時期を同じにするという現象が看取されることから設定されたものである。Dd03・Dg09(新・旧)・Df59・Da15・Da68・Be50・Ea50竪穴住居跡等が含まれる。この他に(2)期設定の条件を完全に満たすものではないが、Ec27・Bd71竪穴住居跡等が該当すると思われる。

遺構の組み合わせやカマド構築、主軸方向等についてはほぼⅡ-(1)期と同様であるが、占地的にみてDブロック中央付近に集中する傾向にある。6本の柱穴を持つDd03大型竪穴住居跡を中心として、Da68・Dg09(新・旧)竪穴住居跡が並列し、その背後にDf59・Dh56・Ea50竪穴住居跡が並ぶ。また、Ⅱ-(2)期の遺構が東西方向に並列する北側には、Be50大型竪穴住居跡とBd71・Bd80竪穴住居跡がやはり並ぶ形にあり、ほぼ同時期にあって二段構えの遺構配列をみせる場合と、時期差を持ってそうする場合とがある。しかもこれらの遺構は、(1)期と(2)期間で重複するものがないことなどからみて、計画性を持った配慮をしているといえる。Ⅰ期の空白部分やそれらと重複しない地域にⅡ-(1)期が営まれ、その後にはⅡ-(2)期が(1)期に近い位置に並列するかあるいは他の空白部分に構築される。Ⅲ期-(1)群は更にⅠ・Ⅱ期の空間に配されている。Ⅱ-(2)期内で重複するDg09(新・旧)竪穴住居跡のあり方は、集落の定着化が一般的になるとと思われるⅢ期以降の前段階で、既に定着化の指向が生じてきたことでもあろう。

出土遺物は、各器種とも何らかの形で変化している例が多くみられる。坏D類は無段・平底化の傾向が顕著になり、体部にミガキやケズリが加えられる。甕型土器はA-I類を中心として出土しており、長胴を主とする大・小の各器種・球胴の甕型土器等のあり方は(1)期に大差がないが、甕B類とした肩部無段の器形を呈するものが消滅しているのが大きな特徴である。高坏は多くの遺構にみられ、Ⅲ期以前では普遍的な存在として器種組成を構成する一例であろう。

須恵器のあり方は、甕型土器の破片が主であるが、Ea50竪穴住居跡には寛切りのA類坏が出土している。Ⅲ期以前での共伴は搬入品とも解されていたが、Da30竪穴住居跡出土の高台付坏の胎土分析の結果からして、Ⅱ期段階での在地生産の可能性をも否定できず、問題のあるところである。

(註4)

鉄製品は鎌、刀子の他に馬具の一部と思われるものがある。器種の不明なものも多いが伴出の仕方としては、相対的にみて須恵器より一般的である。

この他には、Dg09、Dd03、Ea50、Df59竪穴住居跡から特徴的な一群の土器がみられる、手握ね小皿とした非実用的なものである。カマド付近に多くみられるもので、祭祀的な用途を持つ

ものでもあろう。これらの土器を出土する遺構群は、Ⅱ-(2)期の中心的役割を果たすと思われ、しかもその配置も計画性に富んだあり方をみせる。

編年的には、参考資料の第Ⅴb群に該当し、所謂国分寺下層式に相当するものである。Ⅱ-(1)期の多くの遺構も同型式にオーバーラップするものである、Ⅱ-(2)期に至って塚塚遺跡で代表されるような器種組成となるのであろう。奈良時代後半期と考えている。

第Ⅲ期

遺構区分では3群に分けられ、Ⅲ期-(1)群にはBj65、Cb21、Cg56、Da56、Di09 竪穴住居跡等のカマドを有す遺構、Ⅲ期-(2)群は、Ci56、Da21・Dd50、Dc71、Da74 竪穴住居跡等の無カマド遺構、Ⅲ期-(3)群は掘立柱建物遺構となっている。

Ⅲ期-(1)群はBj65 竪穴住居跡を除いて、カマドが東、南壁に付設されている。柱穴は判然としない例が多いが、Da56 竪穴住居跡では4本確認されている。この場合は、カマド位置の変遷に関わって柱穴の場所も移動している。但し、柱穴の位置は厳密な意味での対称形には成り得ず、壁際に偏したりする。また、カマド位置の変遷は南→東、東→南への両様がある。

Ⅲ期-(2)群には長方形と正方形の二様のプランがある。カマドを付設しない遺構は、古代末期と推される鳥海A、西根遺跡等にみられるが出土遺物は明らかに異なるものである。出土遺物からみてⅢ期-(1)-(2)群は平安時代の前期内におさまるものと扱っている。

Ⅲ期-(3)群は端的にいうと掘立柱建物群だけの構成によるものか、それともⅢ期-(1)、(2)群との共用であるかは断定できない。しかし、溝との対応関係や各遺構間の重複関係からみて、Ⅲ期-(1)群の大部分よりは新しい時期の存在と思われる。したがって共用があるとすればⅢ期-(2)群の一部遺構が考えられるであろう。例えば、糸切りによる環が篋切りを上廻るDa74、Dc71 竪穴住居跡や、Cd12 竪穴状遺構である。

各群の遺構配置は、Ⅲ期-(1)群にあってはⅡ群の空白部分にあり、Ⅲ期-(2)群にあっては、Ⅱ-(2)期あるいはⅢ期-(1)群と重複する場合と単独に存在する場合とがある。Ⅲ期-(3)群は、Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期-(1)群との重複例が多く、Ⅲ期-(2)群上にあるのは一例だけである。

土器の器種組成は環と甕が主であり、ロクロ成形によるものが大半である。甕の場合はⅢ期に至ってもロクロ不使用のものが若干残るが、環型土器にあってはロクロ不使用D類環は皆無である。僅かに環C類としたものが、前代の成形技法の一部を踏襲するに留まる。また環A類は、多様な出土であり、ヘラ切り・回転糸切りの無調整・有調整の各種があり、環B・C類は両様の切り離しによるが何れも無調整のものである。量的には少ないが環B類の出現が目される。甕は、体部上半に叩き目、体部下半にダイナミックな篋削りを有するものがある。

この他には、Cd12 竪穴状遺構や溝に多くみられた須恵器長頸壺、Da56 竪穴住居跡出土の須恵

器蓋等、更に器種の豊富な鉄製品、土鍾等が加わる。

編年的には第Ⅲ群とした区分に相当する。参考図として揭示した図版は本遺跡のDa56(旧期) 竪穴住居跡出土の土器である。平安時代初期～前半代頃にも比定され得よう。

平安時代では、竪穴住居跡の他に掘立柱建物・井戸等が集落の構成要素に加わる例があるが、本遺跡の場合は近くに湧水源を有しているためか遺跡内での井戸は検出されない。したがって^(註5)Ⅲ期の構成要素は、竪穴住居跡・掘立柱建物・大溝等によるものと考えている。

以上のようなことから、本遺跡の古代に関わる編年観は奈良時代の前半乃至中半以降から平安時代前半を中心とする時期に比定されるであろう。細分された各期・各群は、Ⅰ期→〔Ⅱ-(1)期→(2)期〕→〔Ⅲ期-(1)群→(2)(3)群〕の変遷を辿るものと思われ、各期への移行は比較的容易に進行していったものと解される。出土遺物そのものではⅡ期とⅢ期間に多少の空白部分がないわけでもないが、集落の継続性を否定するに足るものではない。集落の構成要素や遺物のあり方が変貌する背景には、当時の政治政策に関わる影響力が甚大であることはいうまでもない、特に胆沢城周辺の集落にあっては、必然的な対応をより急激に迫られた情勢下にあったといえよう。したがってⅠ-Ⅱ期が在地内での自然村落的性格を有す集落といい得るならば、Ⅲ期は律令制という国策を背景とする政治村落の性格が濃厚な集落ともいえる。このことは当地方におけるⅢ期類似の遺跡についても同様であり、律令制を底辺から支える原動力として存在したことでもあろう。衰退しつつある律令性を模範的・理念的に遂行しようとするあり方は、まさに辺境における集落の一類型でもある。

註1. 本遺跡では、カマドや椀方位あるいは構造的な相違から、溝・ピット類を除く遺構群について、(a)・(b)・(c)・(d)の4タイプに区分している。各タイプの特徴は本文中に記してあるので再述しないが、出土遺物との照合の結果、最終的には(a)群→Bb30, Bc24, Bd36, Bf30, Bi27, Dj27, Ee36竪穴住居跡等、(b)群→Bd71, Be50, Dj18, Dh56, Da68, Cg06, Bi53, Da30, Eg09, Ea50, Df59, Dd03, Ee30, Dg09(新・旧), Da15, Ci30, Db33, Bd80, Ee27竪穴住居跡等、(c)群→Bj65, Cb21, Cg56, Da56, Di09, Ci56, Da21, Dd50, De71, Da74竪穴住居跡等、(d)群→掘立柱建物遺構のように各遺構を区分している。

註2. 巻末に付記した参考資料を参照されたい。第Ⅰ期以降の各群についても同様である。

註3. 註1に同じ。

註4. 土器胎土分析結果を参照されたい。なお、これに関わる今後の方向性は、「分析結果に関する若干の問題提起」に記している通りである。

註5. 古代集落の構成要素については、伊藤博幸・相原康二両氏によって既に提言されている通りである。

2. 参考資料

最後に、参考資料として(1)岩手県南部における古代の土器群編年試案、(2)岩手県南部を中心とした古代の住居跡変遷、(3)集落の構成要素とそれに関わる予察、について記述する。(1)については後掲する第108図、(2)については第109図を参照されたい。これらの表記と記述は、何れも北上川中流地域を中心とする一帯における古代の遺構、遺物のあり方を総合的に検討した結果として相原康二氏が集成されたものである。

本遺跡内の遺構、遺物の記述の多くは、基本的にはこれら参考資料に基くものであり、多大の啓発を受けている。また、本資料をもって岩手県南地方における古代集落のあり方や遺物の編年観がより明確になされ得たと解釈している。

本資料の作成にあたっては、註記にあるが如くに多くの先学の業績や考古学研究会岩手支部例会における討議内容に負うところが大きいことはいうまでもない。先学の学恩並に会員諸氏に深謝する次第である。と同時に、快く資料の提示に応じてくれた相原康二氏個人にも深謝する。以下については、資料を提示する。

参考資料(1) 岩手県南部における古代の土器群編年試案(第108図)

第108図をもって掲げた編年表の簡単な説明を行なう。編年にあたっては²組みあわせ²を重視した。それは器種・技法ともにてある。また諸先学の諸業績に従ったのももちろんである。紙数の関係からその詳細な説明は省き、結論のみを記す。

第Ⅰ群土器 水沢市高山TK02住居跡、同西大畑遺跡溝跡出土資料、表では併記したが、後者が若干古くなる可能性もある。器種組成の詳細は未詳であるが、器台の不在が特徴的である。南半の塩釜式に類似しよう。

第Ⅱ群土器 江釣子村猫谷地遺跡の仮称Ⅰ期の住居跡群(CH74・DA62・CJ50住など)出土資料。これらも器種組成は未詳である。同様に南小泉式のやや古い部分に相当しよう。

第Ⅲ群土器 水沢市面塚SI02住居跡、同西大畑CF53住居跡出土資料。後者の組成内容は比較的良好である。報告書によると、長胴甕型に近い甕も存在するらしい。南小泉式の新しい部分であろう。坏型への赤色顔料塗彩が見られる。

第Ⅳ群土器 水沢市膳性G15住居跡出土資料。器種組成は不明であるが、内外面赤色顔料塗彩の丸底坏を有する。引田式的な色彩が強い。

第Ⅴ群土器 同膳性E06住居跡出土資料。坏への黒色処理の開始期とも思われる。肩部無段で、胴部下半に最大径のある甕型が伴う、南半の住式に類似する。坏体部にミガキが存在する。

第Ⅵ群土器 水沢市今泉・膳性、金ヶ崎町上餅田、江釣子村猫谷地の仮称Ⅱa期その他の出

		<p>第I群</p>	
		<p>第II群</p>	
			<p>第III群</p>
		<p>第IV群 第V群</p>	
		<p>第VI群</p>	
		<p>第VIIa群</p>	
		<p>第VIIb群</p>	
		<p>第VIII群</p>	
		<p>第IX群</p>	
		<p>第X群</p>	

第108図 岩手県南部における古代の土器群編年図(試案)

土資料が該当する。器種組成はきわめて豊富になる。20個体前後が一セットをなす。坏はより大型品が多い。特異な器種の須恵器を伴う。坏体部には同様にミガキが存在する。粟圃式に類似する。

第Ⅶ群土器 甕型に肩部の無段化、底径の大型化と平坦化の傾向が現われ、坏型に小型化・無段化（沈線化）・平底化の傾向が顕著になる。甗・高坏の存在が少なくなる。二分しうる。

Ⅶa群 水沢市玉貫の各住居跡、同石田Ci30住居跡他出土資料。先の特徴は既に見えるが、坏に大型品も散見でき、かつ、須恵器が日常容器としてのセットになり切っていない段階。

Ⅶb群 水沢市石田Dd03、同東大畑、江釣子村猫谷地BF21、同鳩岡崎Ea12住居跡出土資料。須恵器が日常容器に組み込まれる段階。須恵器器種は遺跡毎の異同があり一様ではない。本群は宮城県糠塚例に極似し、国分寺下層式に相当し、奈良時代後半～末期を占めよう。

Ⅶa群は適当な型式名を知らないが、奈良時代前半期のものであろう。

第Ⅷ群土器 類例が激増する。本群にはロクロ使用土師器が共存しはじめる。土師器は甕・坏ともにロクロ使用と不使用のものが混在するが、そのあり方は遺跡により異同がある。まず、ロクロ不使用坏がやや多く、甕はすべてロクロ不使用の長胴・球胴型からなる例がある。坏は無段・平底のロクロ不使用坏・削り調整をもつロクロ使用土師器（回転糸切り）、ヘラ切り・無調整を主とする須恵器などからなる。別の例ではロクロ不使用坏は皆無かあっても稀少で、甕にはロクロ使用のものも加わる。詳細にのべると、削り調整のあるものを主体とし、若干量の無調整のものを伴うロクロ使用土師器坏と、ヘラ切り・無調整を主体とし、若干量の削り調整（回転・手持ち）をもつもの、および糸切り・無調整の須恵器坏、ロクロ不使用甕、体部上半に叩き目とロクロ成形痕・下半に削り調整痕をもつ土師器甕、須恵器広口壺、同長頸壺、同蓋などからなる。以上の二者からは、ともに高坏・甗は消えており、逆にやや軟質の酸化焙焼成と思われる土器が加わる。これらは平安時代初頭～前半頃と思われるものである。本群以降は遺跡の性格を十分考慮した上で遺物を検討する必要がある。おそらくはいくつかの類型化が可能であろう。

第Ⅸ群土器 本群にはロクロ不使用土器は原則的には伴わない。土師器坏は回転糸切り・無調整と、調整あるもの（回転・手持ち）の両者からなる。土師器長胴甕胴部の叩き目はほぼ消える。他に中型甕・埴などがある。須恵器には坏（回転糸切り・無調整のみ）・甕・蓋がある。技法の全般に³省略化、傾向が目立つ、本群には既述の酸化焙焼成と思われる土器が伴う。これについては既に見解の発表がある(註)。以上は平安時代時半のものと思われる。




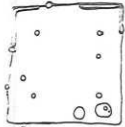

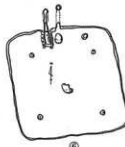
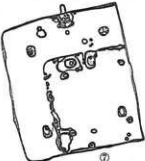
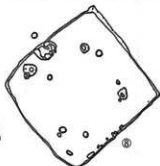


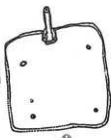
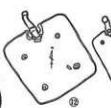



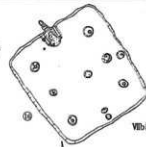


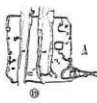

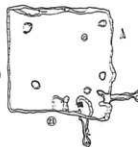


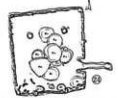


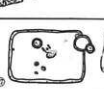

第Ⅹ群土器以降については不明な点が多く詳述は省き見通しのみをのべる。第Ⅹ群は所謂須恵系土器を主体的にもつグループであり、坏・台付坏・皿・台付皿・黒色処理の坏・長胴甕・小型甕・埴・耳皿などをもつ。緑釉陶器も伴共する。平安時代後～末期の11世紀代のものと思

われる。

第Ⅷ群としては詳細未詳であるが、燈明皿的な部厚く粗雑な軟質土器をも有するものが該当しよう。環・台付環・皿・甕などからなる。金ヶ崎町西根・鳥ノ海などに比較的良好な資料がある。12世紀以降のものと思われる。経筒と思われる袈裟襷文ある灰釉陶器（常滑焼）を共存する例もある。

注 本編年試案の作成にあたっては、多くの先学の業績に負うところが大きい。先学の学恩に感謝する。また、考古学研究会岩手支部の例会における討議内容にも負うところが大きい、会員諸氏に感謝する。以下に編年表に用いた資料の出典を掲げる。

- I 群 ①高山遺跡 TK02住 高山遺跡 岩手県水沢市文化財報告書第1集 高山遺跡調査会・水沢市教育委員会 昭和53年3月
- I 群 ②西大畑遺跡 溝 西大畑遺跡 岩手県文化財調査報告書第60集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ 岩手県教育委員会 日本道路公団 昭和56年3月
- Ⅱ群 ③猫谷地遺跡 和賀郡江釣子村猫谷地遺跡 岩手県教育委員会 昭和49年3月 実測は佐久間豊氏による
- Ⅲ群 ④西大畑遺跡 Cf53住 注②に同じ
- Ⅲ群 ⑤面塚遺跡 S102住 現地説明会資料 水沢市教育委員会 昭和55年6月
- Ⅳ群 ⑥膳性遺跡 G-15住居跡 膳性については(財)岩手県埋蔵文化財センター高橋与右衛門
- V 群 ⑦膳性遺跡 E-06住居跡 氏から種々の教示・実測図の提供をうけた。深謝する。
- Ⅵ群 ⑧今泉遺跡 Bg62住 他 注②に同じ
- Ⅶa群 ⑨石田遺跡 C130住居跡 同第61集 同ⅩⅡ分冊
- Ⅶa群 ⑩水沢市玉貫遺跡の古代の資料のすべて (財)岩手県埋蔵文化財センター資料実見による。山口了紀・吉田洋氏の教示をうけた。
- Ⅶb群 ⑪石田遺跡 Dd03住居跡 注⑩に同じ
- Ⅶ群 ⑫石田遺跡 Da56住居跡 同上
- Ⅶ群 ⑬林前遺跡 SF22住 他 林前遺跡 岩手県水沢市文化財調査報告書第3集 水沢市教育委員会 昭和54年3月
- Ⅸ群 相去遺跡Ⅰ期 相去遺跡については、岩手県立博物館高橋信雄氏より種々の教示と実図の提供をうけた。なお、氏とは、相去のみならず、各群の全般にわた
- X 群 相去遺跡Ⅱ期 り意見交換を行ない、益する所大であった。深謝する。なお、以下の論文がある。
- ⑬高橋信雄 岩手県のクロロ使用土器について 考古風土記 第2号 昭和52年4月
なお、⑬に対する批判的見解として、
- ⑭本堂寿一 極楽寺伝塚主坊跡緊急発掘調査報告書一付 寺院跡出土土器の再整理とその考察—北上市立博物館研究報告第3号 昭和55年8月
があるが、ここでは前者にしたがっておく。今後の検討課題とする。
- Ⅺ群以下については、金ヶ崎町西根・鳥ノ海の個別報告書中に詳細にのべられている。
- ⑮西根遺跡 岩手県文化財調査報告書第59集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財
- ⑯鳥ノ海A・B・C遺跡 発掘調査報告書Ⅹ 岩手県教育委員会 日本道路公団 昭和56年3月

 <p>① I群期</p>	 <p>② II群期</p>  <p>③ III群期</p>  <p>④</p>	 <p>⑤ V群期</p> <p>①③⑤は約180分の1 ④は約150分の1 ②は約100分の1</p>	古墳時代Ⅰ～Ⅳ群
 <p>⑥ V群期</p>	 <p>⑦</p>  <p>⑧</p>  <p>⑨</p> <p>VI群期</p>	 <p>⑩</p>  <p>⑪</p>  <p>⑫</p>  <p>⑬</p> <p>⑩⑪⑫は約180分の1 ⑭⑮は約150分の1</p>	奈良時代・初期(V・VI群)
 <p>⑭ VIIa群期</p>	 <p>⑮</p>  <p>⑯</p>  <p>⑰</p> <p>VIIb群期</p>	<p>⑭～⑰は約180分の1 ※提示遺構の少なさと実在する遺構数とは関係ない。</p>	奈良時代(VIIa・VIIb群)
 <p>⑱</p>	 <p>⑲</p>  <p>⑳</p>  <p>㉑</p>	 <p>㉒</p>  <p>㉓</p>  <p>㉔</p> <p>⑱～㉑は約180分の1 ㉒～㉓は約150分の1 ㉔は約180分の1</p>  <p>㉕</p>  <p>㉖</p>  <p>㉗</p>  <p>㉘</p>	平安時代(VIII群) 平安時代末(Ⅷ群)

第109図 岩手県南部を中心とした古代竪穴住居跡変遷図

参考資料(2) 岩手県南部を中心とした古代の住居跡の変遷(第109図)

表記について概述する。時期区分については既述の編年表にしたがう。

第Ⅰ～Ⅳ群期 古墳時代に相当するものであるが、Ⅰ・Ⅱ群期にはカマドが付設されない。四隅の角張った均正な正方形プランと、対角線上にのり、やや中央による4本の支柱穴をもつ。貯蔵穴様のものは既にある。規模に異同のあるものが組みあわせになる。Ⅱ群期にはカマドが付設されはじめるが、その状況にはばらつきがあり、斉一性はない。長大な煙道は未確認である。Ⅳ群期にはカマド本体・長い煙道部とともに備えたものも出現し始める。

以上の時期の竪穴軸方位は変化に富み、一定の傾向性は示さない。なおⅢ群期の西大畑例には支柱穴以外に西辺中央の壁直下に柱穴様の2ヶのピットもある。

第Ⅴ・Ⅵ群期 四隅に軽い丸味をもつほぼ正方形なプランと、先と同様に対角線上にのりが如くに配置された4本(稀な大規模例では6本以上)の支柱穴、北壁に付設されたカマドなどを有する構造をもつ。斉一性はかなり強く、構築法の確立を示すかのようである。ただし長大な煙道の有無にはばらつきがある。明白なそれをもたない若干例も混在する事実がある。カマド焚口部には礫を門状に配置する。それより古期と思われる例では、カマド本体部内外両面にも礫を用いるものがあり、さらにカマドの対辺(多くは南壁)中央壁直下にも柱穴様のものをもつ例がある。建物主軸方位は「磁北にほぼ一致→やや西に偏す」という変遷をたどるらしい。一辺8m～6m程度の大規模なもの、5m以下の中小規模のものがセットになる。

Ⅶ群期 プラン・支柱穴配置などは前代に共通するが、建物主軸方向はさらに西に偏し、かつカマド袖部への土師器類(長胴甕型を主とするが、各種の器種がある)の芯としての埋置が見られはじめる。支柱穴は4本を中心とするが、6本のものもあり、さらにその存在が不明確なものも増加する。前代に比し不均整なプランをもつのが増加する。

Ⅶ群期以降 集落跡と思われる遺跡の例のみをとる。変化の度合がきわめて大きい。

(1) 柱穴配置 支柱は4本と思われるが、そのすべて、あるいは2本が壁直下に寄るものも増加する。さらに柱穴配置の判然としない例がさらに増加する。

(2) 側壁 板材を用い、「腰板乃至壁風」のものをつくり出す例も増加する。その四隅には支柱様のものが伴う。

(3) カマド構築部位 北壁も継続するが、東壁、南壁などへ変化する例が圧倒的に多くなりかつ壁中央ではなく若干いづれかに偏した位置となる。江釣子村猫谷地においては南壁→東壁という変遷を示す。

カマド構築法は、本体にも板状礫を用いるもの、煙道部に甕を横転位に据えるものなども加わる。所謂くり抜き式のものが多い。

(4) (竪穴住居跡以外に)掘立柱建物・井戸・大溝も集落の構成要素に加わる例も現われる。

X～XI群期 長方形プランで、側壁直下に多々の柱穴をもつ例が増加する。カマドなど特別な施設はほとんど見られない。これらの中には中世に入るものも含まれる可能性がある。

第Ⅷ群期以降については、遺跡の性格別の遺構の把握（構造・組みあわせ）が必要である。それは掘立柱建物についても同様である。

註① 高山遺跡 TK02住	高山遺跡	岩手県水沢市文化財報告書第1集 高山遺跡調査委員会・水沢市教育委員会 昭和53年3月
② 猫谷地遺跡 CH74住	猫谷地遺跡	CH74住居跡 岩手県教育委員会調査
③ 面塚遺跡 S102住	面塚遺跡	現地説明会資料 水沢市教育委員会 昭和55年6月
④ 西大畑遺跡 CF53住	西大畑遺跡	岩手県文化財調査報告書第60集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ 岩手県教育委員会・日本道路公団 昭和56年3月
⑤ 勝性遺跡 G-15住	勝性遺跡	現地説明会資料 (財)岩手県埋蔵文化財センター 昭和54・55年 なお、勝性遺跡については、高橋与右衛門氏より各種教示をうけた。深謝する。
⑥ * J-7住		
⑫ * F-11住		
⑬ * C-2-2住		
⑭ * G-8-1住		
⑮ * H-2	玉貫遺跡	現地説明会資料 (財)岩手県埋蔵文化財センター 昭和55年
⑭ 玉貫遺跡 I-12-1住		
⑯ * C-11住	今泉遺跡	岩手県文化財調査報告書第60集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ 岩手県教育委員会・日本道路公団 昭和56年3月
⑰ 今泉遺跡 Bg62住		
⑱ * Bd59住		
⑲ * Bd03住		
⑳ * Bi24住		
㉑ * Cb24住	石田遺跡	岩手県文化財調査報告書第61集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅻ 岩手県教育委員会・日本道路公団 昭和56年3月
⑳ 石田遺跡 Df59住		
㉒ * Dd03住		
㉓ * Df09住		
㉔ * Cb21住		
㉕ * Cf56住	灰引遺跡	灰引遺跡調査報告書 文化財調査報告書第17集 北上市教育委員会 昭和52年3月
㉖ * Da56住		
㉗ 灰引遺跡 第6号住	上平沢新田遺跡	岩手県文化財調査報告書第52集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 岩手県教育委員会・日本道路公団 昭和55年3月
㉘ 上平沢新田遺跡 Ah15		
㉙ 烏ノ海A遺跡 第2号(Aj56)	烏ノ海A遺跡	岩手県文化財調査報告書第59集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ 岩手県教育委員会・日本道路公団 昭和56年3月
㉚ * 第3号(Ag53)		
㉛ * 第4号(Af03)		

参考資料(3) 集落の構成要素とそれに関わる予察

(イ) 集落の構成要素

集落規模の完全な復元は困難である。ここでは集落を構成する諸遺構類を概観し、その変化の一端を見るに留める。

(1) 第Ⅰ～Ⅴ群期 確認された限りでは竪穴住居跡のみからなる。相互にやや距離をおいた2～4棟からなる。正方形プランと長方形の二種がある。

(2) 第Ⅵ群期 7～12・13棟前後の竪穴住居跡のみからなる。正方形プランで大中小の三種の組み合わせになる。前代より規模が拡大したと言える。

(3) 第Ⅶ群期 前代にはほぼ共通するが、20棟前後と規模がさらに拡大する例も出てくる。集落内に^(註1)支群、的なグループを持つ例もある。住居跡に加え^(註2)大溝、も出現する(尻引)。これら単なる排水路とは考えられない。

(4) 第Ⅷ群期 遺構の規模が増加する。沖積面上の自然堤防上(宮地)や、低位段丘上の微高地上(林前)に立地する集落に^(註1)井戸、が伴う。宮地においては井戸をはきんでその南北に住居を営む形式をとり続けており、集落内の井戸使用の実態・その所有形態に関しての示唆に富む。井戸枠の構造にも変遷がある。

立地にかかわらず^(註2)掘立柱建物、が加わる(膳性・西大畑・石田・林前・森山工業団地・北に偏するが紫波町上平沢新田)。そのあり方に二種ある。

(A) 竪穴住居跡と隣接し併存するもの。

(B) 竪穴住居跡と異なる地点に存在する(林前・B₁)、それとは併存しないもの(西大畑・B₂)。前代と同様の^(註1)大溝、を有する(石田・宮地)。

(5) 第Ⅸ群期以降については、大規模調査例は窯業関連のもののみであり、一般集落の様相は必ずしも明らかではない。あえて言えば、遺跡数は増加するが、遺跡個々は小規模化する傾向にあると言えよう。

要 約

(1) 古墳時代～奈良時代の集落は基本的には住居跡のみからなる。奈良時代半ば～末にかけて大溝が伴い始める。

(2) 平安時代初～前半にかけては、住居跡・大溝・井戸・掘立柱建物などで構成される。

集落の構成要素については他に語るべき項目も多い(例えば墓域)が、省略する。^(註3)

註1. 1棟前後の若干大規模なものを中心とし、その周囲に中小規模のものが配される形をとるものが多い。これが末期古墳の配置に共通するという意見には従うべきであろう。

林・伊藤他 角塚古墳調査報告 胆沢町教育委員会 1976年

註2. それは^(註1)筒状、のものから、板材を組んだ^(註2)井桁状、へと変化している。

註3. 第Ⅰ～Ⅴ群期における両者の関係は未詳である。第Ⅵ・Ⅶ群期については、水系で区切られた各地域毎に集落が存在し、それに近接して墓域も造営される形をとる。墓域は一定期間以上それとして意識され続ける。第Ⅷ群期以降については不明である。¹方形あるいは円形遺構と呼称されているものが墳土の周溝である可能性は高いと思われるが、詳細は未詳である。なお9世紀とされる見分森古墳は方形である。

なお、相去遺跡において²長方形の土壇、とされたものが墓域であるならば、10～11世紀前半に別種の葬制も行なわれていたことになる。

相去遺跡—古代集落の発掘—(現地説明会資料) 岩手県教育委員会・北上市教育委員会 1973年

(ロ) 集落に関する予察

1. 古代において、集落様相に数期的な変化期がある。それは①古墳時代前期、②古墳時代末期～奈良時代初期、③奈良時代半ば以降末期、④平安時代前半期の大別四期である。変化は各分野にわたるが、時期により性格に多少の相違がある。例えば④には須恵器の窯など³政治的、色彩の強いものが顕著に伴う。①にも高い³政治性、が当然想定されるが、資料不足であり未詳としておく。②・③にも外的要因の作用は当然存在するが、それは④的なものは無く、その意味で³自主的・主体的、な動向下に基本的にはあったと言えよう。

以上の諸変化期は従来常識的に想定されてきたそれとほぼ合致しよう。いうまでもなく④と胆沢城(そして志和城他)の設置は無関係ではないであろう。④の多方面にわたる³政治的、色彩の濃い変化は、律令政府進出の反映と見做されるべきである。

2. 集落の形態に類型があり、それは時代差をある程度反映する。類型は以下の如くである。
[A] 明白な計画性を持たない²自然村落、というべきもの。少なくとも奈良時代の集落の大半が該当し、基本的には竪穴住居跡からなる。大型のものに中小が組み合わせになり、末期古墳の配置に通ずる。一定期間で造営が中断される傾向がある。在地・土着集団の集落と思われる。各種の発展傾向、他地域との交流が見られる。奈良時代末期には、次代に顕著になる諸変化の部分的兆しが数分野に現われ始める。

[B] 遺構の配置、集落の造営状況に一定の計画性を窺わせる³計画村落、ともいうべきもの。平安時代初期～前半期の集落の大半が該当する。³計画性、は竪穴住居跡・掘立柱建物・井戸・大溝・窯等の遺構種別の増加、それら相互の配置、立地面を含めた造営状況、その地域的限定性等々の諸側面に現われている。さらに数類型がある。

I. 前代との連続性を示す(少数)のもの。

(I a) 竪穴住居跡・掘立柱建物・その他が組み合わせになるもの。

(I b) 若干規模の大きな掘立柱建物のみからなるもの。

II. 前代との連続性を殆んど示さないもので、Iより多数。

(II a) 竪穴住居跡・掘立柱建物・井戸等が組み合わせり、(I a)に共通するあり方を示すもの。

出土鉄器に農具的なものが目立つ。

(IIb) 遺構・遺物両面にやや特異と見做し得る要素を持つもの。それらは①須恵器窯（見分森）、②鉄滓・フイゴ羽口等を多く出土する（力石他の江刺地方の諸遺跡）、③多量の鉄製武器の出土（同前）、④木簡（落合Ⅱ）、⑤石帯（力石Ⅱ）、⑥硯（同前）、⑦罎（上平沢新田）などである。これらは従来¹識字層の存在を示す、とりわけ一定の²政治性、を示すとされてきたものの多くを含む。それを採って、この類型には³政治性を想定しておく。その地理的位置が所謂城柵・官衙遺跡、建部される諸郡の位置と密接に関連すると思われる等の特徴も指摘できる。これを制度史上の概念といかに対応させ得るかは、今後の検討を要しよう。

以上のA・B類型の性格について、短絡的ではあるが推定を試みる。即ち、奈良時代までのA類型には、在地の支配原理の貫徹する⁴自然村落、的性格、B類型に律令制的支配原理に立つ⁵政治村落（律令村落）、的性格を想定できる。B類型の中には、Aが律令制的に再編されたもの（Ia）、他地域よりの⁶移民、集団により新規造営されたもの（IIa）、種々の次元と、⁷軍事的、なものを含む⁸官衙、的なもの（Ib・IIb）が存在する可能性が強い。⁹移民、云々については、遺構・遺物の特徴の把握とその系統の検討から、ある程度明らかにしえよう。

B類型村落の明確な存在は、全般的には衰退期に向かいつつあった律令制が、辺境において模範的・理念型的に行なわれた可能性をも示唆するものである。

3. 掘立柱建物の性格に複数があり得る。

岩手県南～県中央にかけて、平安時代に属すると思われる掘立柱建物に伴う集落跡は5例ある。可能性の高い森山工業団地も加えると6例になる。その何れもが¹⁰縄群期に関連することは既に述べた。したがって岩手県地方の古代集落内の掘立柱建物の初期期は大略確定したと言える。¹¹

その主屋規模は3間×2間、4間×2間、5間×2間などの諸類型からなる。大部分は中抜き形式をとるが、膳性例のみが総柱である。

集落内のあり方には、A・B₁・B₂の三種あることは既に触れた。そのうちAたる石田の6棟、B₂の西大畑の4棟が複数（ただしすべてが同時存在ではない）存在、他は1棟の単独存在である。これらを踏まえ、その性格想定を試みる。

(1) Aのうち単独存在には、少なくとも¹²倉庫、的なものが含まれよう。複数存在のものの一部にもそれがあろう。しかし後者のうちの石田・西大畑のあり方は、掘立柱建物自体に¹³居住施設、的なものも含まれる可能性をも示唆する。石田の西面廂ある¹⁴主屋、を中心とし、その周囲に¹⁵倉庫、的なものを配す遺構配置と、それと軌を一にする溝類の配置は、さらに進んで、特定集団の所有する一括建物群の存在を示唆するものとも考えられる。しかもそれに竝穴住居跡をも伴う可能性がある。

西大畑例は、遺構周辺に遺物散布が集中する傾向が顕著に見られる。

何れにせよ現状での時期の細かい特定は出来ないが、少なくとも平安時代前半期に掘立柱建物の中に²居住施設、³的なものが存在した可能性は大である。ただし西大畑例は梁行5間のものを含むなど、他例より明らかに大規模なもののみで構成される。しかもB₂類型でもあることからすると、西大畑例に通常集落以外の、何らかの意味での⁴官衙、⁵的ものを想定すべきかとも思う。

(2) AとB₁のあり方の異同を竪穴住居跡との対応関係からみることも出来る。即ち、相互に直近の位置関係にあるものに対応関係を想定出来るAと、⁶いくつかの小単位である竪穴小群の共有関係にある⁷とも見做し得るB₁である。

掘立柱建物と竪穴住居の対応関係の復元については、個々の遺構の位置の特定、厳密な同時存在遺構の確定などの基礎的操作が必要である。

4. 遺跡内の遺構集合(支群)について

遺跡内に⁸支群、ともいうべきものが存在することは既に触れた。それは時代・遺跡の性格の異同にかかわらず、何らかの形で存在したらしい。それらの具体的認定は今後の一大課題である。

その中の特に顕著な現象⁹規模の異なる竪穴住居跡の組み合わせとしての存在、は、種々の問題を提起する。例えば、

(1) AがB-I-aに¹⁰再編、されるにあたり、前代の共同体組織がある程度利用された可能性

(2) B-II-bの¹¹政治性、の強いと思われる集落にもそれが見られることは、一種¹²人為的、な集落造営の際にも、移住前のあり方を踏襲・擬制した可能性

等の諸点である。これらの観点も、遺構の機能の観点に加えて設けられるべきであろう。何れにせよ¹³支群、¹⁴的なもの¹⁵の認定・設定は各種共同体の具体的復元に必要不可欠の前提であり、今後も継続追求されるべきである。

註1. 勝性・西大畑・石田・林前・上平沢新田

註2. 他に調査者により、第Ⅱ群期に属する可能性ありとする1棟が西大畑にある。梁間・桁行が3間×1間の規模で、掘り方は円形、柱あたりは細く他例とは明白に異なる。

註3. 林前遺跡SB63建物跡。林前遺跡一區画整理に伴う範囲確認調査一。水沢市文化財報告書第3集。水沢市教育委員会 1979年。

註4. 吉田努氏によると、太田方八丁遺跡外郭築地内の住居跡群にもその傾向があるとのことである。また、真城ヶ丘団地も同様である。

伊藤博幸「奈良・平安時代の村落構造とその特質」考古学研究会岩手支部3月例会報告レジュメ 1979年。

VI. 遺物の鑑定・分析結果

1. 岩石学的方法による分析結果

—土器胎土分析—

照、井 一 明

I はじめに

土器の製作地推定のため岩石学的方法で分析を行なった。

II 資料

III 分析方法

- ① 資料25個をカナダバルサムで固定し、100分の3mmの厚さの薄片を各3枚ずつ作成した。
- ② 偏光顕微鏡を用い、鉱物組成、特徴、岩片の種類及び構成を調べた。
- ③ 1つの資料について500～1000個の粒子について検討を行なった(0.05mm以下の鉱物は基質として扱った)。
- ④ 鉱物、岩種別構成から、粘土の産地の地質を推定し、製作地を考察した。

IV 結果

1. 各資料の鉱物組成、岩石構成、特徴は別表の通りである。
2. 灰色、緻密で硬い須恵器、土師器はかなりの高温(トリデマイト、ムライトが生ずる以上の温度)で焼かれたことが確認された。
3. どの土器についても、石英、斜長石の鉱物の破片結晶が大半を占め、少量の輝石、角閃石、黒雲母の他にジルコン、ザクロ石、リン灰石、ルチル鉄鉱を含むことがある。
4. 岩片としては、チャート、珪岩、ホルンフェルス、花崗岩、花崗斑岩、アブライト及び安山岩が含まれる。
5. 共存する岩片や顕微鏡下の特徴から推定すると、石英、斜長石、黒雲母、角閃石はほとんど花崗岩起源であり、ジルコン、リン灰石なども花崗岩中によく含まれている鉱物である。これらの鉱物は全く円磨された証拠は認められない。
6. 輝石類の供給源は多くが自形の柱状結晶であること、変質が少ないこと、脱ガラス化しない新鮮な火山ガラスと共存すること、安山岩片はかなり少ないことなどから考えると、ローム起源であることが推定される。
7. 粘土の供給源としては、チャート、ホルンフェルス、珪岩などからなる古生層と花崗

岩類が分布し、さらに安山岩質のロームにおおわれる地域が推定される。

8. 肉眼的および顕微鏡的特徴から8つのタイプに区分された。

typeA：灰色、緻密、硬く、石英、長石類を主とし輝石を伴う。岩片としてはチャート、ホルンフェルス、花崗岩を含む。

資料No.1・4・5・6・8・9・11・13・17・18・22

typeB：typeAに鉱物、岩石の組成が類似するが少々異なり、色や製作上の技術にも差がみられるタイプ。

資料No.3・7・15・16・19・20・25

typeC：輝石安山岩、文象斑岩の岩片を多量に含むタイプ。

資料No.10

typeD：レンガ色で軟かく、チャート、ホルンフェルス岩片と石英、長石類で構成され、輝石を含まない。

資料No.12

typeE：レンガ色、緻密、細粒で硬い。石英、長石類で構成され有色鉱物を含まないタイプ。 資料No.14

typeF：こげ茶色で花崗岩起源の石英、長石および珪岩から構成される。

資料No.21

typeG：黒雲母、角閃石、ホルンフェルス、花崗岩などから構成される。

資料No.23・24

typeH：灰色、緻密、輝石、角閃石の有色鉱物と流紋岩、ホルンフェルス、チャート岩片を含む。

資料No.2

各タイプの供給源は、typeA・Bは古生層、花崗岩、ローム、typeCは輝石安山岩、花崗岩

類、type D・E・F・Gは古生層、花崗岩、type Hは古生層、花崗岩、酸性火山岩地帯である。

Type AやBのように、異なる時代及び比較的離れた地域で同類あるいは類似のものが見られることは非常に興味ある問題を含んでいる。今後さらに時間的、面的な資料の分析を行ない検討することが大切になろう。

第49表 胎土分析試料一覧表

No.	遺跡名	遺構名	種別	技法	備考
1	盛岡市 太田方八丁	Rh06住 床	須恵器 坏	ヘラ切またはヘラ削り	志和城限定地 官衙遺跡内の住居跡
2	水沢市 胆沢城	C区SD190、9層下部	須恵器 坏	口縁部	官衙遺跡
3	河梨市 瀬谷子		須恵器 坏	回転糸切無調整	窯跡
4	北上市 藤沢		須恵器 坏	回転糸切無調整	窯跡
5	紫波町 杉の上		須恵器 坏	回転ヘラ切無調整	窯跡
6	水沢市 見分森		須恵器 坏	口縁部	窯跡
7	水沢市 南矢中	Be71住	須恵器 坏	回転ヘラ切	集落跡
8	水沢市 石田	Da30住	須恵器 坏	口縁部	集落跡
9	水沢市 石田	Bj65住 P _a	須恵器 坏	体部	集落跡
10	水沢市 石田	Ch74ピット	江別式	体部	集落跡内の掘り込み
11	水沢市 西大畑	Cj・Da27 1b	須恵器 甕	体部	集落跡内の包含層
12	水沢市 西大畑	Cf53住	土師器?甕?	体部 ロクロ成形	集落跡 酸化焙焼成
13	水沢市 今泉	Ca09住 埋土	須恵器 甕	体部	集落跡
14	水沢市 今泉	Ai62住	土師器?坏	口縁部 ロクロ成形	集落跡 酸化焙焼成
15	水沢市 今泉	Bd12住 埋土	須恵器 甕	体部	集落跡
16	金ヶ崎町 鳥ノ海 A	5号住 床	土師器?坏	回転糸切無調整	集落跡 酸化焙焼成
17	金ヶ崎町 鳥ノ海 B	Bg62住	須恵器 坏	口縁部	集落跡
18	金ヶ崎町 西根	Ba71住 埋土	須恵器 坏	口縁部	集落跡
19	金ヶ崎町 西根	Cf03ピット	土師器?坏	口縁部 ロクロ成形	集落跡 酸化焙焼成
20	金ヶ崎町 上餅田	Be62住 No.28	土師器 坏	丸底 ミガキ 内黒	集落跡 酸化焙焼成
21	金ヶ崎町 上餅田	Cc53住 No.19	須恵器 甕	体部	集落跡
22	石鳥谷町 大地渡	Cf65住	須恵器 坏	口縁部	集落跡
23	石鳥谷町 大地渡	De50住 Q _a	土師器?坏	口縁部 ロクロ成形	集落跡 酸化焙焼成
24	石鳥谷町 大地渡	De50住 Q _a	土師器 坏	口縁部 ロクロ成形 内黒	集落跡 酸化焙焼成
25	水沢市 袖谷地	Bi15住	須恵器 甕	体部	集落跡

図版および図版説明 — 凡例 —

Q: 石英	Py: 輝石	q: 珪岩	g: 火山ガラス	Po: 珩岩
P: 斜長石	Z: ジルコン	G: 花崗岩	C: チャート	An: 安山岩
K: カリ長石	a: リン灰石	Gp: 花崗斑岩	H: ホルンフェルス	R: 流紋岩
Ho: 角閃石	ga: ザクロ石	A: アブライト		

第50表-1 試料分析結果

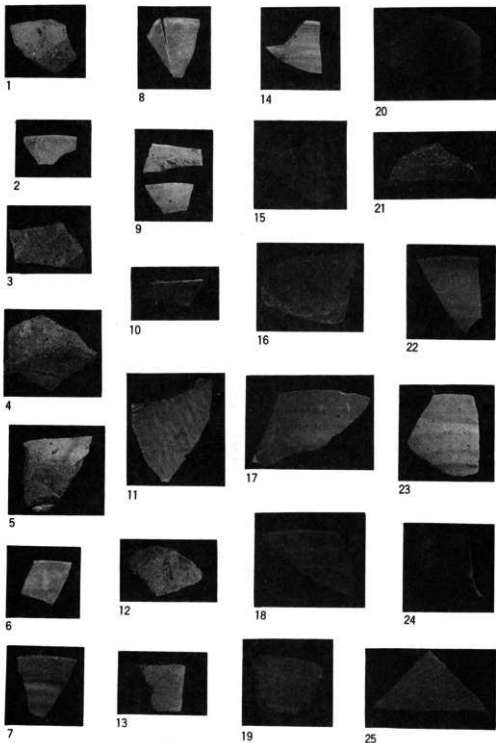
(Q:石英 PI:斜長石 K-F:カリ長石 Bi:黒雲母 Ho:角閃石 Py:輝石)

No.	産地	時代	産場	種別	技法	性質	向面的特徴		組成							備考
							色	形状的特徴	Q	Pl	K-F	Bi	Ho	Py	岩片	
1	太田方八丁	平安 室 代(星)	HO607 9層下部	環状 環	へう切り か へう切り	官衙内 任意形	(色)灰 (産物)砂岩・シルト岩・凝灰 (産物)石英、黒色鉱物 (産片)白色	++++	+	+	-	-	+	Chert V Granitic Rocks (Aplite)	古玉層 花崗岩 ローム (輝石安山 岩岩)	Plate1 1-4
2	新沢城	同上	C区 SD100 9層下部	同上	口縁部	官衙	(色)灰 (産物)凝灰・硬い (産物)多量の黒色鉱物と少 量の有色鉱物を含む (産片)白色	++++	+	+	-	+	+	Chert V Biotite V Rhyolite(?)	古玉層 花崗岩 輝石火山岩 ローム (黒輝石) (安山岩)	Plate3 1
3	鎌谷子雲峠	平安 時 代		同上	同縁部 無調整	環状	(色)外側こげ茶・中央部 黒 (産物)凝灰・硬い (産物)黒色鉱物>有色鉱物 (産片)白色	++++	++	+	-	-	+	Chert V Granite	古玉層 花崗岩 ローム (斜方輝石) (安山岩)	Plate2 1-4
4	鎌沢雲峠	平安 時 代?		同上	同上	同上	(色)灰 (産物)凝灰・硬い (産物)黒色>有色 (産片)白色	++++	+	+	-	-	+	Chert V sand stone	古玉層 花崗岩 ローム (斜方輝石) (安山岩)	Plate3 2-4
5	杉の上雲峠	平安 時 代(星)		同上	へう切り 無調整	同上	(色)灰 (産物)凝灰・硬い (産物)石英結晶が多量、 有色鉱物も多い。 (産片)黒い白色岩片・茶 色	++++	+	+	-	-	-	Chert V Quartzite	古玉層 花崗岩 ローム (斜方輝石) (安山岩)	Plate4 1-2
6	見分雲峠	同上		同上	口縁部	同上	(色)灰 (産物)凝灰 (産物)黒色鉱物>有色鉱物 (産片)白色	++	++	-	-	-	++	Chert V Aplite (あるいはQuartzite)	古玉層 花崗岩 ローム (輝石安 山岩)	Plate5 1-4

第50表-4 試料分析結果

(Q:石英 P1:斜長石 K-F:カリ長石 Bi:黒雲母 Ho:角閃石 Py:輝石)

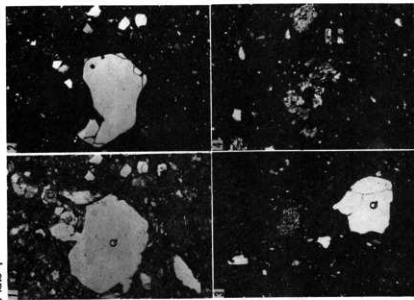
No.	産地	時代	産層	種別	技法	性質	肉眼的特徴	鉱物							備考	
								Q	P1	K-F	Bi	Ho	Py	Pyroxene		Amphibole
19	西	手島 時代(未定)	CF03ピット	酸化銅 塊成 球	放射線 口線部 ピット	集塊	(色)レンガ色 (組織)細粒・粗かい (鉱物)石英・長石・黒雲母 及びその他の有色鉱 物 (照片)白色・黒色	+++	+	-	+	-	+	Pyroxene Amphibole V Granite V Chert	鞍山岩 + 花崗岩 古生層	Plate 12 4
20	上	上	Bc02住 No.28	土師器 丸 内 環	丸 内 環	集塊	(色)こげ茶 (組織)細粒・粗い・斑状不定 (鉱物)石英多量(多付粒状の 白色鉱物認められる (照片)アズキ色・白色	+++	+	+	-	-	++	Chert Quartzite Hornfels Granite	古生層 花崗岩 ロ一ム (輝石鞍山 岩質)	Plate 16 1-13
21	同	上	C-03住 No.19	土師器 丸 内 環	丸 内 環	同上	(色)こげ茶 (組織)細粒・粗い (鉱物)無色鉱物多い (照片)茶色	+++	+	-	-	-	-	Quartzite	古生層 花崗岩	Plate 16 4
22	大	同	CF05住 No.19	土師器 丸 内 環	丸 内 環	同上	(色)オス1 (組織)細粒・粗い (鉱物)石英が多量(多付粒状の 白色の 鉱物を含む (照片)白色のみ	+++	++	+	-	-	+	Chert V sandstone	古生層 花崗岩 ロ一ム (輝石鞍山 岩質)	Plate 17 1-2
23	同	上	Dc-00E Q1	酸化銅 塊成 球	放射線 口線部 球	同上	(色)黄灰 (組織)細粒・粗い (鉱物)石英多い。柱状の有 色鉱物を含む。 Ho:Zn-黄銅色、X=銅色、自然 mecoを含む。 その他:シルク、火山ガラス、鉄鉱	+++	++	+	++	+++	-	Granite Hornfels	花崗岩 古生層 + + ロ一ム	Plate 17 3-4 Plate 18 1-4
24	同	上	同	土師器 丸 内 環	丸 内 環	同上	(色)黄灰 (組織)細粒・粗い (鉱物)石英・有色鉱物多 量 (照片)白色	+++	+	-	-	-	-	Chert Hornfels Granite	古生層 花崗岩	Plate 19 1-4
25	新	同	Bt15住	土師器 丸 内 環	丸 内 環	同上	(色)黄灰 (組織)細粒・粗い (鉱物)石英・有色鉱物多 量 (照片)レンガ色及び灰黒色	+++	++	+	+	-	+	Chert V Quartzite (あるいはAndite)	古生層 花崗岩 + + ロ一ム	Plate 20 1-4



第110図 胎土分析試料写真図

※番号は第49表に同じ

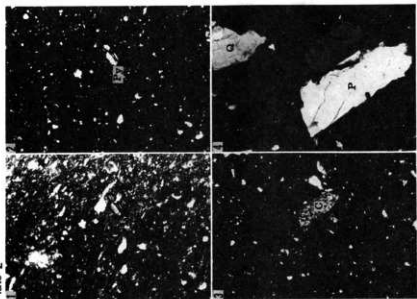
Plate 1



- 第3. 須藤源(注) 品土種：福岡県太田方八丁
 1：多数の石英と斜長石、シリカ結晶の塊にチャート薄片を含む。(平行ニコル)
 2：同上(交叉ニコル)
 3：チャート薄片(交叉ニコル)
 4：アブライト薄片(交叉ニコル)

第1111-1図 試料顕微鏡写真図

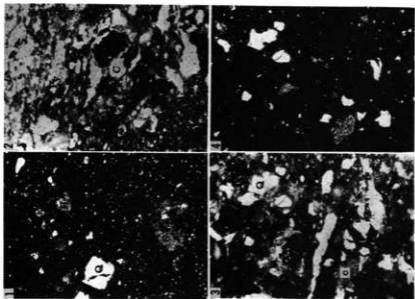
Plate 2



- 第3. 須藤源(注) 品土種：江刺市須藤分子
 1：石英、斜長石の結晶と斜方輝石の柱状結晶より構成される。斜方輝石は多数
 質の反応線を持つことが多い。(平行ニコル)
 2：同上(交叉ニコル)
 3：チャート薄片(交叉ニコル)
 4：カーネリアン結晶を含む斜長石と石英の結晶(交叉ニコル)

第1111-2図 試料顕微鏡写真図

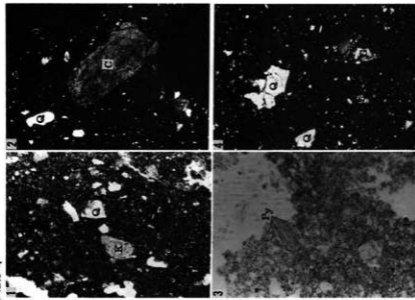
Plate 3



第3図 試料顕微鏡写真真図
 No.2. 頂部部(15). 供土塊: 水産物製成
 1: 多量の石灰(一部は赤色石灰)と長石類の薄片結晶及びチャート、ホムンツェルス、矽石を含む。(横交ニコル)
 No.4. 頂部部(15). 出土地: 北上川礫沢
 2: 石灰と少量の長石類の薄片結晶、及び多量のチャート薄片より構成される。粒状の斜方解石がみられる。(平行ニコル)
 3: 同上(平行ニコル)
 4: 同上(横交ニコル)

第111-3図 試料顕微鏡写真真図

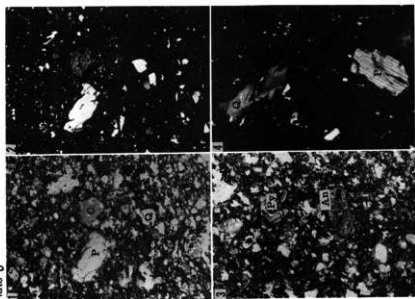
Plate 4



第4図 試料顕微鏡写真真図
 No.3. 頂部部(15). 出土地: 赤土郡の上
 1: 多くの石灰と長石類の薄片結晶より構成される。長石類はかなり変質している。
 2: 石灰と多くのチャート薄片と長石類の薄片がみられる。(横交ニコル)
 No.5. 頂部部(15). 出土地: 赤土郡石田
 3: 普通層の自然粒状結晶、ローム起源。(平行ニコル)
 4: 石灰、斜長石の薄片結晶の他にチャート、石膏層などの薄片から構成される。(横交ニコル)

第111-4図 試料顕微鏡写真真図

Plate 6

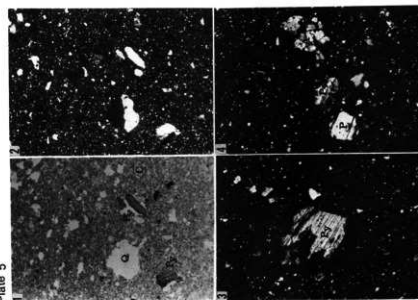


No. 7. 須磨郡(石) 出土物：香沢市南水中

- 1: 石英、斜長石の結晶塊とチャート薄片がみられる。(平行ニコル)
- 2: 同上(交叉ニコル)
- 3: 主にガラス質葉山切片を含む。(平行ニコル)
- 4: 浸蝕消光を示す花崗岩起源の石英とアルバイト双晶を含む斜長石。(交叉ニコル)

第111-6図 試料顕微鏡写真図

Plate 5



No. 6. 須磨郡(石) 出土物：本庄南部分層

- 1: 石英、斜長石の結晶塊と自形の斜方輝石より組成される。(平行ニコル)
- 2: 同上(交叉ニコル)
- 3: 斜方輝石(交叉ニコル)
- 4: Y-ブライト岩(交叉ニコル)

第111-5図 試料顕微鏡写真図

Plate 7

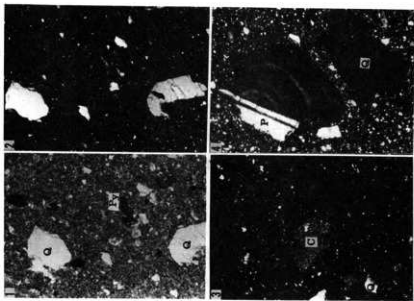


Fig. 7. 須磨砂 (採) 出土地：水沢市石川

- 1 : 石英、斜長石の硬質結晶と少量の斜方輝石などから構成されている結晶(暗色)がかなり含まれる。(厚目ニコル)
- 2 : 同上(薄目ニコル)
- 3 : 斜方輝石(薄目ニコル)
- 4 : 著明な歪みを受ける斜長石と石英(薄目している)。(薄目ニコル)

第111-7図 試料顕微鏡写真図

Plate 8

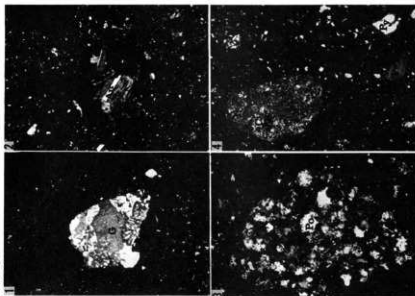
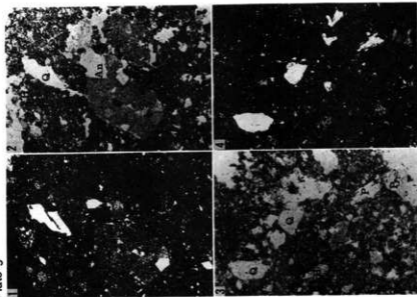


Fig. 8. 江刺式土層 出土地：水沢市石川

- 1 : 石英、斜長石、斜方輝石、石英の硬質結晶を含む。(薄目ニコル)
- 2 : 斜方輝石、斜長石と石英、石英の硬質結晶を含む。(薄目ニコル)
- 3 : 斜方輝石(薄目ニコル)
- 4 : 石英、斜長石、斜方輝石の後、チャート、ホルンフェルスの存在が多い。(薄目ニコル)

第111-8図 試料顕微鏡写真図

Plate 9



No.10. 江刺式土器

出土地：水沢石田

1：斜方輝石集合体(透文ニコル)

2：同上(平行ニコル)

No.11. 土師器(腰?)

出土地：水沢西大塚

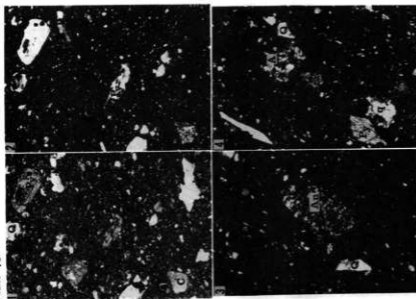
3：花崗岩結晶の石英、斜長石の薄片を主とする破片か

なる。(平行ニコル)

4：同上(透文ニコル)

No.11-9 図 試料顕微鏡写真図

Plate 10



No.11. 腰器(腰?)

出土地：水沢西大塚

1：石英、斜長石、斜方輝石の集にチャート、ホルンフェルスなどの破片を含む。(平

行ニコル)

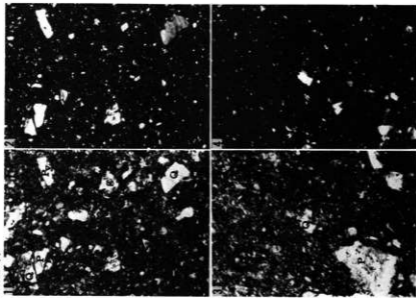
2：同上(透文ニコル)

3：輝石集合体

4：斜長及びアブライト薄片(透文ニコル)

No.11-10 図 試料顕微鏡写真図

Plate 11

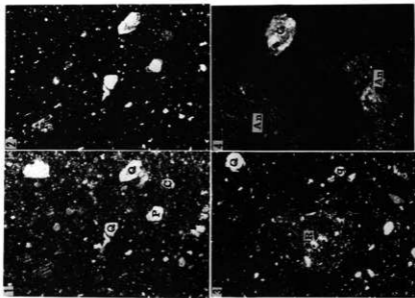


№13. 輝石類(輝) 基土塊：水沢田今裏
 1：石英、斜長石、輝石類の結晶片とチャート、流石などの岩片から構成される。火山ガラスを多く含む。(平行ニコル)
 2：同上(垂直ニコル)

№14. 王冠岩(輝) 基土塊：水沢田今裏
 3：石英、斜長石の結晶の破片から構成される。岩片としてチャートが含まれる。(平行ニコル)
 4：同上(垂直ニコル)

第111-11図 試料顕微鏡写真図

Plate 12

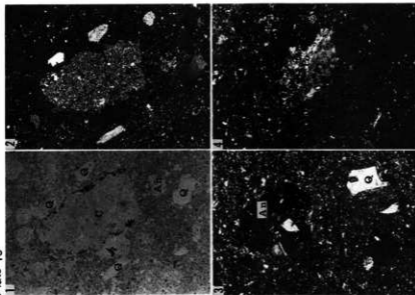


№15. 輝石類(輝) 基土塊：水沢田今裏
 1：石英、斜長石、輝石類の結晶片とチャート岩片より構成される。少量のリン鉱石も含まれる。(平行ニコル)
 2：同上(垂直ニコル)

№16. 王冠岩(輝) 基土塊：水沢田今裏
 3：流紋岩(輝)岩片(流紋ニコル)
 4：少量の輝石類の結晶片とチャート岩片を含む(流紋ニコル)

第111-12図 試料顕微鏡写真図

Plate 13

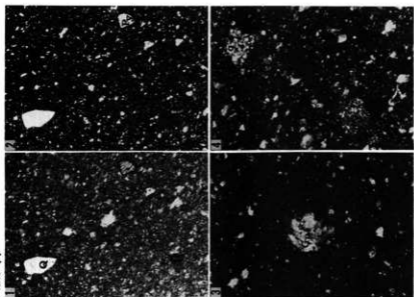


№13. 試験試片(断) 母土塊: 全々崎町島ノ海田

- 1: 石灰、斜方輝石の微晶とチャート、炭酸塩などの微晶からなる。(平行ニコル)
- 2: 同上(垂直ニコル)
- 3: ガラス質の母粒、黒ガラス粒は全くみられぬ。(垂直ニコル)
- 4: 輝石(垂直ニコル)

第111-13図 試料顕微鏡写真図

Plate 14

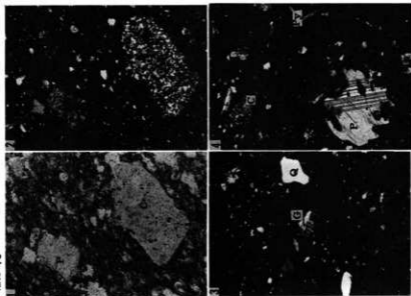


№14. 試験試片(断) 母土塊: 全々崎町島ノ海田

- 1: 石灰、斜方輝石、斜方輝石の微晶の微晶が多い。斜方輝石は微晶の孤立線を有する。(平行ニコル)
- 2: 同上(垂直ニコル)
- 3: 炭酸塩の微晶(垂直ニコル)
- 4: チャート及び輝石の微晶(垂直ニコル)

第111-14図 試料顕微鏡写真図

Plate 15

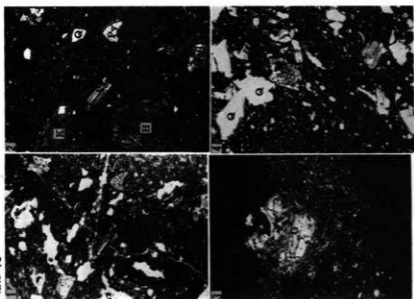


No. 14. 明礬部のみ 最上地：金ヶ崎町西側

- 1：石英、斜長石、斜方輝石の結晶塊、チャート、珪岩、花崗岩などの岩片より構成される。(平行ニコル)
- 2：珪岩
- 3：同上(垂直ニコル)
- 4：珪岩を占める斜長石、及び斜長石の斜方輝石。(垂直ニコル)

第111—15図 試料顕微鏡写真図

Plate 16

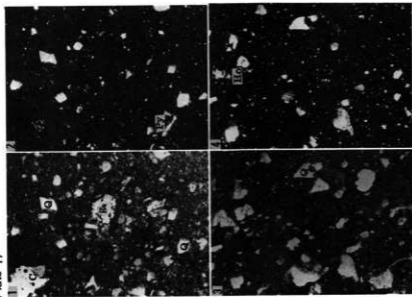


No. 15. 主輝部のみ 最上地：金ヶ崎町上野田

- 1：石英、長石の外、火山噴出物の自然の斜方輝石のみからなる、チャート、ホルンブレンダ、珪岩、花崗岩の岩片とともに認められる。(平行ニコル)
- 2：同上(垂直ニコル)
- 3：花崗岩質岩片(垂直ニコル)
- 4：主輝部(石英と斜長石)の輝石及び珪岩の岩片のみからなる。(平行ニコル)

第111—16図 試料顕微鏡写真図

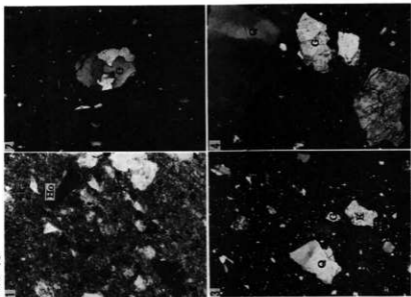
Plate 17



- No.22. 硬磁石 (Hf) 黒土層：石島谷町大塚
 1：石英、斜長石、輝石の結晶の他に、チューートの残片が多くみられる。火山ガラスも散在している。(平行ニコル)
 2：同上(透交ニコル)
 No.23. 土輝石？(Hf) 黒土層：石島谷町大塚
 3：石英、長石、斜長石、輝石等とチューートなどから構成される。ほとんど結晶が破片である。(平行ニコル)
 4：同上(透交ニコル)

第111-17図 試料顕微鏡写真図

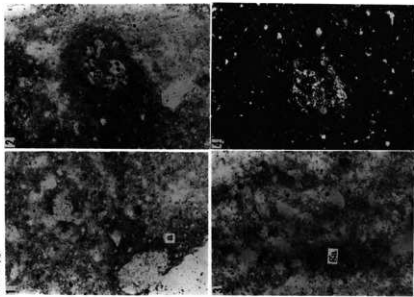
Plate 18



- No.24. 土輝石？(Hf) 黒土層：石島谷町大塚
 1：角閃石の柱状結晶。基質には微小な斜長石やトルコンをどめられる。(平行ニコル)
 2：粗面岩破片(透交ニコル)
 3：粗面岩破片と石英及び角閃石の破片状結晶(透交ニコル)
 4：3を拡大。石英はほぼ消失を示し、角閃石はかたまり状で、両者は粗面岩の破片である。(平行ニコル)

第111-18図 試料顕微鏡写真図

Plate 19

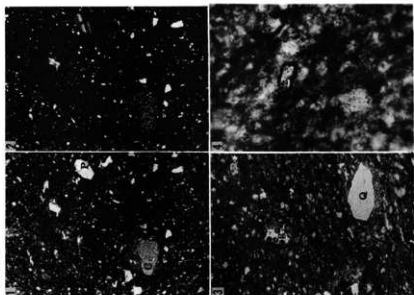


NaCl, 土曜部(特) 市上層: 石高野町大池産

- 1: 石英の破片が結晶を主とし、少量の斜長石を作る。さらに微小なザクロ石、リン石、ジルコンなどの自然結晶が認められる。岩石としては、チャート、ホルンブレンダ、花崗岩などの岩石がみられる。(平田ニッポル)
- 2: ホルンブレンダ岩片(平田ニッポル)
- 3: 形状で高い相似率を有しているのがザクロ石、斜長石のものが主にジルコンとリン石である。(平田ニッポル)
- 4: 花崗岩片、かなり変質している。(横安ニッポル)

第111-19図 試料顕微鏡写真図

Plate 20



NaCl, 土曜部(特) 市上層: 赤坂山無名産

- 1: 石英、石英石の破片破片とチャート岩を含む。(平田ニッポル)
- 2: 同上(横安ニッポル)
- 3: 多量量の尖晶石が認められる。黒鉛が酸化をしてから平輝である。(平田ニッポル)
- 4: ジルコンの柱状結晶、無色、消滅されている。(横安ニッポル)

第111-20図 試料顕微鏡写真図

分析結果に関する若干の問題提起

胎土分析の結果は以上のとおりである。分析の目的は古代各期の土器流通検討の基礎資料の蓄積にある。現状での即断は避け、提起された新しい問題点のみをあげておく。

(1) 素地粘土の供給源に、北上川河東の地域が想定されるものが多い。それは奥羽山脈直近の大地渡出土のものにも該当するところであった。したがって製品のみならず、素地粘土の移動の可能性をも想定する必要がある。今後は北上河西の粘土の分析が不可欠となる。さらに、既検出の須恵器窯跡周辺地域の粘土の分析も当然必要である。なお高橋文明氏によると、江釣子村（北上市藤沢窯跡と同一段丘崖・その西方）にも平安時代初期（ヘラ切り・無調整）の窯跡の存在が考えられる由である。

(2) 奈良時代末期集落出土の須恵器の素地粘土の供給源も同様に想定されたところから、該期における須恵器の在地（岩手県南部）製産の可能性をも想定する必要がある。これは既に沼山源喜治氏の発表されたところでもあった。宮城県北の資料の分析・比較、窯跡そのものの探査などが必要である。

(3) 江別式土器も同様であった。この種土器の製作者に一定の定着性を想定できることとなり、従来から看取された²土着的要素、の背景説明の一つとなしえよう。土師器類と比較し、その含有物が大きく異なる事実もあり、東北地方出土の同種資料、土師器、弥生式土器などとの比較が必要となろう。

(4) より基礎的作業とし、(1)で述べた粘土類の、耐火性その他の須恵器の素地粘土としての適否の分析・確定を急ぐ必要もある。

(5) 分析対象器種をさらにふやす必要がある。とくに円筒埴輪などの分析も不可欠である。

末筆ではあるが、試料を提供された北上市教育委員会、江刺市教育委員会、水沢市教育委員会に深甚の謝意を表す。これらの協力なしには本試みはなしえなかったであろう。

2. ¹⁴C測定結果

日本アイソトープ協会

焼失家屋と推察されるDf59竪穴住居跡内出土の炭化材が測定試料である。材質はケヤキの古木の一部であり、住居内に於けるあり方から家屋構造に関わる材と思われる。但し、採取の際に、固形剤としてバインダーを数回塗貼している。

日本アイソトープ協会による測定結果は 1650 ± 75 y B.P. (1600 ± 75 y B.P.) と計算されている。換算年代は年代誤差を2倍にして算出すると150～450年代となり、本遺跡の編年観よりかなり古い時期にあたる。このことについては、既述のバインダー処理が測定値の誤差を大きくしたようであり、日本アイソトープ協会に問合わせた結果、石油製品による接着剤等が混じっ

ている場合は、製品中のカーボンが付加され、年代が古く測定されるとの解答を得ている。従って当測定に関わる試料としては不適切な処理であったことを反省している。

尚、年代は ^{14}C の半減期5730年(カッコ内はLibbyの値5568年)に基づいて計算され、西暦1950年より遡る年数 (years B.P.)として示されている。

3. 獣骨の鑑定結果

岩手大学農学部助教授 兼 松 重 任

1980. 12. 26

- No. 1 鹿の脛骨近位端である。 (写真No. 1)
No. 2 猪あるいは豚の腸骨破片である。 (写真No. 2)
No. 3 中型獣類の頭蓋骨破片である。頭蓋腔面には指圧痕が見られる。 (写真No. 3)
No. 4 牛の心骨に似ているが、骨の組織はみられない。立体鏡を用い25倍、40倍で観察したところ、削った面に石英粒、雲母などがみられる。岩石あるいは人工的なやきものである。 (写真No. 4)
No. 5 大型獣類の頭蓋骨破片である。指圧痕がみられる。 (写真No. 5)



No. 1



No. 2



No. 3



No. 4



No. 5

第112図 獣骨片写真図

付記

- No.1・2はC168地点Ⅱ層シルト上面よりの検出である。採取年月日 1975年10月25日
No.3はEa50竪穴住居跡カマド焼土中からのものである。＊ 1976年6月10日
No.4はDj18竪穴住居跡覆土中からのものである。＊ 1976年6月5日
No.5はBe50竪穴住居跡カマド内からのものである。＊ 1975年12月1日

以上5点についての鑑定結果である。このうちNo.5の大型獣類の頭蓋骨破片については、断定するものではないが、クマが想定され得るかもしれないとのコメントを得ている。

4. 植物遺体鑑定結果

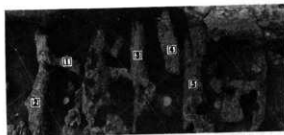
Ea50竪穴住居跡内焼土中から出土した種子について、林業試験場東北支場・村井三郎氏による鑑定結果を得ている。1.9×1.5cm大の小粒のものであることからノモモの種子とされる。なお、本頁中に示した写真図は、実物の約2倍に拡大したものである。



第113図 ノモモ種子拡大写真図

5. 材質鑑定結果

焼失家屋と判断されるBd71、Df59、Eg09竪穴住居跡は何れもⅡ期に属する遺構である。このうちBd71竪穴住居跡は遺構保存の処理をしているため、炭化材の材質については不明であるが、他の2棟については、岩手県木炭協会経営指導員・早坂松次郎氏による肉眼的観察結果を得ている。同氏によれば、本遺構出土炭化材はケヤキの古木・クリの木等の材質によるとのことである。多くの場合はケヤキの材質であるが、Df59竪穴住居跡の炭化材については中央に向かって放射状に存す材と壁に沿う形の横木的な材とで材質が異なっているようである。即ち前者はケヤキ、後者はクリ材となっている。このことは家屋構造に関わる木材の選択的利用があったことをも意味しているといえよう。下図における1がクリ材であり、2以下はケヤキ材である。



第114図 Df59住居炭化材

6. 土器片蛍光X線分析結果

岩手県工業試験場

第51表 須恵器・土師器・江別式土器の蛍光X線法による定性分析結果

No.	試料名	検 出 元 素										
		Al	Si	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Ni	Zn	Sr	Zr
1	須恵器	○	○	○	○	○		○			○	○
2	須恵器	○	○	○	○	○		○				○
3	須恵器	○	○	○	○	○	○	○			○	○
4	須恵器	○	○	○	○	○	○	○			○	○
5	須恵器	○	○	○	○	○		○				○
6	須恵器	○	○	○	○	○	○	○			○	○
7	須恵器	○	○	○	○	○		○			○	○
8	須恵器	○	○	○	○	○		○			○	○
9	須恵器	○	○	○	○	○		○			○	○
10	江別式	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○
11	須恵器	○	○	○	○	○	○	○			○	○
12	土師器	○	○	○	○	○	○	○			○	○
13	須恵器	○	○	○	○	○		○		○	○	○
14	土師器	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
15	須恵器	○	○	○	○	○		○		○	○	○
16	土師器	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○
17	須恵器	○	○	○	○	○		○		○	○	○
18	須恵器	○	○	○	○	○		○		○	○	○
19	土師器	○	○	○	○	○		○				○
20	土師器	○	○	○	○	○	○	○		○		○
21	須恵器	○	○	○	○	○	○	○			○	○
22	須恵器	○	○	○	○	○	○	○			○	○
23	土師器	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
24	土師器	○	○	○	○	○		○		○	○	○
25	須恵器	○	○	○	○	○		○			○	○

材 陰 極：W, Cr
分 光 結 晶：LIF, EDDT
(測定条件) 電 圧 ・ 電 流：50 kv, 40 mA
検 出 器：シンチレーション計数管 (SC)

(註) 蛍光X線法による分析では、含有する元素に特徴的なものは見出されなかった。

※試料番号は胎土分析結果と同じ。

7. 鉄製品・鉄滓分析結果

岩手県工業試験場

第52表 鉄製品・鉄滓の定量分析結果

No.	試料名	遺跡名	化 学 組 成 (%)				
			Total Fe	MnO	SiO ₂	TiO ₂	C
36	鉄製品	石田・Cg56	48.74	0.03	15.76	0.10	0.71
37	鉄製品	石田・C156	53.32	0.12	18.06	4.60	0.21
38	鉄製品	石田・Dd03	54.47	0.06	7.11	0.04	1.25
39	鉄滓	石田・Da56	46.44	0.05	18.11	0.14	2.34
40	鉄滓	成沢	41.85	0.47	19.48	9.56	0.21

第53表 鉄製品・鉄滓のX線解析法による定性分析結果

No.	検 出 鉱 物					
	W	G	F	M	Q	T
36		○			○	
37	○		○	○		
38		○		○	○	
39		○		○	○	
40			○			○

〔註〕

W : Wuestite(FeO)

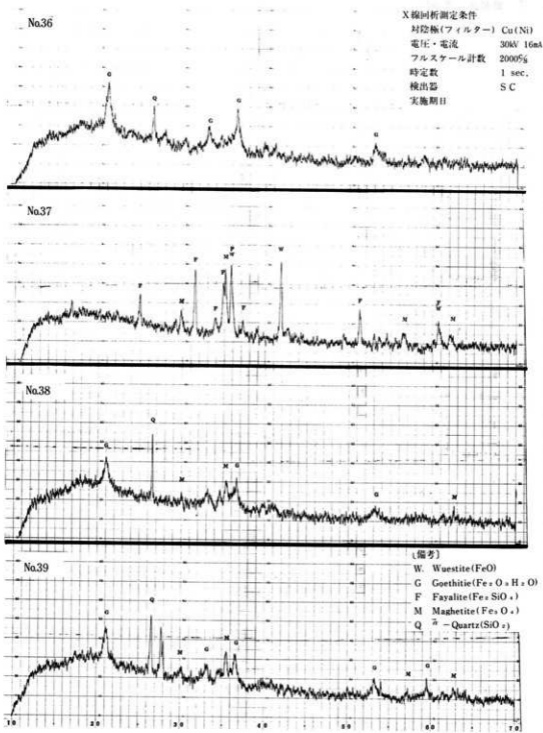
G : Goethite(Fe₂O₃·H₂O)F : Fayalite(Fe₂SiO₄)M : Magnetite(Fe₃O₄)Q : α-Quartz(SiO₂)T : オルトチタン酸第一鉄(Fe₂TiO₄)
(Fe₂TiO₄)

第54表 鉄製品・鉄滓の蛍光X線法による定性分析結果

No.	検 出 元 素									
	Al	Si	K	Ca	Ti	Cr	Mn	Fe	Ni	Zr
36	○	○	○	○	○		○	○	○	
37	○	○	○	○	○		○	○		○
38	○	○	○	○	○		○	○		
39	○	○	○	○	○		○	○		
40						○				

〔備考〕 化学分析値についてみると、全体としてはSiO₂が多いという特徴が挙げられるこれらは精練過程にあるか、鉄滓であると思われるが、するとMnOの含有量が少ないという事実と矛盾する。つまり、このSiO₂はあとから粘土・砂等の不純物として混入してきた可能性が大きい。

また、これら試料のうち、No.37とNo.40が非常にチタンの含有量が多く、特にNo.40ではFe₂TiO₄という化合物がX線解析により見出されている。これらのチタンは砂鉄に由来するものと考えられる。また、No.37、No.40は多孔質であるという点でも他と異なっている。



第115図 鉄滓、鉄製品X線回折グラフ

写真図版

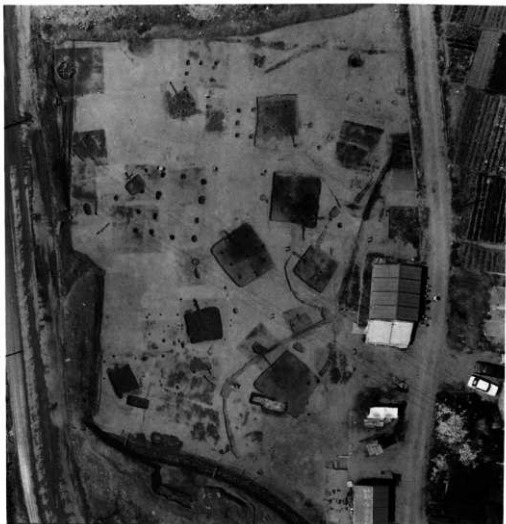




写真図版1 水沢 石田遺跡全景航空写真



B・Cブロック航空写真
6号溝-1より北側



C・D・Eブロック航空写真 6号溝-1より南側
写真図版 2

Bc68竪穴住居跡
西側より撮影
右上はBd77住



Bd80竪穴住居跡
北側より撮影



Bd71竪穴住居跡





同 西北隅



同 西壁中央付近



同 南壁付近